沖つ国と竜の船

梶川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沖つ国と竜の船

【Nコード】

N1350X

【作者名】

梶川

【あらすじ】

異世界に召喚された中学生の少女・志穂は、呼ばれた理由も分からないまま、美しい少年に殺された。気付けば死霊と化していた彼女は、死霊術士を名乗る不思議な青年と出会い、果てを目標して彼と共に旅をはじめが……。海のかなたに死者を運ぶという竜の船の伝承を巡る、幽霊少女と死霊術士の青年の物語。

プロローグ

いつの間にか見知らぬ場所に立っていると気付いてからこの方、一体何度「これは夢だ」と思ったことが、志穂にはもうよく分からない。

学校に登校しようとしていたはずなのに、黒いセーラー服を着たままで奇妙な絵が描かれた石床の上に立ち尽くしていたことも奇妙なら、その周囲に山ほどの人間がいて、とても日本人には見えない彼らが皆一様に志穂の方を見つめていることも奇妙だった。

おまけに老若男女を問わず歓喜の声を上げたり、涙ぐむ者まで続出していることなど、夢だと思わなければとても理解のしがたい、奇妙で奇怪な出来事である。

だが、それだけならまだ良かった。

夢だとしても、人が何やら喜んでいる光景を見るとというのは、そう悪い夢ではない。

問題は、何度「これは夢だ」と念じても、一向にこの夢が覚める気配がないということだった。

群衆の中からかなり年老いた風の老人が進み出て、やはり涙ぐみながら志穂に向かって意味不明な外国語で話しかけてきたので、とても困っていたのは確かだ。

けれども彼女の困惑を違うものに塗り替えたのは目覚めではなく、突然響いた悲鳴だった。

男のものか女のものかも判別できないほどの金切り声は、志穂を取り囲んでいる群衆の背後から聞こえてきたようだった。

悲鳴はすぐに怒号に代わり、また悲鳴と怒号が交錯した。

訳の分からないまま、志穂は狼狽した様子の老人に腕を引かれ、傍にいた幾人かの女性に囲まれて、その場から離れた。

右往左往する人々の間をすり抜けて、扉を潜り、見知らぬ建物の内部を駆ける。どこをどう走ったものか、息が切れそうになった頃に、胸や腕に衝撃が走った。

膝からその場に崩れ落ちた志穂と同じように、老人や女性たちもまた、地面に膝をついていた。中には顔から倒れ伏す者もいた。

志穂は立ち上がるうとしたが、足に力が入らなかった。

不意に、視界がぱっと赤く染まった。

それが血の色だと気付くのに、随分時間が掛かった。だが何故血が視界を赤く染め上げているのかということについては、志穂の理解の及ぶところではなかった。

気付けば、彼女の身体は地面の上に横たわっていた。

視線の先では、赤く染まった老人や女性たちが、志穂と似たような姿勢で倒れている。

(痛い)

呻こうとして、あまりの痛みにそれすらも叶わなかった。

志穂には分からなかった。

どうしてセーラー服が赤く染まっているのか、どうして身じろぎしようとするだけで呻くことすらできないほどの苦痛に襲われるのか、どうしてあの老人たちはあんなに赤く濡れていて、まるで壊れた人形のように動かないのか。

何一つ、志穂には理解できなかった。

これが夢ならば、どうして未だに覚めないのか。

どれほどの時間、堪え難い痛みと共にいただろう。何時間も経っているような気もするし、ほんの一瞬でしかないような気もした。強い血の臭いのせいで、嗅覚はすっかり麻痺してしまっている。つい先程まで、遠くから近くからひっきりなしに上がっていた悲鳴や怒号も、今はもう聞こえない。

視界は霞み、痛みに耐えて伸ばした手も虚しく空を切る。

周囲に倒れ伏した人々はもう起き上がらない。

夢は未だ覚める気配がない。

彼女に残っているのは、痛みだけ。

胸や腕に突き刺さったいくつもの矢と、切り裂かれた腹がもたらす、苦痛だけだった。

……ふと、志穂は、誰かが自分の顔を覗き込んでいることに気が付いた。

いつからそこにいたのだろう。

死体の散らばる空間にはまったく似つかわしくない、輝く月の光に似た金の髪に深い海のような青い目をした、美しい少年だった。

その整った顔立ちは、まるで精緻な彫像のようだ。造形美、という言葉がこれほど似合う人間はこの世にいないのではないかとすら思える。

その美しい少年が、じっと志穂を見つめている。

二つの青い瞳の表面に、血塗れで倒れ伏すセーラー服の少女の姿が映り込んでいる。

（ たすけて ）

声を上げようとしても、喉から出るのは荒い呼吸ばかりだった。

（ いたい…… たすけて…… ）

それでも少女は少年に向かって、必死に訴えかけようとした。助けをくれと。

こんなところで、こんな風に、死にたくない。

死にたくないのだと。

少年は何か哀れむような調子の言葉を、微笑みと共に呟いた。ぞととするほどに美しく、邪気のない微笑みだった。

微笑んだまま、彼は腰に吊るした剣を鞘から引き抜き、振り上げた。

鋭利な刃が白銀に光り、

(たすけ……)

体を買いた衝撃と共に、少女の意識は闇へと落ちた。

第一話 廃墟

まどろみの中で、志穂は波の音を聞いていた。

固く閉じられた瞼に響くその音は、何故だかとても懐かしい感じがした。

と同時に、ひどく恐ろしい感じもする。

波音に誘われて向こう側に行ったが最後、打ち付ける波に足を取られ、海の底へと流され沈んでしまいそうだったから。

こちらにおいて、と波音が呼ぶ。

流れに身を委ねて。何もかも忘れて。

お前の在るべきところ、安らげる場所は波間にしかないのだと告げている。

志穂は動けない。

それでも波音は、少女を誘うように鳴り響き続けている。

その音を振り払って、目を開けた。

……目の前に人がいる。

肩幅からすると男性のようだ。継ぎ当てだらけの外套に身を包み、こちらに向けた背を丸め、頂垂れながらその場に座り込んでいる。

その傍らには彼の所有物らしき白い杖と、革の包みが転がっていた。

細身の、しかし少女よりはずっと逞しいその背中をぼんやりと見つめながら、志穂は首を傾げた。自分がつい先程まで何をしてたのか、まったく思い出せなかったのだ。まるで、今ちょうど目が覚めたばかりであるかのよう。

そもそも自分とは何だったろうか、という根本的な点に思考が及びそうになったとき、かすかな嘆息が耳に届いた。

「……もはや……」

低く掠れた青年の声は、少女の目の前にいる人物から発せられたものらしかった。

「一族も……竜も……父上、母上、俺はもう……」
ぼつりぼつりと咳かれる、断片的な言葉。

それを聞いていると、何故だろうか 声の主が抱いている感情が胸に直接流れ込んでくるようで、ひどく苦しくなる。

青年は深く絶望していた。

志穂には想像も及ばない、何かとても悲しい出来事に打ちのめされて、ただ一人孤独に嘆いていた。

「……あの」

堪らず、志穂は声をかけた。自分でもよく分からないが、これ以上彼を見ていられなかったのだ。

少女の存在に気付いていなかったのか、青年は驚いた様子で振り返った。

乱雑に切られた短い黒髪。見開かれた目の色は紫で、肌はおそろしく白い。彫りの深い顔立ちはとても日本人には見えないが、外国人の割には、先程の咳きはとても流暢な日本語だった気がする。

日本語が通じるなら、まずははじめましてと言つべきだろうか。

いや、こんにちはの挨拶の方が先かもしれない。

声をかけたはいいものの、それからどうしていいか分からずに一瞬黙り込んでしまった少女を、青年は少し困ったような目で見つめた。

少なくとも睨まれなかったことに勇気づけられた志穂は、とにかく挨拶をしようと口を開こうとしたが、先手を打ったのは青年の方だった。

「ああ……まだ、残っていたのか」

彼はそう呟くなり、志穂の身長ほどもある長さの白い杖を手に取って立ち上がると、その杖の先端を少女に向けたのだ。

「他の 山の民 は皆、船出した。お前も早く後を追うがいい。俺

が手助けしてやるから」

志穂を見下ろす青年は無表情だったが、その口調は穏やかで、子供にやんわりと言い聞かせている保父さんのようでもあった。

だからいきなり杖を突きつけられても少しばかり驚いただけで、さほどの恐怖は感じなかった。とはいえ、彼が何を言っているのかちっとも理解できなかったのは確かなので、志穂は返答することもできずに目を瞬かせるしかない。

「何か心残りがあるのか？ いや、こんなことになったのだ、ないはずがないな。だが、お前も 山の民 なら、船出せずに死霊としてこちら側に残ることがいかに世界と魂にとって危ういことか、よく知っているだろう」

山の民。船出。死霊？

不吉な言葉が耳に入ったそのとき、脳裏を何かが掠めたような気がした。

その一瞬に感じたひどい悪寒を振り払うように、志穂はくっついていた上唇と下唇を引き剥がして口を開けた。

「あ、あの……よく分からないけど、私、山の民 なんていうのじゃない……です」

「何？」

青年は怪訝そうに眉をひそめた。しかしすぐに何事か考えるような顔をして、突きつけていた杖を下ろした。

「……いや、そうだな。確かにお前の容姿は 山の民 のものとは少し違っている。ならばお前は何者だ？ まさかアーフェルの民ではあるまい」

またよく分からない言葉が出た。

アーフェル、外国の地名だろうか。それなら少なくとも自分には関係ない。

志穂は首を横に振ると、とりあえず名乗ることにした。

「ええと……私は、岸边志穂、です。日本人、です」

言ってから、こんなにも流暢な日本語を喋る外国人なら、少女が

日本人であることくらい分かるかもしれないと思ったが、青年はますます怪訝そうな顔になった。

「キシベシホ？　それが名前なのか」

「えっ、あ、はい。　岸边が苗字で、志穂が名前で」

「シホ……」

真顔で名前を復唱され、志穂は少しばかり気恥ずかしいような気分になった。父や親戚以外の年上の男性に名前を呼び捨てにされたのは初めての経験かもしれない。

「ニホン人、といったか。ニホンというのがお前の国の名か？」

日本語を喋っているのに、日本を知らないとはどういうことだろう。疑問に思ったものの、口には出さずにこくりと頷く。

青年はしばらく考え込んでいたが、やがて得心したように顔を上げた。

「そうか……お前が、彼らの言っていたまれびとなのか」

柔らかかな、けれどもどこか悲しそうな声だった。

「……まれびと？」

「この世とは理の異なる世界、大いなる巡りの輪の内側にある別の世界から来訪した客人のことだ」

その言葉の意味を志穂が十分に理解できないでいるうちに、青年は深くため息を吐いて続けた。

「まれびともまた異界の人ならば、魂もあってしかるべき、か。…

…山の民　の人々はお前に申し訳ないと、すまないと言って泣いていた。どうか彼らを憎まないでやってくれ」

「……憎む？」

きょとんとした志穂を見て、青年はまた息を吐いた。細めた目に哀れみの色を宿しながら、淡々と言う。

「覚えていないか。お前は死んだ　殺されたのだ。おそらくは、

この里を襲撃したアーフェルの騎士団の手によって」

ぽかんと口を開ける他に、一体どんな反応ができただろうか。

この人は何を言っているのだろうか、と首を傾げようとして、不意

に志穂は気が付いた。自分が今いる場所の状態について、視界に入っていたにも関わらず、まったく意識が及んでいなかったことに。

改めて見渡したそこは、一言で形容するなら、廃墟だった。

元は石造りの建物だったのだらう。中程から崩れた柱や、黒ずんだ石壁、やはり黒こげになった燭台らしきものが見える。そのような残骸ばかりが転がる広い空間の真ん中に、石床のステージのようなものが設えてあって、志穂と青年はその上に立っているのだった。その石床もところどころが崩れたり剥がれていたり、焦げて黒ずんでいたり、ステージいっぱい描かれた絵が何か判別することはもう不可能だ。

ちらりと頭上を見上げると、嘘のように清々しい青い空が見えた。天井が崩落した形跡はなさそうなので、元から吹き抜けになっているのかもしれない。

いや、ここは確かに吹き抜けの空間だった、と志穂は不意に思った。思い出した、と言うべきかもしれない。自分はこの廃墟の建物を以前にも一度見たことがあると。

「ここは儀式を行うための大切な場所だったはずだ」

青年の声には、失われたものに対する哀悼の響きがある。

『あのとき』は夜だった。

このステージの上には満天の星空が輝いていて、篝火が焚かれていて。

「だがアーフェルの騎士団はここを土足で踏み荒らし、鉄と血で汚した。……そして奴らは、死体も何もかもすべて焼き払っていった

……」

その瞬間、志穂の脳裏に鮮明な光景が浮かび上がった。

奇妙な生き物が描かれた石床のステージの上。

歡喜する人々。

涙ぐむ老人。

突然の悲鳴。

赤い血。

堪え難い痛み。

美しい金髪の少年の微笑みと、そして。

少女はその場にしゃがみ込み、顔を手のひらで覆った。

嘘だ、と掠れた声で呟いた気がする。

だって、死んだならどうして自分はここにいるというのだろう。どうして目の前の青年と会話を交わしているというのだろう。

肩のところで切り揃えた髪も、手のひらに伝わる頬の熱も、セーラー服のスカートの皺だって、生きていた頃とまったく変わらないように思えるのに。

体のどこにも、血や傷の痕跡なんて見当たらないのに。

あるいはこれはまだ夢なのだろうか？ 夢ならどんなに酷いことが起こっても、不条理でも仕方ない。夢の中でさらに夢を見ることもあると聞いた。

夢ならばいつか目が覚める。

けれど 吐き気すらするあのおぞましい記憶、矢で射抜かれた痛み、体を貫いた剣の生々しい衝撃、あれらのすべてが夢だとはどうしても思えなかった。そう思い込むには、あまりにも生々しい記憶だった。

不意に頭に手を置かれる感触がした。

しゃがんだまま恐る恐る見上げると、片膝を付いた姿勢の青年は、優しいな手つきで志穂の頭をゆっくりと一度だけ撫でた。

「辛いことを言った。だが、事実だ。シホ、お前の肉体は死を迎え、魂は地上に留まって死霊と化したのだろう」

「……嘘」

「嘘ではない」

「じゃ、じゃあどうして、あなたと触れ合えるの」

青年は少し気まずそうな顔をした。問われたくないことのようにだった。

だがまずいことを言ってしまったかもしれないという引け目は、
確証を求める心によって打ち消された。志穂は言い募った。

「わ、私、生きてます。死んでない。だって喋れるし、透けてない
し、それに……」

「……手を」

言うが否や、青年は志穂の手首を掴み、半ば強引に石床の表面へ
と引っ張った。

叩き付けられる、と反射的に目を閉じたものの、予想した衝撃は
いつまで経っても感じられない。恐る恐る目を開けた志穂は、ひっ
と声を上げた。

自らの手首が、石床に半ば埋もれていた。

それはちょうど、砂場に掘った穴に手を入れ、そこに砂をかけて
埋めたときのようなだったが、無論、固そうな石床でそのような芸当
ができるはずもない。

志穂の腕は、どう見ても、物語に出てくる幽霊のように透けては
いない。

だが、少なくとも今の自分は真つ当な人間には不可能なことで
きる状態にあるのだと　恐怖に近い驚愕の中で、ようやく彼女は
理解しはじめた。

「驚かせてすまない。だがこうするのが一番手っ取り早いから」

青年は弁解するように言うと、志穂の手を石床の中から引き上げ
てから、掴んでいた手首を離した。

そして白い杖を握り直し、軽く持ち上げた。

「この世界の事情のためにお前を呼び出し、無為に死なせたこと、
船守の一族に連なるものとして心から詫びよう。この上はせめて、
死霊として世を彷徨い魂を摩耗させることなく、安らかに船出して
ほしい……」

青年の言葉は相変わらず難解だったが、志穂にも一つだけ理解で
きることがあった。

つまり、幽霊となったらしい少女に大人しく成仏してほしいと言

っているのだ、彼は。

呆然と見上げる志穂の前で、青年は小さく何かを呟きはじめた。あまりにも小声なので詳しい内容は分からなかったが、抑揚のない詩のようなそれはまるで呪文のようだ。

物語の中に出てくる魔法使いは、杖を片手に呪文を唱えて不思議を起す。

ならば彼は魔法使いなのだろうか。

哀れにも幽霊となった娘の成仏を手伝うような魔法が使えて、その力で有り難くも志穂を成仏させてやろうと呪文を唱えているのだろうか。

呆然としていた頭の中でその推測が形を成した途端、志穂は胸の内からふつふつと激しい感情が湧き上がるのを感じた。元々どちらかといえば大人しい性格で、ずっと平凡な日々を送ってきた十四歳の少女にとって、それは今まで滅多に感じたことのなかった怒りだった。

例え本当に自分が死んでしまつて幽霊になつたのだとしても、それでも志穂は今ここにいるのだ。それなのにこの青年は、死霊である志穂の存在すら消そうとしている。安らかに、などと優しくげに言われても、到底納得のできるものではない。

衝動的な感情に突き動かされるまま、彼女はそれを行動で示した。跳ねるように立ち上がると、長々と呪文を唱えている青年が持つ杖に飛びついたのだ。

「な」

杖の先端を抱え込むようにして、驚く青年の手から強引に奪い取る。杖はひんやりと硬く、長さの割に重みを感じなかった。

男性の力で本気で抵抗されては奪取は叶わなかっただろう。だが、青年にとって少女の行動は完全に予想外だったようで、志穂が奪つた杖を抱えたまま後ずさり距離を取っても、彼は呆然と彼女の行いを見ていた。

「勝手なこと言わないで！」

志穂は青年を睨み付けてそう叫んだ。

「死んだからって、幽霊だからって、そんなの関係ない！ 私はここにいるもの、ちゃんとここにいるんだから！ 消されたくないかない……！」

かなり甲高い声で喚いたはずだが、喉が苦しくなったり、嘔れるようなことはなかった。その事実の意味を意識の外へ追いやって、志穂は杖を抱える腕に力を込めた。

青年の紫色の瞳と、志穂の瞳が真っ向からぶつかる。

やがて青年は目を伏せ、頭を垂れた。

「……すまない」

ぎこちないその言葉には、疑いようのない真摯さが込められていた。

「山の民でもアーフェルの民でもない、何も知らないまればびとの娘に、配慮のない振る舞いをした。せめて意志を問うべきだった」

「……聞かれても、私は、消えたくないって答えます」

それでも頑なな口調を崩せない志穂の答えに、青年は顔を上げると眉をひそめた。

「だが……死霊として彷徨うことは、死者にとって決して幸せな道ではない。それは確かだ。ましてこの世界はお前の生まれた世界ではない」

「……でも、私、消えたくない」

志穂は駄々をこねる子供のように首を振った。

「消えたくない。帰りたい。……私のまま、家に帰りたい」

そう、志穂には帰るべき家があった。会社員の父、主婦の母。ごく平凡で、何の変哲もなく穏やかで退屈で、時折うんざりすることもあったあの家が、あの暮らしが、今は途方もなく懐かしく感じる。そんな少女をじっと見つめる青年が、彼女の言葉をどう思ったかは定かではない。

ただ彼はしばらく考え込んだ後、小さく息を吐くと、

「……分かった。お前の意志を無視して、船出を促すことは止めよ

う

と言った。

「本当？ ……あの変な呪文、もう唱えない？」

「ああ。お前に対しては、お前がそれを望まない限りは」

柔らかな口調の端々から、青年が志穂を気遣ってくれていることが伝わる。

基本的には優しい人なのだ、と志穂は改めて思った。愛想の良い微笑みを投げかけてくれるわけでもないし、口にする言葉も少々説明不足だが、彼の眼差し、言動、動作にも少女に対する劣りが感じられる。

志穂はみつともなく喚いたことを少し後悔した。強引に杖を奪って、あんなに非難するような声を上げなくても、もう少しいい抗議のやり方があったかもしれない。

「シホ、そろそろその杖を返してくれないか。それは母の形見なのだ」

そう言われて、志穂は慌てて杖を差し出した。まさかそんなに大切なものだったとは。

杖を受け取ったとき、青年は何やら顔をしかめた。

「……参ったな。これに憑いたか」

「え？」

「いや……」

青年は眉間に皺を寄せ、また何か考え込みはじめた。

そうして険しい表情で黙られると、青年の顔は少し怖く見える。

何せ志穂よりも年上の、見慣れない異国の風貌の男性だ。こんなよく分からない状況でなければ、こうやって会話を交わすこともなかっただろう。そう考えると、この夢のような状況がますます不思議に感じられた。

「シホ。お前は家に帰りたいと言ったな」

問いにこくりと頷くと、青年は真剣な面持ちで志穂を見据えた。

「この世界とまれびとの世界の繋がりがどうなっているか、俺もよ

くは知らない。お前を呼び出した 山の民 たちとて、多大な苦勞の末、一方通行の門をどうにか開いて呼び寄せたに過ぎない」

「……」
「だが……まればとは本来、海のかなた、 果て の向こうからやってくる存在なのだという」

言葉の意味を掴みかねて志穂は首を傾げた。

「 果て ……海……？」

「そう。アーフェルの西端、カイの海辺から遙か沖合、この世の果て と呼ばれる場所」

志穂は相変わらず分かりにくい青年の言動の意図を、じつくりと咀嚼するように考えた。

今までの会話を総合すると、ここは志穂の暮らしていた世界ではないらしい。

まったく別の、物語に出てくるような世界で、志穂はここではまればとと呼ばれる存在なのだ。

何故言葉が通じるのかなど色々疑問はあるし、容易には信じがたいことだが、自分が死んで幽霊になってしまったなどという事実よりは、まだ受け入れやすい話でもある。それに少なくとも、ここが日本の自宅の近くではないことは確かだった。

やがて彼女は淡い期待を込めて訊ねた。

「……その 果て の、向こうに行けば、帰れるかもしれない？」

「保証はできない。どうにもならない可能性も高いから、あまり期待はしないでほしい。だが、俺に提供できる手掛かりはこれくらいだ」

「 果て に行ったことはある？」

「行ったことはないが、道は知っている」

青年の答えは正直だ。

彼を信じてみよう、と志穂は思った。

消えたくない、帰りたいと喚いたところで、元より見知らぬこの土地で行く当てもない。蝋燭の火よりもか細い望みであっても、今

はそれに縋るしかなかった。

「……私、その 果て に行きたい」

志穂ははつきりとその意志を口にした。

無事に故郷に帰れたとして、既に死んでいるかもしれない身でどうするのか、その点について彼女はあえて考えなかった。帰ればきつとすべてが解決してめでたしめでたしになると、そう思っていたわけではないにしろ、このときの彼女はただ、帰りたいという強い欲求だけに突き動かされていた。

少女の返答を聞いて、青年はわずかに、本当にほんのわずかにだが、唇の端に微笑みを浮かべた。

「ならば契約を交わそう。シホ、俺はお前を必ず 果て まで連れて行く。お前はそれまで、なるべく俺から離れることなく付いてきてほしい」

それは契約と呼べるのだろうか、中学生の志穂でも疑問に感じるところだった。わざわざ付いてきてくれなどと頼まれなくても、志穂は青年に付いていくしかないのに。

「付いていくだけでいいの？」

「ああ」

「他に何か……、思いつかないけど、何かしなくてもいいの？」

「いや。お前のような弱い娘に、代償を求めるほど無体ではないし、困ってもいない。しいて言うなら、俺が何か忠告したときは、少し耳を傾けてくれると助かるが」

志穂は内心で少し赤面する思いだった。親切に申し出てくれた人にわざわざ代償のことを訊ねるのは、かなり失礼な振る舞いだったかもしれない。

第一、ただの中学生の娘にできることなどたかが知れている。

「気にするな。付いてくると約束してくれるだけで、俺にとつては十分だ。この杖に取り憑いたまま、どこかに行かれると困るからな」
どういう意味かときよとんとする志穂に対し、青年は肩をすくめるだけですぐには答えなかった。彼はしばらく考える素振りを見せ

てから、

「……死霊は概して曖昧な存在だ」

と、そんなことを口にした。

「故に彼らの多くは、せめてもの宿り木を得ようとして、何かしら実体のあるものに取り憑く。土地、人、思い出の品……多くは死者が生前執着していたものだが、時に例外もある。まれびとであり、この世に縁を持たないお前なら、尚更だな」

「ええと……」

彼が何を言わんとしているのか、志穂にはさっぱり分からない。

「つまり、お前はあのとき強い意志と共にこの杖を抱え込むことで、俺の杖に取り憑いた形になったのだ。自覚はないようだが」

どうという反応を示せばいいのか、志穂は本当に分からなかった。

自分が死霊、幽霊と呼ばれる存在であることも、まだ受け止めきれしていないのだ。急に取り憑くなど言われても困る。何だか本当に物語の幽霊みたいではないか。

「そうそう取り憑く対象は変えられない、と思う。お前はしばらくこの杖から離れて遠くへ行くことはできないだろう。俺は形見を捨てる気はないから、どうしたってお前と共に行くほかない。……どうせ俺にはもう行く当てはないし、道案内でも目的ができるのは嬉しい」

利害の一致だ、と青年は至って真面目な顔つきで言う。

「えっと、それなら……ありがとうございます。よろしくお願いします」

志穂がおずおずと礼を言うと、青年は軽く頷いた。

「他に何か質問はあるか？俺はあまり気が利かないし、言葉も足りないと言われる。お前もこの世界のこととはよく知らないだろう」

確かに色々と疑問はある。彼が今まで口にした数々の言葉だけでも、説明が欲しいものはいくつもあった。

しかし、志穂はそれよりも、一番大切だと思われる問いを選んで口にした。

「あの、あなたの名前は？」

青年は少し驚いたように目を瞠ると、すぐに苦笑した。

「……肝心なことを忘れていたな。俺はラダという」

「ラダ、さん？」

「ラダでいい。丁寧な言葉もいらない」

そう言うと、青年はふと無表情に戻って、こう続けた。

「人は俺を死霊術士と呼んでいる。死霊たちを時に使役し、時にその魂を鎮め、あるいは災いを呼び寄せる忌むべきものだ」と

物騒な言葉が冗談なのか本気なのか、それとも皮肉なのか判別できずに志穂がまごついていているうちに、ラダは脇に置いてあった荷物を背負うと、急に歩き出した。

志穂は慌ててラダの後を追おうと足を動かし、石床の上を駆ける。石床が途切れて段差になっている箇所に気付いたときには、もう勢いよく足を下ろしてしまっていた。

しかし志穂は転ばなかった。傾くことすらなかった。

何故なら志穂の足は、危ないと思った瞬間、ぴたりとその場に止まったのだから。

段の表面よりやや高い位置、何もない空中で、重力の何の抵抗もなく。

つまりは片足で空中の見えない段を踏みしめた格好のまま、無様に硬直してしまった志穂に気付き、ラダが踵を返して戻ってきた。

彼は少しため息を吐くと、混乱と恐怖がない交ぜになった目で青年を見上げた志穂の手を取り、やんわりと引っ張った。

自然、つられて足を前に動かさなくてはならなくなる。

いや、もしかしたら足なんて動かす必要もなく、その気になればふわふわと宙に浮いて移動できるのかもしれない。ただ十四年生きて培った常識が、歩くという動作を捨てきれずにいたのだった。

とはいえ忙しなく動かしているつもり自分の足が今ちゃんと地

に着いているのか、それとも宙に浮いているのか、はたまた先程のように地面に半ば埋もれていたりするのか、足元を見て確かめるのは怖い。だから志穂は前を行く青年の背に負われた革の荷物や、視界の両端を流れていく周囲の光景、そして繋がれた手から感じる青年の体温や、骨張った冷たい指先の感触に意識を向けた。

(……これも、錯覚なのかな)

石床にきちんと両足をくっつけて立っているという認識が思い込みであったように、手から伝わるこの暖かさも、勘違いに過ぎないのだろうか。

青年と少女は手を繋いだまま、石の廃墟の外へ出た。

廃墟のすぐ傍には広場と思しき空間があったが、何故か黒ずんだ薪の燃え残りが散らばり、広場の中央の地面は奇妙に盛り上がっている。

ラダはその盛り上がった地面を避けて進んだ。

広場の先に広がっているのも、やはり廃墟と化した家屋が連なる無惨な光景だった。

家屋はほとんどが木造で、石造りの建物は先程まで二人がいたあの広い建物だけのようだ。家屋は例外なく黒こげで、打ち壊され、往時の姿を想像する余地もないほど原型を留めていないものもかなり存在した。

そこかしこから、まだ細い煙が立ち上っている。

焼け残った家の壁に、矢が突き刺さっているのも見える。それも一本や二本ではない。

土を固めただけの道端に落ちている刃の破片らしきもの、その表面に赤黒い染みが散らばっているのに気付いて、志穂はぞっとした。ここにはかつて、小さな村があったのだろうか。

狭い土地の中で寄り添い合うように、ささやかな規模の家々が立ち並び、そこで多くの人々がささやかな生活を営んでいたに違いない。

「どうして……」

それ以上言葉を続けられず、志穂は口をつぐんだ。

テレビの中の映像でなら、遠い外国で起きた紛争の光景を見たことは幾度かある。それを見て、可哀相にとか、どうして戦争はなくならないんだろうとか、そういう他人事めいた同情心は抱いても、自分自身がそのような場所に身を置くことなど考えもしなかった。

しかし今、志穂は、明らかに焼き討ちに遭った村の真ん中にいる。ここに暮らしていた人々は、石床の上で啞然と立ち尽くしていた志穂を歓喜の声で迎えた人々、大仰に涙ぐんでいた人々は、もういない。

ここにいるのは、死霊になってしまった志穂と、親切な黒髪の青年だけ。

「……アーフェルという国は、従わぬ民に容赦しない。近頃は特にそうだ。山の民は迫害を逃れてこの山里に長く住みついていたが、とうとう彼らもこんなことになってしまった」

心なしか青年の声も暗い。

アーフェル。それがこの村に惨劇をもたらした存在の名。

おぞましい記憶の中で最後に目にした、あの金髪の美しい少年の顔が浮かんで消える。

正直なところ、自分を取り囲む様々なことにまだ実感が湧かない。だから胸の奥の奥で渦巻くようなこの感情を、恐怖と呼ぶべきか、それとも怒り、あるいは憎しみと言いつぶすべきなのか、志穂には答えが出せなかった。

やがて二人は、村の入り口まで行き着いた。

村はぐるりと石垣で囲まれているらしく、その切れ目のところに小さな石の門らしきものが設けられている。

アーチ状の石の門には、下から上まで隙間なく彫刻が施されていた。

門柱に絡みつくような格好で彫られたその生き物は、一見すると蛇のようだ。しかしちゃんと前足があり、後ろ足があり、背には翼らしきものまで生えていたので、少なくとも蛇ではないのだろう。

「竜だ」

ラダは簡潔にそう言って、それ以上を言わなかった。門の『竜』は、鱗に覆われたうねうねと長い胴体や尾を持ち、背中には蝙蝠に似た翼を生やしていた。その翼はざつと数えただけでも五対はあった。

彫刻を見上げていた志穂は、不意にある光景を思い出した。

「あの、石床のステージに描いてあった絵……」

ひどく抽象的な描き方だったので、初めて見たときは何か生き物が描かれているらしいということしか分からなかった。だが今思い返してみると、長い胴や数多い翼など、形がこの彫刻の竜によく似ている気がする。

「祭壇のことなら、あれも竜を描いたものだと思う」

ラダは断言しなかった。彼もすべてを知っているわけではないらしい、と思っただけから、志穂は違和感に首を傾げた。

ここに暮らしていたのは山の民。青年の口ぶりからすると、彼は山の民ではないらしい。おそらく、この村が襲撃に遭い、村人たちが死んでしまつて、犯人であるアーフェルの騎士団とやらも引き上げた後にやつてきた。そんなところだろうか。

しかしラダは、山の民やこの村のことについて、ある程度の知識を持っているようだ。村人ではなくても、親戚か何かで、以前から出入りしていたのだろうか。確か彼は先程、一族がどうのと言っていた気がする。

だから、彼はあんなに絶望していたのだろうか。

ラダの声を最初に聞いたときのあの胸の苦しさを思い出し、志穂はなんともいえない気分になった。

「まれびと、来たりて、竜を呼ぶ……か」

不意にラダが何か呟いた。

志穂が首を傾げて見上げると、彼はまるで自嘲するように唇の端を歪ませ、静かに首を横に振った。

「いや。……そろそろ行こう」

促され、志穂は竜の胴体の下を通り、門を潜り抜けた。

その先は、切り株だらけの荒涼とした風景がしばらく続いている。大勢が踏み荒らした形跡のある小道を傾斜に沿って下っていくと、やっと山らしい、緑の濃い木々の連なりが見えた。

ラダは最後に一度だけ、遠くなつた村の門の方を振り返つた。

そのとき彼が口の中で呟いていたのは、惜別の言葉か、それとも祈りの言葉だつたのだろうか。

志穂は問うことなく、ただ暖かな感触にすぎるように、繋いだ手を握り返した。

第二話 旅路

自分が死者であり、幽霊、死霊と呼ばれる類の存在であると認めるのは、そう容易いことではなかった。

いつそ自分の死体を目の当たりにすれば、はっきりと自覚できたのかもしれない。

だが、襲撃で死んだ人々の死体は、騎士団の手によって纏めて焼かれ、乱暴に埋められてしまったのだそうだ。わずかに残されていた骨や亡骸の断片も、集落の人々の霊を『船出』させる傍ら、ラダが土に埋めたという。

死んでから死霊としての意識が覚醒するまでのタイムラグはまああることだ、という意味合いのことを、青年は淡々と説明した。出会って間もない志穂には、その淡白さがはたして演技なのかどうか、読み取ることが叶わなかったが。

ともあれ少なくとも、今の自分がいわゆる霊体の身であることはもはや疑いようのない事実だった。

事実を受け入れても、その在り方に慣れるにはまた困難が伴う。どういつ訳か、志穂はラダとなら手を握り合えるし、彼の白い杖にも触れられる。

だが他のものはそうはいかなかった。木に触ろうとしても志穂の手は木肌にも埋もれてしまい、木立の合間を飛び交う虫は平気で志穂の胸の辺りをすり抜けて飛んでいく。

少しよそ見をしたために前方に迫る太い木の幹に気付かず、真っ向からぶつかって、するりと全身何事もなく通り抜けてしまったことは、何ともぞっとする体験だった。何の痛みも感触もなかったことが、また気味の悪さに拍車を掛ける。

心細さのあまり、山から降りるまでずっと、志穂はラダと手を繋いだままでいた。

中学生にもなって、年上の男性と子供のように手を繋ぐのは少し

気恥ずかしいことである。しかしそれ以上に、今の自分が恐ろしく頼りない存在であること、おまけに知らない土地、慣れない山の中を進むことへの不安の方が勝った。

「そう怯えるな」

ラダはそう志穂を気遣うように言った。

「今のお前は木の根に蹴躓くことはないし、獣に噛み付かれることもない。もう、危害を加えられる心配はないのだから、気楽にしていればいい。むしろあまり意識しすぎる方が害になる」

そう言われても、怖いものは怖いのだ。縋るもの　ラダが傍にいなければ、とてもこんな状態でこんな山の中を彷徨おうとは思えない。

ラダは何故か山道を通らず、獣も通らないのではないかと思うようなところばかりを選んで進んでいるようだったが、それでも一人よりはずっとましに思えた。

そうして山を下る間に、地面の少し上の空中を歩くことくらいなら、どうにか慣れることができた。

何せしっかり地面に足を付けて歩こうにも、進む先にあるのは急な斜面や岩場ばかりで、平坦な箇所でも土を這う木の根が邪魔をする。見えない階段があるのだと思って宙を歩いた方が、ずっと気楽だということに早々に気付かされたのだ。とはいえいわゆる幽霊らしく、空高くふわふわと飛ぶような真似は挑戦する気にもなれなかったが。

山里から山の麓まで、一体何時間かかったかはよく分からない。

周囲から木々の姿が少なくなり、志穂の怯えと緊張が緩和される頃には、もう日が暮れかかっていた。

麓といっても、山の中と同じく人気はなく、裾野の向こうに広がるのは荒涼とした荒れ地だった。夕暮れの光がその荒れた大地の上を赤く染め、志穂たちのいる麓の方まで照らし出している。

「……今日のところは、ここで休むとするか」

ラダは志穂と繋いでいた手を離すと、背負っていた荷物を下ろし、中から小袋を取り出した。小袋の中身はビスケットに似た保存食で、彼はそれを数枚嚙ると、革の水筒から水をいくらか飲んだ。山中を流れていた清流で汲んでいた水だ。

そして地べたに外套を広げてその上に横たわり、片腕にあの白い杖を抱え、そのまま目を閉じて寝入ってしまった。

あまりの早さに、志穂は少々呆然としてしまった。

普通、こういうときには焚き火をしたり、テントを張ったり、せめてもつと分厚い布にくるまったりして休むものではないのだろうか。

地面はかるうじて平らだが、石混じりでごつごつとしていて、お世辞にも寝るのに相応しい場所とは言えない。

「あの……ラダさん？」

「何だ」

恐る恐る声を掛けると、ラダは目を瞑ったまま返事をした。寝てしまったかと思っただが、まださすがに起きていたようだ。

「えっと、なんていうか、このまま朝まで休むのかなって……」

「夜明け前には起きる。不安なら俺の傍にいて、もし何かあったら叩き起こしてくれ。それと、ラダでいい」

志穂は二の句が継げず、横たわるラダを見下ろしてほとんど途方に暮れた。そのうちかすかに寝息が聞こえはじめると、諦めの気持ちが始めて、彼女はため息を吐いた。

ラダが親切な青年であることは確かだ。

しかし、どうにも突拍子のないところがあるのも、また確かなようだった。

彼の真似をして地面に横たわることは憚られたので、志穂は言われた通りに青年の傍に座り込んだ。

改めて観察するように、眠る青年の異国的な横顔をまじまじと見つめる。

ちゃんと血の気が通っているのか心配になるほど白い顔だった。

だが色の白さを除けば、あまりひ弱な印象は見られない。現に青年の体は志穂よりずっと大きく、逞しかった。細身ではあるが華奢というほどではなく、むしろ引き締まっている感じがある。

だからこそ、色白を通り越して青白いくらいの肌が不釣り合いで、奇妙に感じる。

こんな野天で一夜を過ごして、風邪を引いたりしないのだろうか。とはいえ本人が平然と寝息を立てているのに、会ったばかりの娘が変な心配をするというのも、それはそれで大きなお世話かもしれない。

右手を見上げれば深緑の木々に覆われた山がそびえ、左手を見れば荒地が続いている。

地平線の彼方にはもう既に太陽の姿は見当たらず、わずかな残照が暗くなりかけた空の端を青紫に染め上げていた。ささやかに輝きはじめている白い点は、一番星だろうか。

まったく見知らぬこの世界にも、太陽や月があり、昼と夜があり、地平線が存在する。

青空と夜空があり、日が沈めば星が瞬く。

それがなんだかとても不思議なことのように感じられた。

(……でも、ここは私の世界じゃないんだ)

志穂は自身の膝を抱え込んだ。どれだけ似ている点があっても、ここは日本ではない。地球ですらないらしい。彼女の生まれたところではないのだ。

(お母さん。お父さん……)

口の中で両親を呼ぶ。

この世界に来る直前のことはよく覚えていないが、セーラー服を着て学校に行こうとしていたような記憶はある。学校に行ったはずの娘がいつまで経っても帰ってこないとなれば、さぞかし心配していることだろう。

祖父母、親戚、幼稚園からの付き合いの友人たち、学校の同級生たち。一人一人の顔を思い浮かべる。慣れ親しんだ記憶であるはず

なのに、この見知らぬ土地で、知り合ったばかりの青年の傍で思い浮かべると、どうしてか違和感が拭えなかった。

やがて夜が訪れ、深い闇が周囲を包み込む。

志穂は目を閉じ、膝を抱える腕に力を込めた。そして目を開くと、もう空の端が白みはじめていた。

まだ空の大半は暗かったが、つい先程まで夕刻だったはずなのに、明らかに夜明けが近付いていた。幽霊でもその気になれば眠ることができるのだろうか、と志穂が首を捻っているうちに、ラダがのそりと身を起こした。

「あ……お、おはよう」

とっさに志穂が口にした挨拶を聞いて、青年は虚を突かれたように瞬きをした。

そしてすぐに得心したように頷き、

「ああ。おはよう、シホ」

と、挨拶を返した。

ラダは身支度を調べると、やはりビスケットのようなものを数枚と水筒の水を一口飲んだ。そして荷物を背負って立ち上がり、自然な仕草で志穂に向かって手を差し出した。

「行こう。また手を繋ぐか？」

志穂は少し顔を赤らめて、ふるふると首を横に振った。昨日の子供っぽい振る舞いを思い返してみると、なんだか今更恥ずかしくなる。

そうかとラダは気分を害した様子もなく頷き、

「では付いてきてくれ。一人で勝手にどこかに行かないように」

とだけ言つと、荒れ地の中へと踏み出した。

ごろごろと小石が転がり、枯れ草や貧相な灌木が時折生えているだけの荒れ地を進むのは、山を下るよりはずっと楽だった。

荒れ地をしばらく進むと、やがて遠くに集落の影らしきものが見

えてきた。

「シホ」

不意にラダが振り返り、真剣な口調で言った。

「この先、人の目のある場所に出てからは、お前に質問をされてもすぐには答えられないかもしれない。無視する形になることも多いかもしれないが、容赦してくれ」

その言葉の意味を深く考えることなく、志穂はこくりと頷いた。しばらくして、ラダと志穂は集落の中に足を踏み入れた。

随分と小さな村だった。村の周囲に広がる畑がなければ、あの山里よりもさらに狭いかもしれない。農家らしい藁葺き屋根で、木造と石積みが混ざった建物はほとんどが古く、ぼろぼろで、風雨に褪せていた。

村のつくりは日本やアジアを思わせるものはまったくなかった。どちらかといえば、何百年も前の古いヨーロッパの農村、といった雰囲気だ。

村人の髪の色はほとんどがくすんだ金や茶、あるいは赤毛で、肌の色も白い。といってもラダほど白い肌を持つ者はいないようだったが。

そんな中に、ぽつんと一人、セーラー服を着た日本人の少女がいる。

我ながら場違いすぎて、身の置き所がないとはこのことだと志穂は思った。

村人はやってきた訪問者に対して少し興味深そうな視線を向けていたが、ラダは気に留めた様子もなく黙々と進み、村の一角にある建物の中に入っていた。志穂も慌ててその後が続く。

中は薄暗く、昼間とはいえ明かりの一つも灯されていなかった。木箱が雑然と並べられ、入り口の付近には背中を丸めた老翁が座っている。彼はラダを見上げて、おや、と意外そうに呟いた。

「無事だったのかい。山はどうだったかね、物好きな旅の人」

老翁の言葉に対し、ラダは無表情で首を横に振った。

「あなたが言った通りだったな。もう、……何もなかった」

「そうだろう。聖ユオル騎士団が通った後は、草の根すら残らないという話だからね」

聖ユオル騎士団。志穂は胸のうちでその言葉を繰り返した。それが、あの惨劇を引き起こしたアーフェルという国の騎士団の名前なのだろうか。

物語に出てくる騎士は、大抵が立派な甲冑を着て馬に跨り、正々堂々と戦う人たちだったが、その聖ユオル騎士団というのはきらびやかな名前に反して、イメージとはまったくかけ離れた人々のようだ。

「そこへわざわざ行くこうとするなんて、死に行くのも同然さ。よく無事だったものだよ、あんたも。ちょうど入れ違いになったのかい？」

「……そうらしい。俺が山を登ろうとしたとき、騎士団の一隊が別の山道から降りてくるのを見た」

運の良いことだ、と老爺は笑った。

「あの山の連中もね、よく分からない神を信仰してる、おかしな連中だったよ。お国から隠れたがって、税もろくに払ってなかったよ。うだし、討伐されたってまあ仕方ないやね」

他人事のように言う老爺の言葉に、志穂は怒りを感じた。

山里の人々がどういった人々であったのか、志穂は知らない。だが、彼らが例えどんな罪人であったとしても、あんなあんな無惨に殺され、村ごと焼き払われなければいけない道理があるだろうか。

この老人がああ凄惨な現場を見ていなくても、彼はどうやら騎士団の非道さについては知っているらしい。それなら、山の民がどんな運命を辿ったのか、わずかなりとも想像がつくだろうに。

「何もそんな言い方しなくても」
志穂は思わず口を挟んだ。

しかし、老爺から反応が返ってくることはなかった。無視された

のですらない。老爺は端から志穂の声が聞こえなかったかのように、ただラダの方だけを見上げていた。

数瞬遅れてその理由を悟り、愕然とする。

元の世界では幽霊など見たこともなかった。そして今の自分は、木の幹も透けて通るような死霊の身。ならば志穂が見えない人間がいてもおかしくない。

考えてみれば当然のことだ。ラダとごく自然に会話し、触れ合うことができたので、そういう可能性があることをすっかり失念していた。

「……この村は、山の民と多少の交流があつたのだろうか？」

志穂が呆然としている横で、ラダは淡々と訊ねている。

「ああ……まあ、ね。けど材木やら、木工細工やらと、作物を交換するくらいさ。連中の方が閉鎖的だったから、交流というほどでもないよ」

老爺はやや気まずげに、言い訳するような口調で言った。

「仲良くしてたら騎士団の奴らと一緒に焼かれてもおかしくなかったし、仲良くしなくて正解だったかね」

ラダは老爺に反論しなかった。

彼は曖昧に頷きを返すと、話題を変え、食糧をいくらか買い求めたいという旨のことを言った。その言葉で気付いたが、どうやらここは商店だったらしい。

両手で抱えられる程度の袋を一つ受け取ったラダは、それを荷物に仕舞うと、店を後にした。

彼は志穂が後をついてきているかどうか確かめる素振りも見せず、足早に村を出た。畑の合間の道をどんどん進んでいくラダの背中を、志穂は必死に追いかけた。

しばらく行くと、石で舗装された広い道に出た。

「この道に行くの？」

志穂の問いに、ラダはまたしても無言だった。

先程ラダに言われたことも半ば忘れて、志穂は不安になった。あ

まりにもこれまでの青年の態度と違うので、彼は少女が道連れになつたことを忘れてしまったのだろうかと思つた。

それが思い過ぎだと気付いたのは、人気のない石畳の道をしばらく進んでからのことだつた。不意に歩を緩めた青年は、周囲に人がいないことを確かめるように辺りを見回してから、ようやく志穂の目をまつすぐに見下ろしたのだ。

「……この街道は、西の商都エテルベリから王都リラ、そして沿岸地域まで続いている」

その唐突な言葉が、先程の志穂の問いに答えるものであるということを理解するのに、いささか時間が必要だつた。

「街道？」

それではこの道に沿ってずっと西に進めば、果てに辿り着けるのだろうか。

「そう。反対に行けば隣国に出られる。この国でも、五指に入るほど重要な道のはずだ」

「……その割には、なんだか……人がいなくて寂しいね」

街道の周囲を見回しながらそう言うと、青年は苦笑した。

「聖ユオル騎士団が通つたせいだろう。彼らは民に恐れられている。うっかり出くわして巻き込まれないようにと、商人や旅人たちは迂回路へ向かつたのだろうな」

「聖ユオル騎士団……」

確かに、先程の老爺も騎士団を恐れているような口ぶりだつた。

「……その人たちつて、あんなことを、各地で引き起こしているの？」

志穂は躊躇いながらも訊ねずにはいられなかった。

村を焼き払い、女性も老人も構わず殺して、誰一人逃さない

そんな真似をあちこちで行い、そのために恐れられているのだとしたら、非道どころの話ではない。

「……騎士団の主たる任務は、盗賊や不平分子の討伐、反乱の鎮圧だ。その対象には国に従わない民も含まれる。その後には灰燼か、

でなければ死体の山だけが残される、というもっぱらの風評だが」

ラダは無表情に戻って、淡々と答えた。

「もう何日かすれば、街道も賑わいを取り戻すだろう。……そうなれば、道々こうしてシホと会話を交わすことはあまりできなくなる。すまないが……」

志穂は、自分よりもずっと高い位置にある青年の顔を振り仰いだ。村に入る前にも言われたのと同じ意味合いの言葉。だが、今なら青年の意図するところが分かる気がする。

死霊である志穂の姿は、おそらく普通の人間の目には見えない。声も届かない。

見えないものと白昼堂々、会話を交わすわけにはいかないということなのだろう。下手をすればラダは、何も無いところに話しかける頭のおかしな人物と見られてしまう。

さすがに自分のために変人扱いされる、などと要求することはとてもできない。

だから志穂は大人しく頷いた。

胸に宿るほんのかすかな寂しさを押し殺して。

第三話 死霊の在り方

数日が過ぎ、街道に人が増えてくるにつれ、青年は宣言通り恐ろしく寡黙になった。

まるで傍にいる志穂が見えていないかのように、視線すらほとんど寄越さず、白い杖を片手に黙々と歩いている。

仕方のないこととはいえ、喋れない相手と並んで歩くのは少々退屈で、寂しかった。油断すると、ラダと自分の立場も忘れて話しかけてしまいそうになり、慌てて口をつぐむこともしばしばである。

そんな道行きの中で、自分がまったく疲労を感じていないことに気付いたのは、ラダが額に滲んだ汗を拭いながら息を吐くのを見たときだった。

そういえば先日から何も口にしていないのに、空腹や喉の渴きを感じない。

よくよく意識してみれば、暑さ寒さという感覚もなかった。

夜になっても空気はぬるま湯のようにしか感じられず、花の匂いも意識して嗅がなければ分からない。ラダの外套が風ではためくのを見てやっと、この場に風が吹いていることに気付ける。

目の前の景色がまるでテレビの中の映像のように、ただただ通り過ぎていく奇妙さ。

ラダは黙々と旅慣れた様子で、朝から晩まで街道を歩き通す。

そして志穂は、彼の隣を黙って付いていく。そんな日々が何日も続いた。

確かに、気楽といえば気楽な状態かもしれなかった。少なくとも元の世界で生きていた頃の志穂なら、ラダの旅路についていくことは難しかったろう。とつくの昔に足を痛めて、青年のお荷物になっていたに違いない。

実際、傍から見ているだけでも、ラダの旅路はかなり過酷なものに感じられた。

ちゃんとした食事を取るのは朝と晩の二度、昼間はひとかけらのチーズやビスケットもどきと水だけを、わずかな休憩の合間に口にするだけで過ごす。

そのちゃんとした食事も、大抵が濁った豆のスープとかちかちの黒パン、良くてベーコンが一切れ付いてくる、そんな程度で、現代日本人の目から見れば粗食もいいところだった。とても長旅の疲労を補ってくれそうな代物には見えない。

服だってかなり薄汚れて継ぎ当てだらけの上、それを何日も着回しているようだ。別段青年がものぐさで不潔だというわけではなく、ちゃんと頭と手足は時々水で洗っているようだから、着替えの少なさと洗濯の手間の問題なのだろう。

志穂なら、そんな生活には耐えられそうにない。こうしてずっとセーラー服の格好でいることすら違和感があるのに。

ラダが特別我慢強いのか、それともこれがこの世界の人々の当たり前なのかはよく分からない。あるいは両方なのかもしれない。ただただ青年の後を生まれたての雛のようにくっついていくだけなのだ。この状態に文句を言えるほど、凶々しくないつもりである。

しかし、世界を肌で感じることはないということは、日に日に現実感が薄れていくということでもあった。自分がまるでふわついた夢の残滓で、いつか跡形もなく消えてしまうのではないか。そんな言い知れない不安が次第に志穂を蝕みはじめた。

志穂はその不安と退屈を紛らわすために、今の自分の状態、つまり死霊の身で何ができるのかということを探索しはじめた。

街道を歩き交う人々はもちろん誰も志穂に目をくれないので、ラダが道端で休んだり、あるいは用を足すために彼女の傍から離れている間、セーラー服の少女が一人でうろろろしていても注目されることはない。

色々と試行錯誤した結果、ラダやあの白い杖以外のものにも、そ

の気になればどうやら触れることができるらしいと気付いた。

道に転がる小石に向かって何も考えずに手を伸ばしても、指先は何も捉えられずにすり抜けてしまう。だが、触ろうと強く意識してから触れば、小石を持ち上げることができたのだ。

指先に伝わるざらついた小石の感触が、なんだかひどく懐かしかった。

嬉しくて思わず小石を握りしめていると、

「ん？ おい……あれ……」

「どうした？」

「目の錯覚か？ 石がこう、ふわふわと浮いているような……」

そんな会話が背後から聞こえてきて、志穂は慌てて小石を手放した。

ともあれ、その気になれば物が持てるという事実は、志穂の心境を大いに良い方向へ傾けた。目の前を通り過ぎていくだけのようだった世界に干渉する術があるというだけで、なんだか地に足がついたような気がしたのだ。

(今なら、ポルターガイストの気持ち分かる気がするなあ……)

夏の心霊番組などで胡散臭く語られる怪しげな現象の話を、志穂はしみじみと思い出した。

そのうち志穂は、霊体の在り方について考えを改めた。

どうやら死霊にとっては、その気になる、つまり意識するということが重要らしい。

何も考えていないと、志穂の感覚はるくに働かない。視覚と聴覚だけは普通に働いているものの、それだけではテレビの映像を見ているのと同じでしかない。さして意識せずに触れられるのはラダ本人と、あの白い杖だけだ。

しかし、今この場には風が吹いていると気付いた途端、志穂の頬は吹き抜ける風の感触を覚えた。

同様に、道端に咲いていた花の匂いを嗅ごうとした瞬間、どうして今まで何も感じなかったのかと驚くほどの強い香りが鼻腔をくす

ぐった。

一方で、空腹や疲労を感じることはやはりない。本当ならそろそろ足が痛くなっているだろうな、と意識して考えてみたものの、それで足が痛くなってくることはなかった。

どうも、感覚が働くのは外部からやってくる事象に対してのみのようにだ。

あるいは単に、自分にマイナスに働くことをちゃんと意識するのは難しいということかもしれないが。

なかなか都合の良い性質のようできて、意識しなければ何も感じない、何もできないというのは、それはそれで精神的に疲れるものだった。いちいちこれをしよう、あれをしよう、などと頭に思い浮かべなければならず、少し気が逸れればまたすぐに感覚が消え失せ、持ち上げた石も取り落としてしまうのだから。

死霊の身で生きた人間と同じように過ごすことは、なかなか難しい課題のようだった。

街道沿いにはいくつもの宿場町があり、ラダも夕刻になると宿に寄って部屋を取った。さすがにあのような野宿はそうそうしないものらしい。

この宿も大抵おんぼろな安宿で、壁や床に何やら得体の知れない虫が這っていたり、鼠がうるちよろしているのを見るのはほとんど毎度のことだったが、ラダはまったく気に留める様子がない。

お陰で志穂は、床の上から少し浮いた状態で眠る技を覚えてしまった。

もっとも、立ったままぎゅっと目を瞑っていたら気付くと朝だった、という現象を、眠りと表現しても良いものなのかどうかは分からない。

ともあれラダが部屋で一人になる夜は、志穂も周りを気にせず彼と会話を交わすことができた。といっても、朝から晩まで歩き通し

て疲れている青年を捕まえて長話をするのは憚られたから、ほんのわずかな時間、他愛もない質問を二、三投げかけるくらいだ。

「ラダさ……、ラダ、は、何歳なの？」

ある日の夜、ふと気になっていたことを訊ねてみると、黒髪の青年は口元に手を当ててしばらく考え込んだ。そして、もしや不快な質問だったのだろうかと思慮が不安になるくらいの間を置いてから、こんな答えを返した。

「多分……十八か、十九。もしくは二十。正確なところは覚えていない」

告げられた曖昧な年齢は、志穂が思っていたよりも若い。

彫りの深い異国風の顔立ちだから日本人の目には大人びて見えるということ差し引いても、落ち着いていて動じない雰囲気から、一回りくらい年上かと勝手に思っていた。

「シホ、お前は？」

「中学の二年……じゃなくて、えっと、十四歳」

「そうか。十歳ほどに見えた」

真顔で言われ、志穂は思わず肩を落とした。

ラダは今まで、少女のことを小学生の子供のように見て、頭を撫でたり手を繋いだりしていたのだろうか。確かにクラスの中では前から数えた方が早い身長だったが、そうはつきり言われるとなんだか落ち込んでしまう。

また、何故自分とラダは言葉が通じるのかと訊ねたこともあった。あまり思い出したくない惨劇の記憶の中では、あの山里の人々や金髪の少年の言葉がまったく理解できなかったのに、今の志穂はラダと会話することもできるし、他の人々が周りで語り合っている言葉を理解することも可能になっている。

「死霊を相手に、言語が障害になることはないものだ」

ラダはそう答えて、少し困ったように眉根を寄せた。

「そうだな……俺にもはつきりとした理由は分からない。ろくに言葉の通じない異国でも、霊たちとは対話できた。そういうものなの

だ、と片付けてきたが……」

青年は志穂の問いに対して、できるだけちゃんとした返事をしようと考えているらしかった。彼は真剣に考える仕草をしばらく見せた後で、ゆっくりと言った。

「……まればとにも適用できるのかは分からないが。死霊は見たいものを見、聞きたいものを聞くものだ。目や耳ではなく、その魂を通して、世界を感じる。ならば、異国の言葉の意味を解することも、相手が理解できるように思念として意志を伝えることも、容易いのではないか。相手と対話したいという意志さえあれば」

志穂は黙って青年の言葉を反芻し、その意味を理解しようと努めた。

目や耳ではなく、その魂を通して、世界を感じる。それはつまり、志穂がこうしてラダの顔を見つめていても、視覚が働いているわけではない、ということなのだろうか。

同じように、聴覚を使ってラダの言葉を聞き取っているわけではないから、彼の口から発せられる音がいかに意味不明な言語であるとも関係がないということなのだろうか。

分かるような、分からないような、回りくどい理屈である。

しかし、思い当たる節はある。

志穂は意識すれば石に触ることができる。今風が吹いていると気付けば、風を感じることもできる。花の匂いを嗅ぐこともできる。

そして意識しなければ、それらの感覚はろくに働かなくなってしまう。だがそんなものが、本当に感覚と呼べるのかどうか。

死んだ人間に肉体はない。肉体がなければ感覚器も存在しない。

眼球もなければ神経もなく、鼓膜もなければ唇だって本当はないのだ。志穂が着ているセーラー服だって、きつと幻のようなものに過ぎないのだろう。だから、すべてが錯覚であり、何か不思議な力で周囲の状況を認識しているのだとしても、おかしくはない。それこそその気になれば、振り返らずに背後を見ることがだって可能なのかも知れない。

ではラダと対話をするのを志穂の心が拒めば、その途端にラダの言葉は意味の分からない外国語として聞こえてくるのだろうか？

そんな考えがふと頭を過ぎったが、実際に試す勇氣はなかった。

「……ラダの話を聞いていると、死霊って何でもありの存在みたいに思える」

そう呟くと、青年の顔にかすかな苦笑が過ぎった。

「実際のところ、その通りだからな」

「……そうなの？」

「肉体は魂に嵌められた枷である、と言った者がある。死霊にはその枷がない。ただ彼らは死霊であるが故に、生前の執着を捨てきれない存在であるが故に、五感の枷をわざわざ自身に課している。もはや肉体などないというのに、目で物を見て、耳で音を聞きたがる……でなければ、確かに死霊に不可能はないのだが、一方でそれはとても危ういこともある……」

志穂は淡々と語る青年を見上げた。

(でも、死霊は死霊なんでしょう?)

思い浮かんだその言葉を、志穂は飲み込んだ。

死霊は死霊。死者は死者。

生者とは違うのだ、どれだけ気楽であろうとも。

その思いは、澱のように志穂の胸の底を漂い、容易には消えそうになかった。

そんな旅路の最中にある宿場町に立ち寄った際、ちょっとした事件が起こった。

ラダが荷物を下ろすために、白い杖を傍らに置いたとき、そのほんのわずかな一瞬を狙った者がいたのだ。

人混みに紛れて近寄ってきた小さな人影が、ラダの白い杖を掴んだかと思うと、あっという間にその場から逃げ去っていくのを、志

穂は半ば呆然と見ていた。

そして影が完全に見えなくなったところではっと気付き、

「ラダ、杖が」

と盗まれたことを伝えようとしたが、ぐいと体が引つ張られるような感覚に、驚いて思わず口を閉ざした。

もちろん少女の体のどこも、誰かに掴まれてるようには見えない。だが、志穂はずるずるとラダのいるその場から引き離されはじめた。後ろ向きのまま、まるで見えない力に首根っこを掴まれて無理矢理引きずられているかのように。

ばたばたと手足を動かして引力に抗おうとしても叶わない。

驚いているラダの顔はすぐに人混みに隠れて見えなくなり、壁や柱や馬や人、色んなものが志穂をすり抜けていった。

何だかんだで霊体に慣れかけていた志穂にとって、これは久しぶりに、心の底からぞつとする事態だった。

通りを過ぎ、路地を二本ばかり過ぎたところで、ようやく志穂の体は移動を停止した。

振り向いても、そこには何も無い。ただ汚れた壁があるだけだ。

人気のない路地に取り残され、志穂はしばらく途方に暮れた。先程の現象は一体何事だったのだろうか。

とりあえず気を取り直して先程の場所に戻ろうと思ったが、どうしてもそちらの方向に足が向かない。空気中に見えない壁があるかのように、進むことができないのだ。

しばらく空気と格闘してから、志穂は諦めて踵を返した。反対側の方向なら、何なく進むことが可能だった。

この先に何かがあるのだろうか。そんな予感めいたものが胸を過ぎる。

あるいはそれは、志穂を引きずっていった力の大元かもしれない。しばらく悩んだ後、志穂は意を決したように目を瞑って、恐る恐る手近の壁にぶつかっていった。何の感触もなくするりと、壁の向こう側へ抜ける。

そうやっていくつかの壁を通り抜け、やっと目を開くと、そこには倉庫の中らしき薄暗い光景が広がっていた。

乱雑に木箱が並べられ、あるいは積み上げられ、迷路のようになっている。その箱越しに話し声が聞こえたので、志穂は興味を覚えてそちらの方へ近寄ってみた。

「……だつて、見るよ、これ！」

若い少年の声が響いた。

そつと窺った先には、いかにも柄の悪そうな数名の男たちが車座になり、そしてその手前に志穂よりも若い少年が座っていた。もしかしたら十歳にも満たないかもしれない、ぼろぼろで汚れた服を着たその少年は、見覚えのある白い杖を手に何やら力説している。

「石じゃなくて骨を丸ごと削つてあるんだぜ。きつと象牙だよ！」

象牙つて高いんだろ？」

「坊主、確かにこれは骨だろうがな。お前よりでかい象牙細工があるもんかい」

男の一人がやれやれと呆れたように息を吐いた。

「どうせ猪だかなんだかの骨を継ぎ接ぎして作つてあるんだろう。」

第一、これがもし象牙だとしてもだ、そんな代物を道端で持ち歩く奴がいるかよ」

「そ、そりゃあ……そうかもしれないけど」

「それとも坊主は、お忍びの貴族様の荷物を拝借したつていうのかい？」

少年は悔しそつに眉を下げて首を横に振り、貧乏そつな旅人だつた、と答えた。

確かにラダの身なりは良いとは言い難く、とても貴族という言葉とは縁がなさそうだが、この泥棒少年よりはましな格好をしていると思う。

ともかく、あの白い杖はラダにとって母の形見だという、とても大事な物である。見過ごすのは決まりが悪い。泥棒たちの手から、どうにかして杖を取り戻すべきだろう。

志穂は悩んだ。

泥棒たちに気付かれずに近寄ることは簡単だ、そもそも彼らには志穂が見えないだろうから。しかし、杖を少年の手から強引に奪ったとして、彼らの目には、杖がひとりでに浮き上がったようにしか見えないはず。突然の心霊現象に驚いて、腰を抜かすかもしれない。泥棒相手とはいえ、迂闊に騒ぎを引き起こして、ラダに迷惑がからないだろうか。

そんな風に志穂が悩んでいるうちに、少年と男たちは話し合いを終えたらしい。

少年は白い杖を床に置き、代わりに赤銅色のコインを数枚、男から受け取って懐に納めた。そして数歩下がり、くるりと踵を返してその場から立ち去ろうとする。

そのとき、志穂はとっさにあることを思いついた。そしてすぐさま実行に移した。

積み上げられていた木箱の塔の傍を少年が通ろうとしたのと同時に、思いきり意志と力を込めて、木箱に体当たりしたのである。

元々が乱暴に積み上げられていたものだ。加えられた力によって容易くバランスを失った木箱の塔は、派手な音を立てながら、おもちゃの積み木のように崩れ落ちた。

一つが崩れるとその衝撃でまた別の木箱の塔も崩れていく。

埃も大量に舞い上がり、倉庫はあつという間に騒音と塵埃の坩堝と化した。

「うわっ、何だ何だ」

「おい坊主、てめえか、箱を倒しやがったのは！」

「お、おれ、何もしてない！ 勝手に崩れたんだよ！」

そんな騒ぎを横目に、志穂は急いで床に放置されたままの白い杖を拾い上げた。そして男たちが気付かないうちに、急いで倉庫の入り口から外へ出た。あまりに急いでいたので、自分がほとんど飛んでいるのにも気が付かなかった。

薄暗い屋内から日の当たる外に出た途端、胸が今更のように激し

く脈打ちはじめた気がした。とつさになんて大胆なことをしてしまったのだらう。

無論この動悸も錯覚に過ぎないのだらうが、容易には収まりそうになかった。

志穂は震える腕で白い杖を抱えながら、倉庫からなるべく離れようと人気のない路地の隅をふらふらと歩いていた。

するとしばらくして、

「シホ！」

と、声を上げながらラダが駆け寄ってくるのが見えた。

志穂はほつとして、手を振ってそれに応えた。

「無事だったか」

傍に駆け寄って真つ先に問われた言葉に、こくりと頷きを返す。

「うん。良かった、どうやってラダと合流すればいいかと思つたの。……はい、これ」

差し出した白い杖を見て、ラダはわずかに目を見開いた。

「……取り返してくれたのか。ありがとう」

杖を受け取った青年の唇の端には笑みが浮かんでいた。どうやら杖を取り返して正解だったようだ。

「だが、一体どうやって取り返したんだ？」

志穂が倉庫での出来事をかいつまんで語ると、青年の笑みが少しばかり歪んだ。まるで、吹き出すのを堪えているかのように。

「……シホは案外、その、元気だな」

「あの……やっぱりやりすぎだった？ あの人たち、ラダが杖を持つているの見たら、変に思うかな」

「いや、大丈夫だ。それほどこの杖に価値を見出していたわけでもなかったのだらう？ それなら杖が消えたことすら気付かないかもしれないな」

志穂は安堵に胸を撫で下ろした。

宿に戻るまでの道々、彼女は先程の奇妙な現象についての疑問を口にした。

「後ろから引きずられるような感じだったの。戻ろうとしても、そ
ちの方向には進めなかった。あれって、一体何だったんだろう」

「それはおそらく、この杖が盗まれたから　杖とシホの間に距離
ができたからだろう」

ラダは淀みなく答えた。

「シホはこの杖に取り憑いた、この杖から離れて遠くには行けない、
とは以前言ったな。死霊が物に取り憑くということは、つまりその
物から離れられなくなるということだ。今回の場合は、物の方が志
穂の傍から離れてしまった。だから……」

まるで磁石のように、杖のある方へ引きずられていった。そうい
うことらしい。

「じゃあ……逆に私が杖から遠くに行こうとして、杖をずるずる引
きずることはないの？」

「それはない、と思う。取り憑かれている対象、実体のあるもの
の方が、この場合強い。シホ自身が自由に行き来したければ、自分で
杖を抱えていくしかない。……そうされるのは困るが」

志穂は思わず考え込んでしまった。

今、ラダと共に旅をしているのは、彼女自身がそう決めたからだ。
しかし結局のところ、選択肢は他になかったのかもしれない。

ラダは死霊には肉体の枷がないと言った。だが、これは明らか
な
枷だ。

杖から離れなければ別段実害があるわけではないようだし、今回
はそのお陰で杖を取り戻せたようなものだから、とやかく言う言葉
は思い浮かばないが　　なんだか、あまり気分は良くなかった。

自分の身体が自分の意のままにならないというのは、やはり気持
ちが悪い。

傾きかけた思考を振り払うように、志穂は殊更明るい声を口にし
た。

「この杖はラダの大切な物なんでしょう？　私、そんなことしない
よ」

ラダは志穂を 果て まで案内する。志穂はラダから離れず付いていく。

たった十日やそこらでその約束を忘れてしまうほど、物忘れが激しいつもりはない。

「ああ。ありがとう、シホ」

ラダは微笑んだ。

黙々と無表情で歩いているときは、なんだか近寄りがたく感じる青年も、こうして笑う姿を見ると、近所の優しいお兄さんのように思えてほっとする。

けれどその優しげな横顔も、人が来た途端冷たい無表情に覆われてしまうのかと思うと、少しばかり残念だった。

第四話 エテルベリ

志穂がラダという青年と出会ってから、もう十日以上が過ぎていく。

日本とはまったく異なる世界、異なる国での旅や、死霊の身で過ごすことについては、まだまだ戸惑うことばかりである。だが十日も経つと、ある程度は慣れて心に折り合いを付けられることも少しずつ増えてきて、そうするとそれまで気にしていなかったことに對しても、疑問を持つ余裕が生まれてくる。

専ら志穂の心を占めているのは、ラダが何者なのか、という点についてだった。

志穂はこの青年について詳しいことを何一つ知らない。

知っているのは、彼が死霊を見たり触れたり対話することができ、また成仏させられること　こちら風に言えば『船出』させる力があるらしいこと。

概ね親切で誠実で真面目でたまに突拍子がなくて、少なくとも悪人ではないこと。

たったそれだけなのだ。

彼がどうしてあの山里を訪れていたのか、山里の人々とはどんな関係だったのか、そういうことも何一つ知らない。

死霊術士、と彼は言っていた。死霊たちを時に使役し、時に魂を鎮め、あるいは災いを呼び寄せる忌むべきものだ。

だが、志穂は今のところラダがそれらしく振る舞うところを見えない。

旅路において、ラダは徹底的に無表情で、無口で、無愛想な態度を貫いていた。

他人と会話を交わすのは、宿を取ったり買い物をするときくらい。たまたま食堂などで隣り合った商人に話しかけられても、ほんの二言三言しか口にしないので、すぐに気まずい雰囲気になり、あちら

の方から会話を打ち切っていく。

その反面、夜に志穂と会話を交わす際は、きちんと受け答えしてくれるし、稀に微笑みすら見せてくれる。

まるで、人と深く接することを避け、普段はあえて無愛想に振る舞っているようだった。

もし志穂が死霊ではなく、ちゃんと生きて少女のままラダと出会っていたら、彼はこんなにも親切にしてくれただろうか。そんな疑問すら思い浮かぶ。

無論、そんなことをラダに直接聞けるわけがない。

そして、もう一つ、聞こうとして聞けないままの疑問がある。

そもそもどうして志穂は地球とは異なるこの世界に呼ばれたのかという、根本的な疑問が。

ラダの言動を端々まで思い返してみると、志穂をこの世界に呼び出したのは 山の民 あの廃墟と化した山里の人々で、そこには何か、少なくとも何の変哲もない中学生の少女を見て大喜びする程度には重大そうな理由があつて、ラダもそれを知っていたようだ。無論、いつものように、聞けば答えてくれるかもしれない。

しかし、例えよくある物語のように、志穂が彼らの救世主として呼ばれたのだとしてもだ。結局のところ、彼女はこの世界に何をもたらすことなく死んでしまった。今更呼ばれた理由を根掘り葉掘り聞いてもどうしようもなく、また到底納得できるとも思えなかった。そんなことで自分を故郷から引き離れたのか、と思ってしまうに決まっている。

どうか彼らを憎まないでやってくれ、とラダは言った。

志穂もできればそうしたいと思う。あのような惨劇を前にして、同じ被害者である人々を憎悪したくはない。そして、彼らを擁護した青年に対し、いらぬ悪感情を抱くこともしたくなかった。

ならばこのまま、呼び出された理由を知らないままだった方がきっと良いのだろう。

だから志穂は今日も、様々な疑問と思いを胸にしまいながら、青

年の後に付いていく。

二人が旅をしているアーフェルという王国は、この世界の中では豊かな大国なのだそうだ。大きな穀倉地帯の平野、材木の豊富な山地を擁し、南の内海沿岸には貿易港がいくつもあり、鉱山もあって、広い領土には人口も多い。環境に恵まれた国なのだ。

アーフェルの街に立ち並ぶ建物や、行き交う人々の様相は、概ね昔のヨーロッパの雰囲気によく似ている気がする。具体的にヨーロッパのどこの国の文化と似通っているのか、ということまでは志穂の乏しい知識では判別できないが、志穂とラダが今いる地方はどちらかといえば寒冷な方であるということだった。

「西の王都周辺はもう少し暖かい。この辺りは農業よりも、主に牧畜や商業で栄えている」

確かに、街道の周囲に広がっているのは畑よりも一面の牧草地であることが多かった。そこに何頭もの牛や羊の群れがいて、のんびりと草を食べている光景は、まるで絵本のようにのどかだ。牧草地のずっと向こうには深緑の森も見える。

日本にいた頃は色々な本やテレビ番組を見ては外国に憧れていたものだったから、こうして見知らぬ国の見知らぬ風景を眺めるのはそれなりに楽しい。それが美しい風景であれば尚更だ。色々なことを考えないようにすれば、海外旅行をしているようにも思える。

城壁に囲まれた丘の上の街、石畳の小道がくねる路地の角。

立派な教会の尖塔や、軒先に掲げられた鉄細工の看板。

木の骨組みが漆喰を塗った石壁の表面に表れている家屋に、赤茶や灰色の三角屋根。

どれも日本の平凡な田舎町では見ることができないものだ。

もっともアーフェルという国のすべてが観光地の写真のように綺麗なわけではない。通りかかる農村は大抵貧しげな雰囲気、宿場町にはこの間のような泥棒が目を光らせている。街の道端には浮浪

者や乞食がうずくまり、物乞いをして過ごしていた。

日本にもホームレスはいるし、志穂も何度か駅で見かけた覚えがある。だが、この国で浮浪者らしき人々を見かけない日はほとんどなかった。少し大きな街の通りなら必ず数名は堂々として、通行人から憐憫を誘おうとしている。

さすがに強盗の類まで溢れているわけではないようだが、白い杖を盗まれて以来、ラダは以前よりも周囲に対する警戒心を強めているように見える。志穂もなるべく杖から目を離さないように努めた。また杖を取られてずる引きずられるのは御免である。

思い返せば、ラダの杖を盗もつとしたあの少年もひどく貧しげな身なりをしていたし、志穂よりも年下なのに盗みで生計を立てているようだった。

昔のヨーロッパに似たような国に対して、現代の感覚をそのまま当て嵌めるわけにはいかないかもしれない。それでも、アーフェルは豊かな国であるという説明、旅の最中に目にするのどかな風景との落差には、違和感を覚えずにはいられなかった。

そのことを口にする、ラダの表情がわずかに険しくなった。

「……国が豊かで、土地柄に恵まれていても、すべての民がその恩を受けられるわけではない」

彼は珍しく厳しげな口調でそう言つと、それきりこのことについては口を閉ざしてしまったので、志穂もそれ以上訊ねることはできなかった。

「明日にはエテルベリという都市に着く。しばらくはそこに滞在することになるかもしれない」

ちよつと周囲に牛や羊しかいないときを見計らつて、ラダはそんなことを言った。

「しばらくつて、どれくらい？」

「そう長居するつもりはない。せいぜい数日だ。その分、果てへ到着するのは遅れるが……構わないか」

志穂はこくりと頷く。

ラダも毎日毎日歩き続けていては身体に疲れが溜まるだろうし、
休息も必要だろう。むしろずっと大丈夫なのかと思っただけなら、
だから、文句などつけるはずもなかった。

「エテルベリって、どんなところ？」

「大きな街だ」

ラダはそう一言答えた後、さすがに説明不足だと思ったのか、
すぐに言い足した。

「商業で栄えていることから、商都とも呼ばれる。住む人間も、
出入りする者も多い」

「ラダもよく行くの？」

「ああ。……そうだな、ここ五年ほどは数ヶ月おきに立ち寄り」

この青年はどうも雄弁なときとそうでないときとで差が激しい。

そのことがふと気にかかり、志穂は続けて、こう訊ねてみた。

「ラダは、喋るのは好き？」

すると青年は真顔でしばらく考え込んだ。

「……嫌いではない。だが、ずっと黙っているのも苦にはならない。
喋る内容を思いつくときは長く喋るし、思いつかないときは喋らな
い、ただそれだけだ」

「私が質問をすると、いつもきちんと答えてくれるよね」

「シホは、質問をするのが好きだろう」

意外な返しに、志穂は思わずきょとんと瞬きをした。しかし、そ
う言われれば確かに、ラダと会話するときはいつもちから質問
ばかりしていた気がする。

それは単に、今自分が身を置いている見知らぬ世界のことをもっ
とよく知りたいという思いからだだったが、

「そして俺の答えにも真剣に耳を傾ける。……良い聞き手には、よ
く答えたくなるものだろう」

志穂はなんだか恥ずかしくなり、真面目な顔をしているラダから
視線を逸らしてうつむいた。もう少し質問は控えめにすることにし

よう、と心に決めながら。

二人がエテルベリに到着したのは、翌日の昼過ぎのことである。エテルベリは北から南西へ流れる大きな川の中州に存在する街で、入るにはまず川にかけられた石造りの橋を渡らなければならなかった。

槍や鎧で武装した兵士が監視している横を通り過ぎ、頑丈そうな橋の上を渡っているのはラダだけではない。幌馬車を操る商人、野菜を担いだ農民に、いかつい甲冑を着込んだ傭兵など、色々な人々が橋の上を通り対岸を目指している。

ちらりと橋の下を見れば、川面には荷物を載せた船がたくさん浮かんでいた。

対岸の中州には、川岸に迫り来るような勢いでびっしりと建物が居並んでいるのが見える。中州が段々と近づくにつれ、数階建ての背の高い家屋がひしめき合うようにして建ち並び、煉瓦のような赤色の屋根が無数に連なる光景が視界全体に広がってきた。

橋を渡り終えると、すぐに広い通りに出た。

通りにはやはり馬車や荷車、そして大勢の人々が雑然と行き交い、ごった返している。

「わあ……すごい人」

志穂は通りを行くラダに付き従って、群衆の合間をすり抜けながら　時々本当にすり抜けたりもしながら　街中を進んだ。

どうもこの国には歩道と車道という区別がないらしく、歩行者は油断すると強引に先へ進もうとする馬車に轢かれそうになるのが日常のようだ。実際、志穂も何度か後ろから来た馬車に気付かないまま、すり抜けていった馬車の後ろ姿を見てぞつとしたことがある。

しかし、流石にラダは慣れた様子で、人混みの中をすいすいと進んでいく。馬車が近付いてくると無造作に脇へ避けてから、また何事もなかったように進むその姿はなかなか頼もしい。

騒がしい通りをどうにか抜け、狭い路地の一つへ足を踏み入れると、途端に静かになった。

左右を家屋の壁に囲まれた路地は薄暗い。屋根と屋根の合間からほんのわずかに差し込む陽の光が、まるでスポットライトのように路地の一部分だけを照らしている。

志穂はその光を辿るように、頭上を見上げてみた。

すると少女と青年の頭上、かなり高い位置の何も無いところに人が浮いているのが見える。

志穂は一瞬仰天して立ち止まり、まじまじとそれを見つめた。

服装も顔立ちも、ごくごく普通の容貌の男の子だった。肌の色など、ラダよりもずっと健康的に見える。しかし、その人物は明らかに空中を浮きながら移動していたのである。

その少年は、遙か足下の志穂らには気付かない様子で、路地に面した建物の内部へ、閉じた窓から入っていった。無論、音もなくすり抜けるという方法で。

「どうした？」

怪訝そうに振り返るラダに、先程見たもののことを伝えると、

「それは死霊だろう」

と、彼はいともあっさりと答えて首を傾げた。

「しかし、それがどうかしたのか」

「どうかしたのかって……」

「人が多いところには、死者も多い。死者が多ければ、彷徨う死霊も多くなる。……今までの旅の中でもよく死霊を見かけたはずだが、気付かなかったか」

志穂は首を横に振るしかなかった。

自分と同じ死霊が、他にもいる。

そんな当然のことを綺麗さっぱり忘れていたわけではないのだが、やはり霊という何やらおどろおどろしい雰囲気を纏わせていたり、足がなかったり、身体が透けていたりして、とにかく『見れば分かる』ものだと思っ込んでいた。

今の自分自身を顧みれば、そんな先入観が間違いであることにすぐ気付けたはずなのだ。

「……死霊って、傍から見ると、あんな風なんだ」

志穂は思わずそう呟いていた。先程見かけた死霊も、宙に浮いていなければ、普通の生きた人間だと思っただかもしれない。

「そうだな。慣れれば見分けられるが……大抵の死霊は生前と同じ、つまり生きた人間とそっくり同じような姿をしているものだから。実のところ、通りを埋めていたあの群衆も、すべてが生きた人間だというわけではない」

ラダはさらに志穂をぎよつとさせることを言った。

「ほとんどの者は気付かないし、目にもすることもないが、死霊は人の住むところどこにでも紛れ込んでいるものだ。……それに近頃は、さしたる恨みや心残りのあるなしに関わらず、沖つ国へと船出できずに地上を彷徨い続ける死霊が増えている」

ラダの淡々とした表情に、ほんのわずかな陰が差した。

「なんだか寒気のする話だと思った。もともと志穂自身、その彷徨う死霊であることに違いはない。」

志穂は複雑な心持ちで、引き続き路地を進む青年の背中を追った。

やがてラダは、ある小路に面した建物の前で足を止めた。建物の入り口の上には看板が掲げられているが、さすがに志穂もそこに記された文字を読むことまではできなかった。

ラダが扉を開けると、からからと鈴が鳴る。

扉の向こうは食堂になっていた。食事時ではないせいか、人影はほとんどない。

「いらっしやい」

鈴の音を聞きつけたのか、店の人らしき濃い茶色の髪の女性が奥から顔を出した。二十代後半くらいのも、化粧気のない、けれども美人だと一目で分かる女性だった。

彼女は入り口のラダに目を留めると、少し驚いたように声を上げ

た。

「あら、ラダじゃない！ 久しぶりね、最近顔を出さないからどうしたのかと思ってたのよ」

ラダは無表情のまま軽く頭を下げると、

「泊まりたい。部屋はあるか？」

と、愛想のない態度でそう訊ねた。

どうやらここは、ラダの馴染みの宿屋だったようだ。女性は青年の態度にも慣れた様子で頷くと、てきぱきと宿帳を取り出して手続きを済ませた。

「いつもの部屋が空いてるわ。掃除もさつき済ませたばかりだから、すぐに休めるわよ」

「分かった」

慣れた様子で階段を登っていくラダに付いていく。

すると、三階にある部屋の前のところで、今度は男性と行き会った。

「おや、いらつしやい。何月ぶりかな」

この人も宿の人なのだろうか。

男性は先程の女性と同じか、それより少し上くらいの年齢に見えた。髪も同じく濃い茶色、顔形もどことなく似ている。目の色は違うが兄弟なのかもしれない。

彼はまずラダを見て、それから彼の背後にいた志穂に視線を向けると、少し驚いたように目を見開いた。その顔はやはり先程の女性が浮かべていた表情とよく似ていた。

「珍しいこともあるもんだな、ラダがこんな可愛いお嬢さんと一緒だなんて。一体どういう風の吹き回しだい？」

「事情があつて、一緒に旅をしている」

ラダは小声で答えながら部屋へ入っていった。

「へえ、ラダがねえ。こりゃ明日は雨だな」

そう言いながら、男性も部屋の中へと付いていく。

そして当の志穂は、半ば呆然と二人のやりとりを眺めていた。

男性は、明らかに志穂を見ていた。

志穂の姿をきちんと認識して、その上でラダと言葉を交わしていた。この旅が始まって以来のことだった。

「シホ。入らないのか」

小声で部屋から呼ばれ、志穂は慌てて部屋に足を踏み入れた。

あまり広い部屋ではない。だがラダが今まで泊まってきた宿に比べれば、遙かに快適そうな空間が広がっていた。

床はきちんと掃き清められ、寝台のシーツは洗い立てで、鼠の気配もまったくしない。日本では当然すぎるそのことがこの国ではいかに貴重であるのか、志穂ももう把握している。

「綺麗な部屋だね」

思わずそう言つと、先程の男性がにっこりと笑った。

「そうだろう。うちの宿の居心地は最高だからね」

志穂はまごつきながら男性を見上げた。やはり、この人には志穂の姿が見えているのだ。

ラダのように死霊が見える力を持つのだろうか。それとも、あるいは。。。

「……紹介する。この男はジェフという。かつてこの宿の主人だった人物だ」

横からラダが口を挟んだ。それに応じて、男性もまた丁寧にお辞儀をしてみせた。

「死んでこの方十七年、この 水煙亭 を見守り続けている者さ。よろしく、お嬢さん」

こうして志穂は、この世界に迷い込んで以来初めて、自分以外の死霊と対面したのだった。

第五話 死霊術士

ジェフという男性は、先程下で見かけた同じ髪色の女性、この宿の女主人ヘイゼルの父親なのだという。十七年前、二九歳の時に事故で亡くなって以来、ずっと死霊のまま娘を見守り続けているらしい。

「何せ妻はもうずっと早くに亡くなっていて、その上に父親の俺まで死んでしまったわけだからさ。あっちで待っていてくれる妻には悪いが、当時まだ十歳の娘を一人残して、海のかなたの国になんて行く気にはなれなかったんだよ」

親を亡くした娘ヘイゼルは親戚に引き取られることになったが、彼女は父親が残したこの 水煙亭 から離れることを拒んだ。

結局この宿はヘイゼルの後見人となった母方の伯父が経営することになり、この伯父が亡くなってからは、成長したヘイゼルが女手一つで見事に切り盛りしてみせ、現在に至るのだそう。

「父親の俺が言うのも何だけどね、まったくアーフエル、いや世界一の孝行娘だと思うんだよ。下にある肖像画を見たかい？ 見てない？ あれはまだ妻が生きていた頃、娘と三人で旅の画家に描いてもらったものでね、ヘイゼルは今でもあの絵の前で……」

ジェフは放っておけば何時間でも喋っていそうな勢いだ。もちろん死霊ならば、声が噎れて喉が痛くなったりすることもない。

志穂が圧倒されて大人しく彼の話の話を耳を傾けていると、やがて見かねたのか、ラダが横から口を挟んでジェフの語りを止めた。

「変わらないな、お前も。……久しぶりに会ったが、ヘイゼルは相変わらず立派にやっているようだ。そろそろ子離れしてもいい頃だと思うが」

ラダの言葉を聞くなり、ジェフは途端に不機嫌そうな顔になった。「さっさと船出しろ、といういつものご忠言ならお断りだよ」

志穂は思わずラダとジェフの顔を交互に見比べた。船出、つまり成仏とか昇天とかいう意味合いの言葉だ。

「お嬢さんも気を付けた方がいいよ。こいつは死霊と見ると、片っ端から杖を振り回して船出させようとするからね」

はあ、と曖昧に返事をしながら、志穂はラダに杖を突きつけられ、危うく成仏させられそうになったことを思い出していた。ラダとしては善意だったのだろうが、成仏させられるこちらは堪ったものではない。ジェフにも似たような経験があるのだろうか。

当の青年は少し気まずそうな顔をしていた。

「……別に俺は、その辺りにいる害のない霊にまでいちいち船出を促そうとは……」

「それはそうだろうよ、このエテルベリの街一つとって、一体どれだけの死霊がいるやら分かったものじゃない。けど、杖の届く範囲にいる霊ならすべてお前の力を及ぼそうとするだろうが。お陰でこの界限はすっかり寂しくなって……」

はあ、とこれ見よがしにため息をつくジェフに対し、志穂は勇気を出して口を挟んだ。

「あの……でも、ラダは、私の意志を無視して成仏、ええと、船出させようとするのはもうしないって、約束してくれました」
すると、ジェフはやや苦笑気味の表情になった。

「何だ、本当にこんなお嬢さんにまでやらしてたのかい」
「……あ」

志穂は思わず口元を抑えた。フォローのつもりが、逆効果だったらしい。

「まあ、お前さんが人の意志に反することはしないって分かっているからな。そこはお嬢さんも安心するといい。現にこのくそ真面目で律儀な男は、この数年間顔を合わせる度に俺を船出させたがるが、娘を見守りたいって俺の意志を無視してまで船出させようとはしなかったよ」

ジェフはそう言って表情を和らげた。

「それじゃ、まあゆっくりしていつておくれ、ラダ。そちらのお嬢さんも」

そして彼は部屋から去っていったのだが、その去り方というのが、部屋の壁にぶつかってするりと向こう側へ向けていくという、なんと幽霊らしい方法だった。

志穂はまだ目を瞑らなければとてもあのような芸当はできないが、ジェフは目を開けたまま当然のように壁を通り抜けていた。死霊生活も十七年になると、あれくらい気安く壁抜けができるのだろうか。ジェフが去った後、部屋の中には少しばかり奇妙な沈黙が漂った。やがてラダは気まずげな表情のまま口を開いた。

「……すまない。ジェフも悪い人間ではないのだが、一旦娘のことを話し出すと止まらなくなることを失念していた」

うつん、と志穂は首を横に振る。そしてやや間を置いてから、遠慮がちに声を発した。

「あの、ラダ」

「何だ？」

紫色の目が志穂を見下ろす。その目の表面に少女の姿が映り込むことはない事実、少し前から彼女は気付いている。

ラダはやはり今も、霊は皆大人しく成仏するべきだと考えているのか。

本当のところはそう訊きたかったのだが、志穂の口から滑り出たのは別の質問だった。

「ええと……この国では、霊が死後の世界へ行くことを船出って言うんだよね？」

本来訊きたかったこととは違うものの、お互いの言葉が自動的に翻訳されていると知ってから、志穂が抱いていた疑問の一つである。

ラダやジェフが口にする『船出』という言葉が、彷徨う幽霊が成仏するという意味で使われているのは明白だ。しかし志穂の知る限り、日本語にそんな意味はない。文脈で大体理解できるとはいえ、

固有名詞でもないのに、翻訳されて聞こえる言葉と日本語の意味がはつきりずれているのは、この『船出』という言葉だけのようだ。もしかしたら、この国の言葉では元々、『成仏』と『出航する』とが同じ単語で表現されているのかもしれない。

「まれびとの国では、船出とは言わないのか」

その予想を裏付けるように、ラダはそう言っただけ首を傾げた。

「うん。私の国では、船出っという言葉には、船が港から出航するっという意味しかない」

「そうなのか？ いや、こちらでも、出航することを船出とは言っが……」

ラダは例によって真面目な顔で考え込んだ。

しばらく待っていると、やがて彼は顔を上げ、窓の外に視線を投げかけた。小路を挟んで向かいに立ち並ぶ建物の屋根の合間から、昼下がりの青空が覗いている。

「……死して肉体を失った魂は、本来、地上を離れて海の方に向かうところにあるという死者の国へと向かう。だから死者の国は、沖つ国、あるいは海のかなたの国と称される。この点は、古い教えも、アーフェルの教会の教えでも変わらないし、俺が行ったことのある異国でも大抵はそうだった」

「海の方に向かう、死者の国……？」

ふと、志穂は目覚める前に聞いた波の音を思い出した。

幻聴か、それこそ夢かと思っていたが、もしかしてあれは死者の国への誘いだっただろうか？

「……沖つ国が実在するのかどうかは知らない。俺も見たことはないから。いずれにせよ、海の方に向かうには船が必要だろう。だから、船出すると思うのだと思う」

志穂にも分かりやすい、単純明快な理屈である。

しかし何か引つ掛かるものもあった。確か志穂たちの目指す目的地である 果て も、海辺の方に向かうの遙か沖合にあるのだとラダは言っていないかつたろうか。

まればとは沖合にあるこの世の 果て の向こうからやってくる。この世界の死者の魂は、海のかなたの死者の国へ行く。

つまるところ、この世界における海とは、様々な異界に繋がっている場所だということなのだろうか。込み入った話に内心で首を捻っている。

「シホの故郷では、死者はどこに行くものなんだ？」

珍しくラダの方から質問をしてきた。

「ええと……あんまり詳しくないけど、色んな話があったよ。天国、極楽、地獄とか、黄泉の国とか、三途の川とか……」

故郷で葬式に参列したことはなく、死について真剣に考えたこともなかったから、とりあえずうる覚えの単語を並べ立ててみる。

そんないい加減な話でも、ラダは興味を持ったようだった。

「やはり異界では、死後の国に対する観念も異なるのだな」

その後はしばらく、ラダが質問し志穂が答えるという、いつもとは逆の形になった。

清潔で居心地の良い部屋での、穏やかな午後である。窓から差し込む光は明るく、ぽかぽかと暖かった。これで話題が死後の世界についてなどという暗い話でなければもっと良かったのだが、とりあえずラダは楽しそうだった。

そんな風にして、二人はその日の夕刻までのんびりと過ごした。

「シホ。これから少し出かけることになった」

ラダがそう言い出したのは、もう日の暮れかけた時分のことだった。

青年は外套を着込み、白い杖を片手に握りしめていて、本格的に外出する雰囲気だ。

「どこに行くの？」

「少し離れたところにある裏町だ。若い娘が見に行っても、あまり楽しいところではないと思う、が……すまない」

志穂は頷いた。ラダの手に杖がある以上、少女には彼の後を付いていく他に選択肢がない。別行動を取ろうとしても、どうせまた引きずられてしまつに決まつている。

「おや、ラダ、今から仕事かい？ 気を付けるよ」
ジェフの声に見送られながら、ラダと志穂は宿を出た。

宵闇が迫る中、二人は複雑に入り組んだ路地や通りをいくつも足早に通り返けた。明かりの灯った店があるような通りはともかく、細い路地には街灯はまったく存在せず、建物の陰が色濃く被さっているところでは、足元の確認すら覚束なくなるほどに暗い。

そんな暗さをもともせずに進むラダがやってきたのは、どこか不気味な雰囲気をする界隈だった。

道は人が二人すれ違つのがやつとの狭さ。妙に肥え太つた野良猫が道のゴミを漁つて残飯らしきものを食い散らかしている。

立ち並ぶ建物の軒先の看板はどれもおどろおどろしい怪物を象つたものばかりで、中には山羊の頭部の剥製を堂々と表に出している建物まであった。

「……これ、全部店なの？」

と、志穂は呟かずにはいらなかった。だとしたら、一体どんな得体の知れない店なのだろう。

まるでお化け屋敷のように飾られた家々の前を通り過ぎ、ラダが扉を叩いたのは、不気味な看板も飾り付けもない家屋だった。足を踏み入れた内部も簡素でごくごく普通の民家に見えたので、志穂は一旦胸を撫で下ろした。

だが、奥で青年を待っていたのは、漆黒のローブを身に纏つたいかにも怪しげな老婆だった。白髪はところどころ禿げかかっている顔中に皺という皺が刻まれている。これで杖でも手にしていたら、ラダよりもずっと魔法使いらしく見えただろう。

「待つてたよ、ラダ」

老婆はラダを見上げると、志穂には気付いていない様子で話を切り出した。

「至急お前に頼みたい仕事があるんだ。報酬は弾むよ、何せ相手はお貴族様だからね」

「貴族？」

ラダはほんのかすかに嫌そうに眉をひそめると、その場に立つたまま続きを促した。

「エテルベリに屋敷を構えてる、ブレニー子爵が依頼人でね。屋敷に死霊が出て、このままでは祟り殺されるかもしれないと言って、藁にも縋る思いで噂を辿り、死霊術士の力を借りに来たというわけさ」

老婆は意地の悪そうな表情で笑う。顔中の皺がますます深くなつた。

「子爵が相手じゃペテンでごまかすのも危ないからね、お前が来てくれて助かったよ。それに子爵も運が良い、貴重な本物の死霊術士がちょうど立ち寄ってくれたんだから」

青年は無言だった。

なんだかよく分からないが、死霊術士としての仕事の斡旋ということなのだろうか。青年が名乗っていた死霊術士なる肩書きは、冗談というわけではなかったらしい。

ペテンなどと言っていたり、志穂の姿が見えていないあたり、この老婆にはラダのような力はないようだ。

「子爵の話では、死霊は夜中に出てきて屋敷の中を彷徨い、子爵やその家族、召使いに至るまで区別なく首を絞めようとするそうだよ。やれるかい？」

一瞬黙り込んでから、ラダは淡々と答えた。

「……それが死霊なら」

ちらりと見上げた横顔は、旅の最中によく見かけた、あの冷たい無表情に戻ってしまっていた。

ブレニー子爵の屋敷は、街の中心部に近い高級住宅街にあった。

土地の限られた中州の街の中にも関わらず、屋敷にはそこその広さの庭があり、蔓草模様に細工された鉄柵があり、馬車が通れる大きな門もあった。貴族というものを知らない志穂でも一目でそれと分かる、お金持ちのお屋敷そのものである。

夜中、人目を憚るように屋敷を訪れた青年を迎えたのは、屋敷の執事だという男性だった。彼はラダよりも遙かに身なりの良い紳士だったが、その頬はげっそりと痩けていて、ラダの姿を見る目には縋り付くような雰囲気があった。

「あれが出始めて、もう半年になります……。召使いたちは次々と辞め、奥方は心労のあまり伏せられ、お坊ちやまやお嬢様方と共に別宅にお移りになりました。私も三度ほどあれに首を絞められまして……」

と、執事は細い指先の跡が赤く生々しく残る首を見せた。

「幸い、三度ともすぐに気付いてはね除けようとしたり、叫んだりしたところ、すぐに離れていきましたが……。もし意識のない時分であればと、今でもぞつといたします」

「貴方は、その死霊に見覚えは？」

暗く静まり返った屋敷の廊下を見やり、ラダは至って落ち着いた口調で訊ねた。これから悪霊を祓いに行こうというのに、微塵の怯えも感じられない。

「いいえ、ございません。私も子爵からこの屋敷の差配を任されている者ですから、ここで雇っていた者は、下働きも含めて全員の顔を覚えていきます」

「では、その死霊はこの者ではないと？」

「はい。少なくとも、この十年の間にいた者ではございません」
そんなことを話しながら、二人は執事の持つランプの明かりだけを頼りに屋敷の内部を進んでいく。志穂はその少し後から付いていきながら、きよるきよると辺りを見回した。

ぴかぴかに磨かれた床、壁を覆うタペストリーや絵画、要所に配置された銀の燭台。

日中ならさぞかし豪華絢爛なのだろう屋敷も、真夜中の闇の中ではただただ不気味な印象しかない。ちよつと油断して気を逸らした瞬間、すぐその真つ暗闇から何かが躍り出てきそうだ。

もつとも、今の志穂はむしろ『出る』側である。

そのことを思うと、暗闇に怯えるのは馬鹿馬鹿しいことのように感じられた。

「ここが、悪霊が一番多く目撃されている場所でございます」

執事が案内したのは、本棚が壁一面に配置された書斎だった。部屋の中央にはテーブルと絹張りの椅子が置かれ、ちよつとした応接間のような雰囲気もある。

ラダは一度書斎をぐるりと見回した後、しばらく考えてから本棚に近付き、そこに並ぶ立派な装丁の背表紙を眺めた。

「こちらの書物の中に、死霊が出始める少し前に入手したものはありますか」

青年の質問に、執事の顔が曇った。

「それが……その書棚にある本は、半分が半年前に運び込まれたものなのです」

「といつと?」

「半年前、子爵家のあるご親族が急死され、その財産の一部を子爵がご相続されたのですが……。その方は熱心な書物の収集家であられたそうで、財産の多くは書物でございました。それらの書物をここに収めたのです」

「では、悪霊はその書物のどれかに取り憑いていたのかもしれないん」

冷静な指摘に、執事はますます顔を曇らせた。その可能性には気付けていたものの、有効な方策を取れずに手をこまねいていた、といった雰囲気である。

「は……しかし、これらはすべて貴重な書物です。一冊だけならば断腸の思いで処分することもできましようが、数十冊ともなると……私どもにはどれが悪霊つきの書物かは分かりませんし……」

「なるほど」

「書物を燃やすことは子爵もお望みではありません。どうか穏便に、悪霊だけを退治していただけると有り難いのですが……」

分かりました、とラダは素っ気なく答えた。いたって事務的で愛想の欠片もない。旅路でもそうだったが、仕事中でもいつもこんな風なのだろうか。

「では、しばらくこの部屋で一人にしてくれませんか」

執事はあからさまに難色を示した。

はつきりと口に出しては言わなかったものの、高価な書物や調度品が並べられた一室に怪しい死霊術士だけを置いて目を離すわけにはいかない、とその目が物語っている。

が、それでも結局は死霊に対する恐怖が勝つたらしく、執事は大人しくラダの言葉に従って部屋を出て行った。

執事がいなくなると、ラダはため息を吐いて白い杖を握り直した。

「シホ」

低い小声で話しかけられ、志穂は少し首を傾げた。

「何？」

「仕事が終わるまで、俺の傍を離れないでくれ」

言われなくてもそうするつもりだったが、何かわざわざ口にして頼むだけの理由があるのだろうか。

「靈感のない人間の目にも見えるほど、強い恨みを持って現世に執着している霊は、大抵の場合見境がない。シホにも害が及ぶ危険性がある」

「……霊は霊を傷付けることができるの？」

志穂は思わず顔を引きつらせた。

「いや、血を流すという意味では傷付くことはない。ただ……死者は肉体を持たない故に、色々と影響を受けやすいものだから。特に怨念は猛毒だ。何か変だと思っただけならすぐにこの杖に縋った方がいい」

何だかよく分からないが、ラダが危ないというからには危ないのだろう。

分かった、と頷こうとしたとき、不意にないはずの背筋が冷えた。
何かがいる。

自分でもよく分からない、勘としか言い様のない力で、志穂は直感した。

何か得体の知れないものが、志穂とラダを見つめていると。

「……シホ」

言葉少なに促され、志穂はそろりとラダの傍へ寄った。

青年は険しい顔で書斎を見渡している。

ほんの十数秒、けれども果てしなく長く感じられた沈黙の後、彼はふと本棚の隅に目を留めた。金箔で縁取られた、とても高価そうな革表紙の本に手を伸ばし、躊躇なく引き抜く。

次の瞬間、志穂は危つく悲鳴を上げるところだった。ラダの背後に、何の前触れもなく女の姿が現れたのだ。

顔形は美しい女性である。腰近くまである長い巻き毛の金髪を垂らし、色鮮やかな刺繍が施されたドレスを着ているが、その足は地面に接することなくふわふわと浮いていた。

女は青白い手を持ち上げ、ラダの首に手をかけようとする。

だが彼は動じることなく、右手に杖を、左手に本を持ったまま振り向いた。そして、

「お前の名は？」

そう冷静な口調で訊ねた。

死霊の女性は少しばかり戸惑ったように動きを止め、形の良い眉をひそめて青年を見つめた。そんな仕草は、ごく普通の女性のように見えなくもない。

「俺はラダという。お前の名は？」

そう問いを繰り返しながら、死霊の女性と見つめ合うラダを、志穂は傍らではらはらしながら見守る。

「……カレン」

やがて女性はぼつりとそう答えた。か細く透き通るような声だった。

「どうして貴方は私を見て怯えないの……？」

彼女は不思議そうに訊ねた。

「この者は皆、私を恐れる……悪霊と呼ぶ……私は何も悪いことをしていないのに……」

屋敷中の人間の首を絞めて回ったのではないのかと志穂は思ったが、口には出さなかった。女性はどうもラダのことに気を取られ、志穂の存在には気付いていないようだ。

「何もしていないと？」

「ええ……何も……」

「ならば何か行き違いがあったのかもしれない。カレン、お前はいつも、屋敷でどう過ごしている？」

死霊の女性、カレンは子供のように首を傾げた。

「私は……いつも……あの人がやったようにする……」

「あの人？」

青年の声に鋭さが増す。

「私の大切な……大切な……この方が幸せになれると……暗い書斎……最初は苦しかったけど、とても気が楽になった……」

断片的で、とても意味の繋がらない言葉。

けれどもそれに耳を傾けているうち、志穂の脳裏に、奇妙な光景が思い浮かんだ。

蠟燭一つしか明かりのない、薄暗い書斎の中だった。

閲覧台に一冊の本が広げられている。金箔で縁取られた高価そうな書物だ。

その傍で、男性と女性が二人で何か話している。二人とも険しい顔で、何事か揉めているようにも見えた。

やがて女性が後ろを向いた途端、男性は手に持った縄で女性の首を締め上げた。

苦しみ暴れる女性の手が閲覧台の本に触れて、そして。。。

「シホ？」

ラダの声に、志穂ははつと我に返った。

暗い書斎の中をきよろきよろと見回す。だが、先程見たものではない。閲覧台はどこにもない。そう、ここはラダの仕事のために訪れた、ブレニー子爵の屋敷の中だ。

「どうした。……何か見えたのか？」

心配そうに訊ねられ、小さく頷く。

まさに『見えた』という表現がぴったり当て嵌まる。他に表現しよのない感覚だった。

「書斎で……こことは違う書斎の中で、男の人が、女の人の首を……」

最後まで言い切ることはできずに、志穂は言葉を濁した。

首を絞められた女性の顔。

あれは確かに、今日の前にいる死霊の女性と同じ顔だった。

「そうか……分かった」

ラダは真剣な顔で頷くと、女性の方へ向き直った。

「幸せ……幸せ……」

カレンという名の女性はもうラダのことすら見えていないようだった。ただうつとりとした顔で、思い出に浸っている。

「だから、私、皆に幸せを分けようと思って……思った、のに……」

あの人にも……幸せになるようにと

不意に彼女の言葉が途切れた。

細い肩がわなわなと震えだし、美しい顔が険しくなり、細い手がきつく握りしめられる。

志穂は胸の内が苦しくなるのを感じた。

どうして、と思った。

どうしてあの方は、こんなに恐怖の顔を浮かべたまま冷たくなってしまうのだろうか？

どうして皆私を恐れるのだろうか？

どうして、どうして、どうして幸せになっただけの私は、こ

んなにも辛いのか？

それらの感情は、決して志穂自身の中から来る思いではない。

おそらくは、目の前にいる女性の心。それが何故か、自分のもののように感じられるのだ。

「カレン」

ラダは静かに女性の名を呼んだ。

「お前はもう、過去を忘れて沖つ国へと船出するべきだ。このままここにいては、お前はもっと不幸せになってしまう」

カレンはのろのろと顔を上げ、ラダを見つめた。

「道が分からないならば、俺が手助けしてやれる。さあ」

そう言っただけ差し伸べられた青年の手を、しかしカレンは取るうとしなかった。彼女は能面のような無表情で彼の手を見つめた。そして、

「ラダ！」

胸を突き刺すような感情の奔流に、反射的に志穂は叫んだ。叫ばずにはいられなかった。

それは憎悪だった。

何もかも消えてなくなってしまうという、自暴自棄な破壊の意志だった。

志穂の叫びに反応した青年が驚いたように思わず手を引っ込めたのを見て、カレンは笑った。

「不幸せ？」

彼女の美しい顔が見る見るうちに歪んでいく。

「手助け？ 戯言を！」

カレンは叩き付けるような怒声を浴びせかけると、ふいと踵を返して書斎の外へと出て行った。

書斎の外から、扉越しにあの執事の叫び声が聞こえた。

慌てて外に出たラダに従い、志穂も書斎を出る。

そして息を呑んだ。

暗い廊下の真ん中に、執事が立っていた。

執事の頭はがくりと力なく頂垂れ、唇の端からは涎まで垂れている。どう考えても気絶しているように見えるのに、彼の体はその場に倒れる気配がない。まるで糸で操られた人形のように、少し傾いた奇妙な姿勢で佇んでいる。

執事は頂垂れたまま、書斎から出てきたラダに飛びかかってきた。ラダが横に跳びすさってそれを避けると、執事の体は扉にぶつかり、跳ね返って床の上に崩れ落ちた。

しかしすぐに起き上がる。顔には痣ができていたが、執事は何事もなかったかのようにラダの方へと向き直った。

志穂はぞつとした。まるでホラー映画に出てくる化け物のようだ。「カレン。その男から離れる。彼はお前とは何の関係もないはずだ」ラダは鋭い声で、執事に向かって言った。

すると、執事の肩の少し後ろの辺りにあのカレンの姿がぼんやりと浮かび上がった。白い指先が執事の首に掛けられている。

彼女が執事の体を無理矢理動かしているのだ。志穂はそう気付いた。

「私は死者の国になど行かない！ 行くものか！」

カレンは、先刻のか細い声が嘘のような苛烈さで叫んだ。

「もう、おしまい。皆、私を恐れるばかり。幸せになれない。だから……、この男もあの人と同じようにしてあげる」

カレンの指先が、ゆっくりと、しかし確実に深く、執事の喉元に食い込んでいく。

殺す気だ、と志穂は悟った。首を絞めて殺す気なのだ。

彼女が男にそうされたように 彼女が男にそうしたように。

ラダは一瞬、唇を噛みしめたようだった。

だが彼が躊躇うような素振りをみせたのはほんの一瞬のこと、すぐに表情を消して白い杖を振りかざした。

「ラダの名において命じる」

その声はあまりに低く、はっきりとは聞き取れなかった。だが彼が続いて紡ぎ出した呪文の響きは、以前耳にしたものとよく似てい

るような気がした。志穂を船出させようとした、あの時のものと。カレンがはっと怯えたように後ずさり、執事の体から離れた。途端に執事の体はその場に崩れ落ち、床の上に倒れ込む。

だがラダは少しも表情を変えず、呪文を唱えながらカレンに杖の先を向けた。

「やめて！」

カレンは蒼白な顔で悲鳴を上げた。

「いや、やめて、私は船出などしたくない！」

悲痛な叫びにも、ラダは呪文を唱えることを止めない。

ただただ冷たい無表情で、彼は呪文の最後をこう締めくくった。

「 還るべき国へ行け」

悲鳴が止んだ。

志穂は思わず口元を手で覆った。

カレンの姿が見る間に薄くなつていく。腰近くまである長い巻き毛の金髪が、ドレスが、美しい顔が虚空に溶けていく。白い手がかくように宙を掴んだが、その手もやがて霧散して消えていった。

あまりにも呆気なく、カレンの痕跡すらもう見えない。

そうして後に残ったのは、静寂と、顔に痣を作った執事の体だけだった。

ラダは杖を下ろして小さく息を吐くと、倒れている執事の傍に近づき、軽くその肩を揺さぶった。

執事の男はわずかに呻き声を上げると、頭を押さえながら起き上がった。そして目を瞬かせ、状況が把握できないかのように周囲を見回す。どうやらカレンに操られていた時のことは何も覚えていないようだ。

「死霊は去りました」

そんな執事を見下ろして、ラダは端的に事実を告げた。

執事は呆気に取りられたように青年を見上げている。半信半疑の色がその目の奥を掠めた。

だが青年は説明のためにいちいち言葉を尽くしたりせず、無愛想

に続けた。

「もう貴方がたは悪霊に悩まされることはないでしょう。報酬はそれを確認した後で構いません。仲介人から裏町のケル婆に渡してください。だされば結構です」

それだけを言い残すと、まだ呆然としている執事を残して、ラダは屋敷から立ち去っていった。

「……あの、ラダ」

屋敷から出た後、その外観が路地の角に隠れて完全に見えなくなった頃を見計らい、志穂はおずおずとそう声をかけた。無論、周囲に気がないことを確認してから。

「何だ？」

返ってくる声は存外柔らかく落ち着いている。

「あのカレンという人は、その……船出、したんだよね」

「ああ」

「それは、その、なんていうか……ラダの術で……ええと」

彼女の意志を無視して強引に船出させたのかという言葉は、さすがに口にすることはできなかった。だがラダは志穂の言わんとすることを察したのか、首を振った。

「……できれば、彼女自身に納得して船出してもらいたかった」

先刻の冷やかな態度とは違い、その呟きにはかすかな哀れみが含まれている。そのことは志穂の胸に安堵の思いをもたらした。

正直なところをいえば、無慈悲に呪文を唱えてカレンを消し去った青年の姿はとても恐ろしく感じられたから。

「だが彼女はもう、人に害なす悪霊と化していた。あのままではまた人を殺していたら。ああするより他に手がなかった」

志穂は思わずうつむいた。

カレンの言動は明らかに脈絡がなく、真つ当な思考が失われている。恨みの強い死霊はああなってしまうものなのだろうか。大切だ

と思っていたような人に殺されてしまったら。　そしてその人を殺してしまつたら。

同じ霊でも、自分は違う、と思いたい。志穂は誰かに危害を加えようなどとは思わない。しかし。

「……あの人の感情が、胸の中に流れ込んできたの」

感情だけではない。おそらくは彼女が死んだ時の過去の情景もこの目に見えたのだ。

死者は体を持たない故に、色々と影響を受けやすいとは、こういうことだったのだろうか。そう訊ねると、ラダは神妙な顔で頷いた。「魂だけの存在であるせいなのか、死霊は、他の死霊や……時には生きた人間の思いや記憶をそのまま感じ取ってしまうことがある。そのせいだろう」

そう言つて、ラダは少し申し訳なさそうに眉を下げた。

「すまない。辛い思いをしただろう」

志穂は首を横に振つた。

彼女が感じたのは、あのカレンという女性の痛みだ。志穂自身が辛いと感じたわけではない。それを無関係の志穂が辛いと思うことは、カレンに対して失礼な真似のような気がした。

ラダはきちんと仕事をした。カレンが人を殺し、またあの執事を殺そうとした悪霊であることは確かで、その彼女を祓うのは正しいことだ。

それでも消える寸前のカレンの恐怖の表情が、存在しない脳裏にちらついて離れない。

この世界の死者が行くという沖つ国という場所が、優しく穏やかな場所であればいいと思つた。もしそうならカレンも、向こうで少しは安らげるかもしれない。

未だに船出を拒む死霊の身でそんなことを思つるのは滑稽だと分かっている。

だがそれでも、志穂はそう思わずにはいられなかつた。

裏町のあの老婆のところへ戻ってくると、ラダは淡々とした口調で仕事の完了を報告した。

老婆は上機嫌になって、子爵から報酬が届けばすぐに知らせると請け合う。

ラダは頷くと、用は済んだとばかりにさっさと踵を返そうとした。しかし、

「半端者の似非術士どもとは訳が違う。さすがは 死の民 の生き残りだね」

老婆が口にしたその言葉に、青年は志穂が驚くほどの剣幕で振り返り、老婆を睨み付けた。その目は、志穂がこれまで見たこともないほど激しい怒りの色に染まっていた。

「その言葉を口にするな。以前にもそう言ったはずだ」

目つきの苛烈さとは裏腹にこれ以上ないほど冷ややかな声音に、老婆はさすがに怯んだようだった。

そしてそれをごまかすように、わざとらしい口調を作って呟く。

「おやおや、穏やかじゃないね。少し口が滑っただけじゃあないか」

そんな老婆をしばらく睨み付けた後、ラダは小さく息を吐いて、今度こそ踵を返した。

そのまま足早に立ち去ろうとする死霊術士の青年の背中に、老婆は最後にこんな言葉を投げかけた。

「……お探しの竜は見つかったのかい、ラダ？」

ラダは答えなかった。

第六話 船流し

ラダは眠りが浅い。

少しでも物音がすればすぐに目を覚ますし、就寝時間がどんなに遅くなっても、必ず夜明け前に起きてくる。エテルベリに滞在する間もそれは変わらなかった。

毎日朝早くに起きて街道を歩き続ける過酷な旅から一時的に解放されたのだから、疲労を癒すためにも、もっとゆつくりすればいいのにと志穂は思うのだが。

「あいつは昔からああだよ。夢を見てうなされないだけ、昔よりもましになったかな」

と、水煙亭の元主人の死霊、ジエフは訳知り顔で言う。

ラダは今、賑やかな食堂の片隅で食事を取っている。旅路の最中にいつも口にしていたような濁った豆のスープではなく、温かそうな湯気の立っている玉葱と人参のスープと、汁物に浸さなくても食べられる硬さの黒パン、ベーコンと炒り卵、それにチーズという、真つ当においしそうな食事だ。

志穂はそれを少し離れたところで眺めながら、同じく食堂で客の対応をしている女主人を見守るジエフと会話を交わしていた。

「ジエフさんは、ラダと昔から知り合いなんですか？」

「ああ、初めて会ってからもう五、六年になるかな。あいつもまだお嬢さんと同じような年頃で、まあ小生意気そうな顔をしていてね」
そう言われて、志穂はふと中学の同級生の男子のことを思い出した。

いつも明るく騒がしい少年、お調子者で妙に女子にちょっかいばかりかける奴、教室の隅で本ばかり読んでいる大人しい子。クラスの中だけでも色々な男子がいたが、ラダにもあんな年頃の時があったのだらうか。

今の落ち着いた感じの青年の姿からすると、正直なところ、あま

り想像がつかない。

「船出することが霊にとつても世界にとつても一番良いことなのだ、なんて、顔を合わせる度に説教垂れてね。そのくせ悪夢にうなされると飛び起きて、朝が来るまで部屋の隅で震えてた……俺が心配して話しかけても、うるさい消えろ、って叫んでさ」

志穂は眉をひそめた。

今のラダが悪夢にうなされている様子は見たことがないが、志穂と同じ年頃の少年が悪夢にうなされて震えるというのは、背景に何か複雑な事情が垣間見られるような、詳しく聞くことが躊躇われるような　とりあえずあまり穏やかでない話である。

「そういふ調子だから、ヘイゼルも随分心配して、あいつの世話を焼いてたもんだよ。昔から弟が欲しいって言ってたしなあ。あいつがエテルベリにふらふらと現れては、ちよつと滞在してすぐにいなくなる度、またどこかで行き倒れてやしないかって気に揉んでさ。まったく」

そんなことを言いながら腕を組むジェフの視線の先で、食事を終えたラダが立ち上がった。心なしか、いつもより満足そうな横顔をしている気がする。やはり彼も濁ったスープよりは透き通ったおいしいそうなスープの方がいいらしい。

「ともあれ、あいつはどうも、人と仲良くするってことが苦手みたいだからね。霊とはいえ、あいつが他人を傍に置くんなんて今までなかったことだ。お嬢さん、なるべく仲良くしてやってくれよ」

はい、と志穂は頷いたものの、本当にそうできるのか、あまり自信は持てなかった。

志穂とラダの関係は、あくまで旅の道連れに過ぎない。

青年の言葉を借りれば利害の一致で　果て　まで共に行くという契約を交わした、ただそれだけの関係。

そもそもラダが自分のことをどう思っているかも定かではないのだ。

ラダはよく親切にしてくれると思うが、それだって志穂がああ山

里で殺されたばかりの死霊で、何も知らないまればとで、しかも年下の少女だからだろうとも思う。

さらに客観的に見れば、志穂の方が彼の杖に勝手に取り憑いた死霊なのである。今のところあまり迷惑はかけていないと思いたいが、成仏を拒んで彼の母の形見に取り憑いた時点で迷惑をかけている気もする。

志穂が今までにラダの役に立ったことといえば、あの白い杖を盗難から取り返したことからだろうか。いくらラダ本人が「付いてくるだけでいい」と言っても、なんだか居心地が良くないことには変わりなかった。

今日のラダは、宿の中庭の井戸のところに着替えの服を洗濯をしたり、旅の間に破れた外套の裾を繕ったり、買い出しに行ったりと動き回っていた。

その間、志穂はやはり何もすることがない。

意識すれば物は持てるのだから、部屋での繕い物くらいなら手伝えるかと思っただが、ラダの針遣いはとても素早く手慣れていた上に、縫い目も非常に細かく、せいぜい家庭科の教科書通りにしか針と糸を使えない志穂ではとても太刀打ちできそうになかった。何でも、何年も一人で旅暮らしをしていると自然にこういう技が身につくものなのだそうだ。

そんなわけで、志穂は何の役にも立てないまま、ラダが買い出しに行く際に部屋に置いていった白い杖の傍で留守番をしている。とはいえ、

「死霊つてのは暇だろう。額に汗して働く必要もないし、話す相手もそういない」

幸い、ジェフが時々部屋に来て 無論壁や床や扉をすり抜けてだが 話しかけてきてくれたので、それほど退屈することはなかった。

「お嬢さんはどこの国から来たんだい？ その顔立ちにその服、ア
ーフェル人じゃないだろう？」

だが、そう訊ねられた時は困った。

日本といっても分からないだろうし、別の世界から来たと言っ
てすんなり受け入れてくれるとは限らない。『まればと』という存在
を普通に受け止めていたラダは、ジェフやヘイゼルのような街の人
々とはかなり毛色の違う人物のようだから尚更である。

「ええと、ここからはずっと離れた国です」

仕方なく曖昧に返答した志穂に、ジェフはさらに問いを重ねるこ
とはしなかった。何か事情があるのだろうと察した様子だった。

「あの、それより……ジェフさんは十七年ここで過ごしているんで
すよね」

良い機会なので、志穂はジェフに死霊として過ごすことがどんな
風なのか訊ねることにした。

何せ彼は十七年も霊体の状態で過ごしているのだ。志穂が気付い
たこと、ラダが教えてくれたこと以外にも、霊という存在について
具体的に知っているかもしれない。

「うーん、十七年っていつても、霊の世界じゃまだまだひよっこみ
たいなもんだだけだね。俺が知ってるだけでも、通りの向こうにある
教会に憑いてる爺さんは、百年前からあそこにいるって言うし。ラ
ダも説得を早々に諦めたほどの頑固者さ」

「百年……」

生きたのはたった十四年、霊体となつてからまだ一ヶ月も経たな
いような少女には想像もつかない、途方もない年月である。その老
人は、どんな思いでそんなに長い間死霊として地上に留まっている
のだろう。

「それに俺はラダの奴みたい知識があるわけじゃないから、ほと
んど体感だけど。それでもいいなら」

そう前置きしてから、ジェフは死霊として過ごすことについて、
丁寧に教えてくれた。

霊に確かな実体はないが、自分の意志次第で実体のあるものに触れることができる。これは志穂も既に把握しているが、物だけでなく、人や犬などの生き物にも触れることはできるという。

「ただしこつちが真つ当な死霊で、触れられる方に霊感がないと、大抵の場合は気付かれないな。せいぜい誰かに肩を叩かれたような気がする、で終わりだ。ラダみたいにはつきりと死霊の姿を見ることとができて、おまけにあつちからも俺たちに干渉できるような人間は相当稀だと思うよ。俺もあいつ一人しか知らないし」

それから、何かに取り憑いている霊はその物や人や土地から遠くへは行けないこと。ジェフに杖を見てもらって試しに宿の外に出てみたが、杖から直線距離で何十メートルも離れることはできなかった。

ジェフが憑いているのはヘイゼルのいるこの 水煙亭 そのものだが、彼はこの宿から周囲百メートルくらいはうるつけるそうだ。その辺りは年季の差なのだろうか。それとも憑いているのが物品か土地かの差なのだろうか。

「どうだかなあ。さっき言った教会の爺さんは一步も教会から出ないよ。俺はぎりぎり教会に足が届くから、たまに顔を合わせられるけど」

その他にもジェフは、色々なことを語ってくれた。

霊でも五感を最大限に活用しようとするればものを食べられないことはないが、栄養になるわけではないし、飲み込んだ食べ物は消化されずにべちゃりと床の上に落ちることになるので、あまりお勧めはしないこと。

眠ろうと思えば何日でも眠れるが、霊の眠りに真つ当な意味での夢が訪れることはないこと。

霊の姿は自身の生前の記憶から形作られているものだから、やろうと思えば服を替えたり、若い時の姿に変わったりできるが、やりすぎると段々自分の元の姿が分からなくなって存在が薄くなり、しまいには消えてしまいかねないので気を付けること。

実体あるものに干渉する術として、普通に触れる以外にも『憑依』して直接動かすという手段があるが、これを生者に対して行うとその者の記憶や感情にいつもより影響されやすくなること、何より悪霊の類がよくやる行為であるので、人に憑依している霊を見つけたら避けた方がいいこと。

最後に彼は、何やらしかめ面を作った。

「生者に無闇に干渉することは、人に躊躇いなく害を為す悪霊への近道。もしお前が悪霊と化せば、俺はお前の意志を無視してでも船出させる。そうしなければ、人を害する悪霊は無数の怨念を溜め込み、怨念は毒蛇と化して、やがては世界の理までも崩壊しかねない」

どこかで聞いた覚えのある生真面目な口調でそう言うと、ジエフはふつと表情を和らげてかすかに苦笑した。

「そうラダに言われたことがあるよ。大仰だと思いかもしれないが、お嬢さんも覚えておいた方がいい。俺たちは鏡にも映らないような死者で……、ここは本来俺たちのいるべき国じゃないんだ、って」
それを忘れて思うままに振る舞おうとすれば、いずれ反動が来る。

ジエフの真剣な忠告に、志穂は無言で頷いた。あのカレンという女性も、生きた人間を殺してしまわなければ、怨念に囚われてあんな風になって、ラダに強引に船出させられるようなことにはならなかったはずだ。

(……でも、なんだか……)

それでもかすかに胸が痛むのは何故だろう。

腹の底のどこかで納得できない思いが渦巻くのは何故だろう。

ラダが死者を目にし言葉を交わし触れ合える死霊術士の青年であっても、彼はあくまで生者だからだろうか。どんなに人を避けて無愛想にしても、彼はちゃんと生きた人間の目に見える存在ではないかと、そう思ってしまうからだろうか。

「ともあれ、悪霊なんて言われるような質の悪い奴はもちろん、少

しでもおかしいと思った霊には近付かない方がいい。まあ、お嬢さんがラダの杖に憑いてるんなら、あいつの仕事上なかなかそうもいかないかもしれないが、なるべくなら

「はい。ありがとうございます」

志穂は深々と頭を下げた。

「他に何か聞きたいことはあるかい？　アーフェルのこととか、この街のこととか」

そう言われて、志穂が真っ先に思い出したのは、昨日あの怪しげな老婆が口にしていた言葉だった。

死の民。

そして、竜。

「あの、ジェフさん」

その声を上げてから次の言葉を発するまで、志穂は一拍の間を置いた。

さすがに 死の民 という言葉について聞くことは憚られた。あの言葉を耳にしたラダの激しい反応を見る限り、彼は明らかにそう呼ばれることを嫌っている。

「竜って知ってますか？」

「竜？　英雄王が退治したっていう？」

思いも寄らない返答が返ってきて、志穂は思わず目を丸くした。

あの山里では、門や廃墟の石床　ラダ曰く祭壇に、竜の彫刻や絵が描かれていた。とても英雄に退治されるような化け物として扱われているように見えなかったのだが。

「この国が出来た頃の話だっていうから、それこそ何百年も前の伝説だけだな。このアーフェルを建国した英雄王ギイ・ユオルは、かつて悪い化け物　竜に恋人の姫を攫われたんだとさ。それで英雄王がその竜を退治して姫を取り戻し、めでたしめでたし、っていう　まるで神話やお伽噺のような筋書きだ。

口には出さなかったが、顔つきを見るに、ジェフもその伝説が真実であるとはあまり信じていない様子である。

「そんなわけで、アーフェル王家の紋章はその退治された竜なんだよ。それに聖堂に行けば、壁画やら銅像やらがたくさん飾ってあるよ。竜殺しの英雄王、聖ユオルのね」

聞き覚えのある言葉に一瞬ぎくりとしたが、例の騎士団とは直接関係があるわけではないらしい。

ジェフの説明によると、この国の教会はその英雄王を、神に力を授けられた聖人として崇めているのだそうだ。それで教会の聖堂は彼の竜退治の伝説を元にした壁画や彫刻、銅像で溢れているらしい。聖ユオル騎士団に限らず、聖ユオル大聖堂や聖ユオル修道院など、聖人の名前を冠した団体や建築物も数多いそうだ。

屈強な戦士が竜を懲らしめている場面がチャペルのような建物の壁一面に飾られている様子を思い浮かべ、あまりの違和感に志穂は思わず首を傾げてしまった。

「ああ、そついやラダが前になんか言ってたな。竜つてのは船流しの」

そつ言いながら、ジェフはふと部屋の窓から外に視線を向けた。

三階の窓のずっと下方には石畳の小路があり、時折通行人が歩いているのが見られる。中にはこの 水煙亭 の建物の中へ入っている者もちらほらいたが、ちょうど今ドアベルを鳴らして入っていった若い男性の訪問者を見て、ジェフは突然忌々しげに表情を歪めた。

「あの盗人野郎、また来やがった！」

物騒な言葉を吐き捨てると、ジェフは驚く志穂に向かって、

「すまんお嬢さん、ちよつと用ができた」

そつ言い残すなり、さつさと床をすり抜けて階下へ消えてしまった。

志穂がしばらく一人で首を傾げていると、ラダが買い物の品を腕に抱えて部屋に帰ってきた。

先程のジェフの剣幕のことを話すと、珍しく青年は顔を綻ばせて吹き出しかけたようだった。

「今下に行けば、ジェフの面白い姿が見られるぞ。気になるなら見に行ってくるといい」

三階の部屋から一階に行く程度の距離なら、志穂も杖から離れて行動できる。

ジェフのように床をすり抜けるのはまだ少し怖いので、志穂は普通に歩いて階段を下り、一階の食堂へ向かった。

食堂には宿の女主人ヘイゼルもいて、箒を手に床を掃きながら、若い男性と親しげに話している。男性の方も布巾を手に掃除を手伝っているようだ。

ジェフは二人から少し離れたところに立ちながら、腕を組み、まるで監視するように二人を 正確には男性の方を睨み付けていた。「……それで大騒ぎだったんですが、結局柵の下に潜り込んでいるのが見つかった」

「あら。妹さんもなかなかやるわね」

男性と話すヘイゼルはとても嬉しそうだし、男性の方もヘイゼルに好意を抱いているようだ。何もそんなに睨むほどの問題があるようには志穂には見えない。

しばらくして、掃除と話が一段落すると、二人は別れの挨拶を交わした。

「では、ヘイゼル、また後で」

「ええ。待ってるわ、ジェフ」

彼女の父と同じ名前を持つらしい若い男性は、柔らかな微笑みを残して宿を出て行く。

ちょうど杖を持って下に降りてきたラダはその後ろ姿を見送ると、険しい顔で腕組みをしたままのジェフにちらりと視線を向けた。どこか面白がるように。

そして女主人の元へ歩み寄り、

「結婚はいつなんだ？」

と、無表情のまま訊ねた。

ヘイゼルは少しばかり照れくさそうに笑み、ジェフはますます不

機嫌そうな顔つきで壁をすり抜けて別の場所に行ってしまった。

「来年の春のはじめには挙式の予定よ」

「そうか。おめでとう」

ラダは表情こそ変わらなかつたが、口調は普段志穂に対するときのように柔らかかつた。やはりいつもの無愛想はわざとなのかもしれない。

ありがとう、と受け答えしながら、ヘイゼルはふと視線を別な方に逸らした。

その視線の先には、壁にかけられた肖像画がある。

まだ二十前後と思しき若い夫婦と、幼い娘が幸せそうに微笑んでいる絵だった。

濃い茶色の髪をした夫の方は、生前のジェフだろう。そして父から同じ色の髪を、母からは緑色の目を受け継いでいる幼い娘は、水煙亭の女主人ヘイゼルに違いなかつた。

「……ねえ、ラダ、お父さんはまだ……私の傍にいるのかしら？」
ヘイゼルはぼつりと呟くように訊ねた。その横顔に浮かぶ表情は柔らかく、懐かしい思い出を見るような眼差しは、同時にどこか悼むような色がある。

「ああ。……さっきまでそこにいて、お前の婚約者を睨み付けていた」

ラダが真面目な顔で答えると、彼女はくすくすと笑った。

「お父さんったら。彼はとてもいい人なのよ。一緒にこの宿を守っていくって約束したの。拗ねないでちょうだいって、伝えておいてくれる？」

ラダは黙って頷いた。

どうやらヘイゼルという女性はラダが死霊を見ることのできる青年だと知っていて、自分の父親が死霊となって娘を見守り続けていることも知っているらしい。

「……だから、そんなに心配しなくてもいいのよ。私はもう大丈夫。そう、伝えてね」

ヘイゼルはそう静かな声で続けると、ふわりと微笑んだ。昔の悲しい出来事を忘れずに受け止めて、それでも悲しみに囚われずに前へ向いている。そんな微笑みだった。

ラダはやはり無言で頷く。

(……私のお父さんとお母さんはどうしてるんだろう)

ふと志穂はそのことが急に気になった。旅の途中は見知らぬ世界に慣れることで頭が一杯で、日本に思い馳せる余地はあまりなかったから、久しぶりに感じたその郷愁は以前よりも一層彼女の胸を締め付けた。

果てへ辿り着いて、もし志穂が日本に帰れたとしてこの死霊の姿のまま帰ったとしたら、それでも両親は娘を受け入れてくれるのだろうか。

例え見えなくても、話せなくても。

ヘイゼルが父を思っているように、娘を思ってくれるだろうか……。

「そうだラダ、今夜は船流しだから、食堂は閉めるわ。夕食をここで取るなら早めに言っただいね」

「ああ……もうそんな時期なのか」

分かったと頷き、ラダは一旦踵を返して階段を上がっていった。彼と共に部屋に戻ると、窓辺のところで濃い茶色の髪の男性が黄昏れていた。

ラダがその傍に近寄り、先程のヘイゼルの伝言をそのまま口にして伝えると、ジェフは複雑そうな面持ちで振り返った。そしてため息を吐くと、

「まったく、本当にできた娘だよ、ヘイゼルは。……これで男親の気持ちも汲んでくれれば、言うことなしなんだがなあ」

と、しみじみ呟いた。

「別に相手の男に問題があるわけではないのだろう？」

「ないさ。富裕な商人の次男で、文武両道、人柄も申し分ない。……文句のつけようがないから、気に入らないんだよ。まったく、お

まけに名前まで俺と同じときた……」

「はあ、ともう一度深いため息を吐くと、ジェフは肩を落として部屋から出て行った。」

壁に消えていくその後ろ姿を見送りながら、志穂は首を傾げて呟いた。

「……ジェフさんは、寂しいのかな」

「ジェフの魂を地上に留めている執着は、一人になった娘を心配する思いだけだ。だから、その執着の元が消えていくことへの恐れもあるのだろうが……まあ、結局のところ男親というものは、突然現れて娘を奪っていく男はすべて敵に見える生き物なんだろう」

「ヘイゼルさんの恋人は急に現れたの？」

「いや。確か交際しはじめてもう三年にはなると聞いている」

それならもう諦めてもいい頃だと思いが、そういうわけにはいかないのが父親というものらしい。

中学生になつて、彼氏だ化粧だと浮つきはじめた同級生たちの中には、そのことで父親と喧嘩する子もいた。そんな思春期の流れからなんとなく取り残されていた志穂には、もちろん彼氏もいなければ少女漫画で見るとような恋愛もしたことがなかったので、そのあたりの機微はよく分からない。

「そつえば、ラダ。船流しって？」

「この辺りに伝わる古い習慣だ。アーフェルが建国されるより以前の、異教の時代に由来するものだ。……昔は盛大な祭りだったそうだが、今は一部の市民の間で細々と続けられる伝統行事だな」

そう説明して、ラダは志穂を見下ろした。

「興味があるなら、見に行くか？」

限られた土地をできるだけ有効活用しようというのか、川岸にせり出す勢いでずらりと立ち並ぶ家々の合間にも、通り道はわずかに存在する。その暗い道を抜けて細い階段を降りた先に、川が運んで

きた土砂が少しずつ堆積して形成されたと思しき砂地がある。

志穂とラダは、川を見下ろせる人気のない階段の陰に二人並んで腰掛けていた。

もうとうに日の暮れた時刻、見下ろした川縁の砂地には篝火が焚かれ、既に多くの人々が宵闇に紛れて集まっている。街の賑やかさからすると微々たる数かもしれないが、きつと千人くらいはいるだろう。それが全員生きた人間なのか、それとも中に何人が死霊が紛れ込んでいるのか、志穂には判断がつかないが。

彼らは各々の手に、小さな人形を持っていた。

布の切れ端で作られたと思しき簡素なもの、木彫りで丁寧に形作られたもの。形も色も大きさも人それぞれ違う人形を、やはり老若男女様々な人々が持ち寄っているようだ。

ヘイゼルも、あのジェフと同じ名前の若い男性と寄り添いながら、手作りの人形を二つ手にしていた。

「あの人形は？」

「……死者の似姿だ」

ラダの答えに、志穂ははっと息を呑んだ。

川岸にはいくつか船が用意されていた。船といっても、大きなものでせいぜい洗濯桶程度の小さな木造船で、到底人が乗れるほどではない。船の舳先には一様に同じ形をした船首像が取り付けられ、船尾のあたりには蠟燭の明かりが灯されていた。

人々はそれらの船に、持ち寄った人形を載せていった。

あつという間に人形の積み荷でいっぱいになった船は、順に川へと送り出され、しばらく川面を漂った後、流れに従って少しずつ下流へと進みはじめた。

暗い川面に、船尾にゆらめく蠟燭の炎の明かりがぼんやりと映り込んでいる。

「亡くなった親しい者の生前の姿を象り、人形にして乗せ、あの船で流す。……死者の魂が川を下り、やがて海に出て、沖つ国へと無事に辿り着けるように」

灯笼流しのようなものだろうか、と志穂はお盆の時期にテレビで見かける光景のことを思い返した。

夜の闇の中、赤々と燃える灯火が川に流されていく、あの幻想的な光景。確かあれは、お盆に帰ってきた死者の魂を再びあの世へと送り出すための行事だっただろうか。

「今は交易船の妨げになるというので、あの船も少し先の下流で回収されて燃やされる。参加者も年々減り続けているそうだ。……それでもあそこにいる人々は死者を思って人形を作り、船を流し続けている」

ラダの説明を聞きながら、通り過ぎていく船を眺めながら、志穂はふとその船首像に目を留めた。

長細い胴体の先に長い首がくっついたような、奇妙な動物の形をしている。どちらかといえば蜥蜴に似ているが、頭には角のような棘のようなものが生えていた。

「これは、何の動物を象つたものなの？」

「……竜だ」

その答えに、志穂は思わず目を見開いてラダを見上げた。

「竜は、今のこの国では不吉な存在だとされている。かつて英雄王が退治した死を呼ぶ化け物だと。だからこれが竜だとは誰も言わない。実際に知らぬ者も多いだろう。だが、あれは竜なのだ」

そう語る青年の横顔はどこか寂しげだった。

「竜が船になって、死んだ人を運ぶの？」

問いながら、志穂はまた質問ばかりしている自分に気付いた。少しは控えようと思っていたはずなのに、心に決めたことをちっとも実行できていない。

「……そうだ。竜の船は世界を巡り、船出できぬ死者たちの魂を乗せて、海の遙かかなたの沖つ国へと運ぶ。かつて、そういう存在が世界にいたという」

いた、ということとは、今はいないのだろうか。だからラダは探しているのだろうか。

いなくなつてしまつた、竜という存在を。

死者の人形を乗せた木造の竜の船は、船尾の灯火だけが照らす闇の中、川面をゆっくりと漂いながら少しずつ下流へと向かつている。川縁の人々は、静かに息を潜めるようにして船の流れる様を眺めている。

すすり泣く人もいた。祈るように両手を握り合わせている人もいた。肩を寄せ合い悲しみを分かち合っている人たちもいた。

その不思議な光景を胸に焼き付けながら、志穂は目を閉じた。そして思う。

人は何故生まれ、何故死者となり、死霊となるのだろうか。

死霊とは何なのだろう。

死者が還るべきところ　　沖つ国。それはどんなところなのだろう。

(帰りたい)

志穂は不意にそう思った。強く、思った。

死者の国になど行きたくない。カレンのように消えたくない。志穂は志穂のまま、日本のごく平凡なあの人に帰りたい。その気持ちは今でも変わらない。このまま見知らぬ世界で消えてしまえば、志穂が確かに存在したことの証すらどこにも残せないのだ。

「……シホ？」

けれども志穂はもう死んでしまつた。

生きた人間の多くには見えない死霊と化した。

優しいラダも、親切なジェフも、生き返りの希望など提示してくれない。志穂は死霊なのだ、それを弁えて行動しなければいけないのだと、事実をただ突きつける。

例え　果て　に行つたとしても、青年の言う通りどうにもならない可能性だつて高いのだろう。

ちっぽけな十四歳の少女には変えられない、どうしようもない現実。

(分かつてる。そんなこと分かつてる……)

きつと初めから、分かっているのだ。

あの波音を聞いたときから。

(でも……帰りたいよ)

そう思わなければ、その執着を失えば、きつと志穂は今度こそ跡形もなく消えてしまう。

視界が霞んだ。

じわりと滲んだものは盛り上がって粒となり、音もなく頬を伝う。死霊でも泣くことはできるのだ、と、頭の隅で不思議に思った。あるいはこれも幻で、錯覚のなせる業なのか。泣きたいから、涙を流しているつもりになっているだけなのか。

けれども。

不意に背中に回された誰かの腕の感触、引き寄せられた胸の中の冷たいようにで温かい体温、これが錯覚だとは思えなかった。

抱きしめられたのだ、と数瞬遅れて気付く。

志穂を抱きしめながら、ラダは一言も口にしなかった。

何も言わず、ゆっくりと撫でるように数度、志穂の背中をさする青年の動作は、幼い子供を慰め、あやす仕草のようにも思える。

それでも構わなかった。そう思えるほどに、彼の手の感触は優しいかった。

「帰りたい」

その優しさに寄りかかるように、志穂は胸の内に渦巻く思いを吐き出した。

「どうして、私が死ななきゃならなかったの……？」

ラダはやはり何も言わなかった。彼の胸に顔を埋めた志穂には、彼がどんな表情をしているかは窺い知れない。

少女はただ泣き続け、青年は少女をただ抱きしめ続けた。

船は流れていく。ゆらゆらと漂いながら、生きる人々の死者への思いを乗せて。

すまない。

耳元を掠めたその声が、
一体どんな思いから発せられたものなの
かは、分からなかったが。

第七話 王子リステス

結局あの後は、泣きじゃくりながらラダに手を引かれて 水煙亭に戻った。

……正直なところ記憶は曖昧だが、多分そのはずだ、と志穂は思う。

一晩経つと、少女の頭も冷静になり、昨夜の自分の醜態を思い出して顔が赤くなったり青くなったりした。

(……私、なんであんなことしちゃったんだろう……)

十四歳にもなって他人に、しかも男の人に対してあんな風に泣きつくなんて。ラダもさぞかし呆れたことだろう。いや、彼は優しいから、せいぜい子供をあやすような気持ちで抱きしめてくれたのかもしれないが。

いずれにせよ、一言謝らなければ気が済まない。

しかし志穂が翌朝部屋で目覚めた時 我に返った時、と言うべきだろうか ラダは部屋にいなかった。白い杖も見当たらないから、そう離れたところにいるわけではないようだ。下で朝食を取っているのかもしれない。

食堂に降りてみると、青年は予想通りスープ皿の前に座っていた。だが既に食事は終えたようで、皿の中身は綺麗に空だ。

心なしか寛いだ様子で椅子の背に身を預けながら、ラダはハイゼルと会話していた。

「……じゃ、今日発つのか？」

女主人は残念そうな顔つきだった。

「もう少しゆっくりしていけばいいのに。宿代だっておまけして……」

「路銀は稼いだし、買い出しもした。それに、行くところがある」

「そう……。なら仕方ないわね。また顔を出してちょうだい、今度は近いうちにね」

ラダははつきりとした返答をしなかった。世話になっているヘイゼルの手前、彼女の言葉に頷いてあげたいが、先の見通しが完璧ではないのにそう安請け合いはできない。そんな風に大真面目に考えているようだ。

ヘイゼルはそんな彼を見て、やれやれと肩をすくめながら仕事に戻っていった。

「おや、お嬢さんたちはもう行くのかい」

横から現れたジエフに声を掛けられ、志穂もまた首を縦に振るでもなく横に傾げるでもない、非常に中途半端な仕草をした。

「ラダはそういうつもりみたい、です」

志穂をなるべく早く 果て へと連れて行くためだろうか。早く志穂に杖から離れてもらいたいという気持ちがあるかもしれないにせよ、有り難いような、申し訳ないような気もする。しかしラダにはラダなりの考えがあるかもしれないから、余計なことは言わない方がいいだろうと思った。

「ジエフさん、短い間でしたけど、お世話になりました」

志穂は丁寧に頭を下げた。果て に待っているのが希望でも絶望でも、もうこの街に帰ってくる機会はないだろう。なら、ジエフと話すのもこれっきりになる。

「どういたしました。……俺たちは生きてる奴らよりあやふやな存在だから、また会おう、とは言わないけどさ」

三十路に届かない容貌のまま十七年を死霊として過ごした男性は、そう言つて微笑んだ。

「元気でな、お嬢さん」

「はい。ありがとうございます」

彼への感謝の意を表すように、志穂は精一杯の笑顔で応えた。

朝食を済ませた後、ラダはエテルベリの街に来る以前よりも少し膨らんだ荷物を背負い、白い杖を片手に 水煙亭 を出た。いささ

か慌ただしい旅立ちに、志穂は昨日のことについて謝りそこねてしまった。

まずは裏町に寄って、ケル婆というあの怪しげな老婆から、この間の悪霊退治の報酬を貰う。それから街の西側の橋を渡って街道に出る、とラダは今日の予定を話してくれた。

先日も通り抜けた、しかしちつとも道筋を覚えることができなかつた複雑な道程を、青年の後に進んでいく。あの時は宵闇に覆い隠されていた路地も今は淡い日の光に照らされて、漆喰が剥がれかけた壁の様子もよく見える。

入り組んだ路地を抜け、一旦少し広い通りに出ようとしたラダの足が、その入り口付近のところで訝しげに止まった。

「どうしたの？」

志穂は青年の背中からひょいと顔を出し、その向こうにあるはずの通りを見渡した。

通りはざわめく群衆で埋め尽くされていた。

まるで街に来た時に見た大通りの光景のようだったが、ここは大通りではないはずだ。しかしそれと見紛うくらいの人出だった。違うのは道の広さと、馬車や荷車の姿がないことくらいだろうか。

群衆の顔ぶれは老若男女様々で、身なりの良い街の人間もいれば、ラダのように継ぎ当てだらけの服を着た旅人らしい者もいる。だが、
　　いいて言うなら、志穂よりも少し年上くらいの若い娘が多いようだ。
　　人々は目に好奇の色や、あるいはどこか恐れるような色を浮かべ、
　　娘たちの多くは憧れと興奮の色を浮かべて、一様に同じ方向を向いている。

（何だろう。アイドルの追っかけにしては、変な感じだし）

そもそも昔のヨーロッパのようなこの国に、アイドルなどという存在がいるとも思えない。では何だろう、と志穂は興味を覚えて、群衆の肩越しに様子を窺った。もちろん少女の低めの身長では足りないもので、その爪先は路地の石畳からは少し　　いや大分離れていたが。

衆目を集めているのは、十四の志穂よりも一つか二つばかり年上に見える一人の少年のようだ。

一人の少年といっても、その周りにはお付きの者らしい甲冑を着込んだ衛兵が何人もいて、彼を取り巻く群衆に鋭い視線を向けている。

しかし少年本人は群衆など気にした様子もなく、悠然とした表情で通りを歩いている。時折物珍しそうに、通りの傍に立ち並ぶ家並みを眺める素振りも見せていた。

やがて少年と衛兵たちは、志穂とラダがいる路地の入り口の近くにまでやってきた。

若い娘たちが憧れの眼差しを浮かべて彼を見つめているのも無理もない。それほどに、その少年は美しい容貌をしていた。

少年が足を動かす度、輝く月の光にも似た金の髪が揺れてきらめいている。

まるで精緻な彫像なような、造形美という言葉は彼のためにあるような、

忘れもしない、あの、顔。

存在しない心臓がどくりと鳴る。

志穂は愕然と唇をわななかせた。そこから言葉は出てこなかった。白銀の光。

体を貫いた衝撃。

いつかのおぞましい記憶が浮かんで消える。

どうしようもなく吐き気がして口元を抑えた。それなのに実際に吐いて楽になることもできない。

「……シホ？ どうした」

少女の異常に気付いたのか、ラダが小声で怪訝そうに彼女の名を呼ぶ。群衆のざわめきに紛れての小声とはいえ、志穂と話す際は周囲に人がいないか気にしていた青年が、人前で話しかけてくるのは

相当に珍しいことだ。

だが、志穂はその気遣いに応じられなかった。青ざめた顔でただ震えながら、それでも美しい少年から目を離すことができなかつたのだ。

不意に、群衆の中から男が躍り出た。

群衆の多くを占める市民たちと比べればややみすばらしい身なりの、しかし人ごみに紛れればあつという間に見失ってしまいそうな若い男だ。

身を低くして衛兵たちの輪の隙間に突進したその男は、抜き身の短剣を手にしていた。

「王子リステス！」

憎悪に満ちた声とともに投擲された刃は、衛兵たちの合間を通り抜け、少年の胸元めがけて虚空を突き進む。

しかし、その刃が少年本人に届くことはなかった。少年は素早く抜いた腰の剣で、短剣を叩き落としたからだ。目にもとまらぬような早業だった。

衛兵の一人が顔色を失望に塗り替えた男の腕を、もう一人が肩を掴み、二人がかりで石畳の上に押し倒す。

群衆は一瞬静まり返り、すぐに騒然となった。

金髪の少年は目の前で起こった事態に対し、長い睫毛を動かして目を瞬かせていたが、やがて衛兵たちに抑え込まれている男の傍へ歩み寄った。

「殿下、お下がりにください」

衛兵たちの忠告を聞いているのかいないのか、少年は抜き身の剣を手にしたまま男を見下ろし、不思議そうに小首を傾げた。

「僕を殺そうとしたの？」

自分を憎々しげに見つめている男への問いとしては、どこか間の抜けた言葉だった。

「お前は俺たちの村を焼いた！」

見下ろされた男は声を荒げた。黙らせようとした衛兵が彼の後頭

部を掴み、石畳に顔を押し付けたが、男は口を動かすのを止めない。「何が反乱だ……俺たちはただ、領主の横暴を訴え出ただけだ！それを、お前ら騎士団の連中は、村も畑も焼き尽くし、女子供までも皆殺しにしゃがった……！」

血を吐くような叫びに、しかし金髪の少年は小首を傾げたまま、顔色一つ変えなかった。

「どの村の話か、よく分からないなあ」

呑気な口調で平然とそう言うと、彼はこう続けた。

「でも、そうか。生き残りがいたなんて、それは申し訳ないことをしたな。ちゃんと全員殺せって、いつも命令してるのに」

高く澄んだ声で紡がれる残酷な言葉が、通りに響き渡る。

騒然としていた群衆が再び静かになった。何か得体の知れないものを見聞きしてしまったかのような、そんな不安と戸惑いの色が居並ぶ顔に広がっていく。

男は血の混じった唾を吐き捨てた。

「……狂人め、呪われる！ 竜に喰い殺されてしまえ！」

「それは無理だよ。きつとね」

そう言うと、少年は衛兵たちに目配せした。衛兵たちは心得たように頷くと、何人かが男を引きずってどこか別の場所へ連れていくとした。だが、彼らの周りには依然多くの人々が集まっていて、衛兵たちの行く手を阻んでいた。

「散れ、道を開ける！ 見世物ではないのだぞ」

衛兵の一人が発した怒声に、進行方向にいる人々は慌てて道を開けようとしたが、何分人が多いのであまりスムーズにはいかない。

苛立った衛兵が再び口を開けようとしたその隙に、黙って引きずられていた男が動いた。

彼は体を捻って衛兵たちの拘束を振り払うと、懐から鋭利なナイフを取り出した。そして再び、金髪の少年の方へと駆け出したのだ。「殿下！」

衛兵たちが慌ててまた男を取り抑えようとするが、今度は男は上

手くその手をかわして少年に肉薄した。

少年の細い体に向けて突き出されるナイフ。

けれどもやはり、男の望み通りにその刃が少年本人に届くことはなかった。ほんのわずかに上体を反らしてナイフを避けた少年は、バランスを崩した男に向けて、抜き身の剣を振り抜く。

白銀に光る刃が一息に男の胸を切り裂いた。

噴き出した血が少年の端整な顔を赤く染め、剣先から滴り落ちた血が石畳に跳ねる。一瞬遅れて男の体がゆっくり傾き、石畳の上へと倒れ込んだ。

目を見開いたたまま絶命したその男の顔は、最後まで憎悪に満ちていた。

「ひ……」

そこでようやく、群衆からひきつったような呻き声が上がった。

続いて、若い娘たちの金切り声。中にはほとんど失神しかけている者もいる。怯えたようにその場から離れようとして、後ろにいた人物とぶつかって転ぶ者もいた。

少年はそんな周囲の騒ぎを、不思議そうにぐるりと見回した。

深い海のような青い目が虚空を辿って、ふと志穂の方へ向けられる。一度瞬きした後で、彼は血の飛び散った美しい顔に微笑みを浮かべた。赤い血に染められた剣を手にしたまま。

そう、錯覚でなければ、彼は確かに志穂を見て微笑んだ。

そして、こう言ったのだ。

「あれ。また、会ったね」

志穂は悲鳴を上げた。

*

魂を震わせるような甲高い少女の悲鳴に、ラダは思わず目を見開

いた。

実体のない死霊の叫び。

にも関わらず、路地の壁がわずかに振動している。

目の前の群衆の中にも、何かを感じ取ったのか訝しげに眉をひそめて周囲を見回している者がいた。驚いたように飛び上がったのは、群衆に紛れ込んでいた死霊たちだろう。

実体に影響を及ぼすほどの恐怖に満ちた悲鳴を上げながら、志穂は空中で踵を返し、路地の奥へと飛び去っていった。まるで、こちらを不思議そうに見つめている金髪の少年の視線から逃げるように、王子リステス、と彼は呼ばれていた。

今のアーフェル国王には、男子は一人しかいないと聞く。そのたった一人の王子は、現在王国で一番歴史ある騎士団の長を務めているのだとも。

(……くそ)

ラダは小さく舌打ちすると、迷わず王子や群衆に背を向け、志穂を追いかけた。

彼女の様子がおかしいと気付いた時すぐに、あの場から立ち去るべきだった。そんな後悔が胸を掠め、白い杖を握る手に力が入る。

路地を駆け、角を幾度も曲がり、空気を震わせる振動の源を辿っていく。

しばらくして、ラダは入り組んだ路地の片隅にある人気のない袋小路で少女を見つけた。

まれびとの少女はその場にうずくまり、小さな肩を抱いて震えていた。まるで寄る辺のない幼い子供のように。

「シホ」

抑えた声で名を呼びながら、そっと歩み寄り、彼女の肩に手を伸ばそうとする。

だが青年の指先が触れる前に、少女はそれをはね除けた。

「いや！ 殺さないで！」

黒髪を振り乱しながらそう喚く少女は、明らかに平静を失ってい

る。見開かれた黒い目は焦点が合わず、どこか虚ろで、青年をはつきりと捉えているとは思えなかった。

「殺さないで！ ころさないで！ たすけて、おねがい、しにたくない……！」

一瞬呆然と立ち尽くしたラダの前で、少女の姿は変貌しつつあった。

胸に腕に、幾本もの矢が突き刺さっている。黒く丈の短い異国の服が腹部から裂かれ、そこから夥しい血が流れ出しはじめる。幼さの残る顔には血が飛び散り、唇は歪み、恐怖にひきつっていた。

青年は思わず息を止めた。

これはきつと、彼女の死の間際の姿だ。騎士団に無惨に殺された、その時の記憶が投影されているのだろう。

あまりに、惨い。

ラダが 山の民 の里を訪れた時、既に騎士団は山里を破壊し尽くして立ち去った後だった。

淀んだ空気に漂う異臭は凄まじく、あちこちから立ち上る黒ずんだ煙が空を汚していた。広場の地面は 山の民 の塚と化していて、その盛り上がった土の表面を少し払っただけで、焼け焦げた誰かの爪先が露わになった。

そんな廃墟の里のそこかしこに、殺された 山の民 の霊がいた。

嘆き悲しむ 山の民 の霊たちの言葉に耳を傾け、宥め、諭し、

一族の責務という言葉を振りかざして、ラダはどうか彼ら全員を沖つ国へと船出させた。

そして埋められず、燃やされることもなく放置されていた人の死体の断片や燃え滓に混じっていた骨の欠片をも土に埋め直した。それはラダのさほど長くもない生涯の中でも一二を争うほどの陰鬱な作業だった。

作業を終えた後、彼は心身ともに疲れ果て、神殿跡の祭壇の隅に腰掛けてしばらく動けないでいた。そこに彼女が現れたのだ。

志穂。

黒髪に黒い瞳を持つ、まれびとの娘。

……まれびとの召喚は、山の民にとつて、何百年もの時を経て擦り切れた希望を曖昧な伝承に託して蘇らせようとする行為だった。不確かなその行為のために彼らは多大な労力を払った。彼らはそれほど追い詰められていた。ラダはそれを知っている。手段は違えど、同じ船守の一族の末裔として、彼もまた同じ希望を抱えていたのだから。

けれどもそうして呼ばれた少女は、ごく普通の少女だった。

大人しく素直で、そのくせ時折驚かされるほどの行動力を見せる。知りたがりで、熱心に人の話に耳を傾ける。時に怒り、時に微笑み、時に泣く。

そんな、眩しいくらいに普通の少女。

けれども彼女は呼ばれ、そしてそのせいで死んだ。召喚さえされなければ、彼女は今でも故郷で平穏な暮らしを送っていたはずだ。

彼女には何の罪科もない。

罪科があるとしたらまれびとを求めた青年たちの方であり、この歪な世界の方だ。それを自覚しても尚、青年は擦り切れた希望を捨てきれずにいる。

「シホ」

ラダは少女の傍に跪くと、彼女の名を繰り返して呼んだ。

少女は既に青年のことすら認識していないのか、凄惨な姿のまま、ただただ泣き喚いている。彼女が恐怖に満ちた声を上げる度、周囲の空気が震え、間近にいる青年の耳の奥は痛みを訴えた。

「シホ。落ち着いて、俺の言葉を聞くん。ここは山里じゃない。王子も騎士団もない。お前はもう誰かに殺されることはない。だから、シホ」

言葉を尽くしても、恐怖に囚われた志穂には届かない。殺された時の恐怖の記憶のままに少女は叫び続け、その恐怖を押し広げようとしている。

一際強くなった声の反響が空気を伝い、路地の漆喰の壁にびしり

と亀裂を入れた。

鈍い痛みとともに、ラダの頬にも一筋の切り傷が走る。じわりと滲み出す黒ずんだ色の血を拭い、彼は焦燥に唇の端を噛んだ。

「シホ！　どうかお願いだ、落ち着いてくれ」

ラダは片手を伸ばして少女の肩を掴み、揺さぶった。それでも少女が正気に返る様子はない。そうしているうちに青年の指先や手の甲にも細かい傷が走り、血が滲んだ。

「シホ」

「いや！」

甲高い一声が衝撃波となってラダの体に襲い来る。

一瞬息ができなくなり、咳き込んだ青年はよろめきながら後ずさった。

（駄目だ。言葉では届かない）

少女の恐怖は生者と死者の境を越え、実体あるものにまで伝染しようとしている。それは悪霊と呼ばれる、怨念に支配された存在の行いだ。

このままでは、取り返しのつかないことになりかねない。

（……仕方がない）

ラダは意を決して立ち上がると、母の形見の杖を振りかざした。

少女の身長ほどもある白い杖、その先端を泣き叫ぶ志穂へと向ける。

「竜の船守が一族の末裔、ラダの名において命じる」

低い声が袋小路に響き渡り、少女の悲鳴とぶつかって弾けた。

その余波が手の甲の傷を深めるのも無視して、ラダは幼い頃に覚え込んだ古い言葉を続けた。

「キシベシホ、死して尚還らざる死者の魂よ。我が目を見、我が声を聞け。我が僕となり、我が命に従い、その意思のすべてを我に委ねよ」

悲鳴がぴたりと止む。

ひきつった表情のまま、きこちない仕草で首を動かしこちらを見上げる少女の黒い目を、ラダはその紫の目でまっすぐに見据えた。

「また一つ、彼女に対する負い目が増える。
そして眠れ」

*

死ぬ間際に見たあの金髪の少年、彼が志穂を見て、あの時と同じように無邪気に微笑んだその姿を見た瞬間、理性などすべてどこかに吹き飛んだ。

心の、あるいは魂の奥底に閉じ込めて見ないふりをし、忘れてふりをしてきた感情のすべてが、奔流となって押し寄せてきたようだった。

痛みの中で助けを求めた。死にたくないと望んだ。なのに。

あの微笑みが。

あの澄んだ声が断ち切ったのだ、少女の命のすべてを。

「……それじゃお前、お嬢さんを無理矢理に使役化したってのか？」

ジエフの声がする。非難するような声色だ。

「一時的な措置だ。……俺だってやりたくてやったわけじゃない。

ジエフ、お前も少しは感じたんじゃないのか」

「ああ……そりゃあ、な。きつと街中の死霊が聞いただろうさ、お嬢さんの慟哭を。俺だって、こりゃまずいと思ったよ。だが……なあ……仕方のないことじゃないか。自分を殺したかもしれない連中の親玉と出くわしたら、さ。取り乱すのも当然だろうが。……例え不可抗力でも、心を弄くられるのは嫌なもんだ」

分かってる、と答えるラダの口調はいつもよりも荒い。

「……それでも、志穂があのまま恐怖に支配され、憎悪と怨念に満ちた存在と化するのを防ぐには、彼女を船出させるか、でなければ魂そのものに干渉するしかなかったんだ」

そんな会話に、志穂は黙って耳を傾けていた。

今、彼女の心の海は静かに凪いでいる。確かに感じたあの恐怖、

感情の奔流の何もかも、志穂の中から消え失せてしまったようだった。

視界は闇に覆われている。

柔らかな手で目隠しをされているようなその暗闇の中、身動きをしようとしても叶わない。だから志穂は、ぼんやりとまどろむような心地の中に身を置くしかない。そう命じられたのだから。

「……お嬢さんを起こしたら、謝っておけよ」

「ああ……」

それきり、ジェフの声が聞こえなくなる。

志穂の頬のあたりに誰かの指先が掠めるように触れて、すぐに離れた。そして低い青年の声が命じた。

「シホ。起きてくれ」

志穂は我に返った。

はっと見開いた目の前にラダの彫りの深い顔がある。心配そうな表情が浮かんでいるその白い顔の右頬のあたりに、見覚えのない切り傷の痕跡が見えた。もう血は止まっているようだ。

しばらくぼんやりと青年の頬を見つめた後、志穂はぎこちなく首を動かして周囲を見回した。

窓から差し込む陽の光が、居心地の良い清潔な部屋を照らし出している。どうやら志穂たちは 水煙亭 の部屋に戻ってきてしまったらしい。志穂は陽光を浴びながら、窓辺の椅子に腰掛けているようだった。

記憶は曖昧で、頭の中の思考は不明瞭だった。どうして発ったはずのここにいるのかもよく分からない。まるで、あの廃墟で目覚めたばかりの時のように。

だがはつきりと覚えていることもある。

王子リステスと呼ばれた、あの美しい金髪の少年。

彼が見せた微笑みと、囁きと、それらがもたらした恐怖を、志穂

は確かに覚えている。

「具合はどうだ？」

気遣わしげに問われ、志穂は無言でラダを見上げた。

果て を目指す旅の道連れ。ただそれだけの関係のはずの青年。けれども、そういえば彼は最初に言っていたではないか。 死

霊たちを時に使役し、時にその魂を鎮め、あるいは災いを呼び寄せ
る忌むべきもの、と。

「ラダ、は……」

志穂は掠れた言葉を紡いだ。

一時は確かに恐怖に支配されていた少女の心は、今はとても落ち着いている。少年の顔が脳裏にちらつく度に悪寒を感じるが、取り乱すまではいかない。それがラダのお陰であり、ラダの奇妙な力のせいであることを、説明されずとも志穂は感じ取っていた。

「その気になれば、私を、意のままに操ることができるの？」

青年は一瞬黙り込んだ。だが志穂から決して目を逸らすことなく、
頷いた。

「……ああ」

「私の、意志とか、感情とか、みんな消すことができるの……？」

「消すことはできない。ただ一時的に押し込めることはできる。一度死霊術士の支配下におかれた霊は、呪を解かれない限り、その命に逆らうことはできないから」

いつものように淡々と説明した後で、ラダは目を伏せ頭を垂れた。
いつかのように。

「……お前の意志を無視して術で干渉した。すまない」

そう言ったきり、彼は他の言葉を口にしようとはしなかった。ジエフに対して告げていたような理由すら言わない。それは彼の生真面目さを示すものだろう。

志穂はそんな青年をじっと見つめた。

ラダは優しい。ラダは親切だ。ラダは真面目で、本当に律儀な人だ。成仏したくないという志穂のわがままを受け入れて、何の役に

立つわけでもない幽霊娘が形見の杖に憑いたままなのを許してくれる。故郷を恋しがって子供みたいに泣けば、抱きしめて慰めてくれる。

紫色の目の青年に対して感じるほのかな好意は、決して嘘偽りではないし、ましてや操られた結果ではない。

(でも、やっぱり違うんだ……)

彼は生きた人間で、死霊術士。そして志穂は、本来ここにはならないはずの異界の死者。

青年との間に存在する、どうしようもなく深い溝。

薄々は感じていたそれを、志穂はようやくはつきりと自覚した。

その気になれば自分をどうにでもできる力を持つ相手に対し、どうして対等に向き合うことができるというのだろう。

二人はお互いに何も言わないまま、沈黙の中で項垂れていた。

やがてかすかな吐息をつき、先に口を開いたのはラダの方だった。

「……今日のところはゆっくりと休もう。裏町へは明日また行けばいい」

青年は志穂を安心させるように、ぎこちなく微笑んだ。そして踵を返して部屋から出て行くこととする。

彼の頬だけでなく、その手にも新しい切り傷の跡があることに、志穂はふと気が付いた。

「ラダ！」

とっさに声を上げる。

振り返った青年は、呼び止められたことを意外に感じている素振りだった。

恐怖に支配されていた間のことを志穂はほとんど覚えていない。ラダが普段使わないような術を使わなければいけないほど、切羽詰まった事態が起こっていたのは確かなようだが、それが彼の傷と関係があるのかどうかは分からない。

けれども、こう言わなければいけないような気がしたのだ。

「……ごめんなさい」

志穂の言葉を聞いたラダは再び微笑んだ。今度は決してぎこちな
い作り笑いではない、柔らかな微笑みだった。
そしてわずかに首を横に振ると、今度こそ部屋の外へ出て行った。

第八話 狂人の虜囚

アーフェル王国の国王の第二子にして、唯一の王子。そして聖ユオル騎士団の団長。

リステス・ギイ・アーフェル　それがあの金髪の少年の名前であり、肩書きであるという。

ラダがジェフやヘイゼル、街の死霊たちにそれとなく聞いた話によると、王子は普段、エテルベリの街から何日か北に行ったところにある、聖ユオル騎士団の拠点の城で暮らしているのだそうだ。それが何故か今回、騎士団と離れ、わずかな供だけを連れて突如エテルベリを訪れたのだという。

「市の役人連中も随分慌ててたらしいよ。何せ先触れもなしに王族が、それもあの悪名高い聖ユオル騎士団の長が来たんだから。当の王子様は、観光が目的だったみたいだが」

「……呑気なものだな」

そう呟くラダの顔はまったくの無表情だ。けれどもその声色には、隠しきれない嫌悪が滲んでいるように感じた。

志穂も彼のことを思い出すと、まだ息が詰まるような思いを覚える。

王子は容姿に違わず、まだ十六歳の若さだという。だが彼は騎士団が山里を焼き払った現場にいた。ということは、決してお飾りの存在ではない。無惨に殺されたあの男に向けて言っていたように、皆殺しの命令を出したのもきつと彼自身。

志穂の命を奪っただけではない。彼はあの惨劇を作り出した張本人なのだ。

そんな少年にまた出くわしたらと思うだけで、平静ではいられなかった。

リステスと出くわした翌日、志穂とラダは改めて　水煙亭　を出

発した。気を付けろよ、とジェフに何度も言われながら。

昨日、リステスを見たあの通りに差しかかった時は、少々どころでなく胸がざわめいた。けれども昨日の光景が嘘のように通りは閑散としていて、石畳の道のどこにも赤の痕跡は見当たらなかった。あの時殺された男性の遺体はとうなつたのだろうか。そして彼の霊はどこへ行ったのだろうかと思うと、志穂の心は沈んだ。

そうして今度こそ二人は裏町にやってきた。

昼間の光に満ちた裏町の風景は、夜の時ほどおどろおどろしくは感じない。怪物を象った看板や山羊の頭部の剥製も、この明るい中ではどこか間が抜けて見えた。

先日訪れた家の扉には、家主の不在を示すらしい札が掲げられていた。

しかしラダが小さく扉を叩くと、やや間を置いてから、内側から扉が開けられる。そこから顔を出したのは陰気な顔をした灰色の口ブの男性で、彼はラダを見ると、小さく頷いて彼を中へ通した。先日老婆と面会した部屋に案内されたが、当の老婆はいなかった。主人は今出かけている、呼びに行くからもう少しここで待っていてくれ。というような意味合いのことを、この家の下男らしい男性はぼそぼそと伝えた後、裏口へ向かった。

他に人がいるようには見えない家に一人放っておかれるくらいには、ラダは老婆との付き合いが深いらしい。

ラダは部屋に置いてある椅子に腰掛けた。

そのまましばらく待ったが、一向に老婆らが帰ってくる気配はない。

手持ち無沙汰の沈黙の中、志穂は誰も聞き耳を立てていないか確かめてから、彼に話しかけた。

「……ラダは、死霊が見えるよね」

「ああ。それがどうした」

「それで、ヘイゼルさんとか、多くの人たちは死霊が見えないものなんだよね」

「ああ。……この間のように、強い怨念や現世への執着を持つ悪霊なら、靈感のない人間の目にも見える場合はあるが。そうでない霊を認識する力を持つ人間はほとんどいない。そういう血筋でもない、ごく普通の家系に靈感を持つ者が生まれることは本当に稀だそうだ」
そこで一旦言葉を切り、ラダは今いる部屋の中を見回した。

壁の一面に本棚があり、中央に椅子とテーブルのセットがあり、床には絨毯が敷かれている。テーブルの上と壁際に一つずつ燭台も置かれていた。志穂の目にはごく普通の、しいて言うならちよっと裕福かもしれない民家の部屋に見える。

「ここのケル婆の亡くなった夫は、滅多にいないその異能の力の持ち主だったらしい。彼女はその頃築いた縁故を使って除霊の仲介をしている。……今の彼女は俺の他にも幾人かの死霊術士を名乗る輩に仕事を仲介しているそうだが、ほとんどは口が上手いだけが取り柄の詐欺師たちで、良くても多少霊が見える程度だそうだ」

無論ケル婆はそのことを分かっていて仲介している、と青年は補足する。

「俺はあまり関わらないようにしているが、この裏町に集まっているのはほとんどがそういう奴らだ。占い師、呪術師に、黒魔術師……皆様々に名乗ってそれらしい看板を掲げているが、本物はほとんどいない。詐欺を通り越して恐喝を行う盗賊紛いの者すらいる」

この界隈の雰囲気やけに不気味なのは、そういう理由かららしい。別世界とはいっても、ラダのように不思議な力を持つ本物の魔法使いがたくさんいるわけではないようだ。

「けど、と志穂はうつむきがちに呟いた。

「あの人は、見えてた、よね」

名前を口にすることすら厭わしく、曖昧な言葉遣いになる。

それでもラダには誰のことを指しているのか伝わったらしく、彼は眉根を寄せた。

「私のこと、確かに見てた。まっすぐに見て、笑って、……また会ったね、って……」

握り合わせた自身の両手に力を込め、恐怖を抑え込む。

そんな志穂を見つめ、ラダは一瞬手を伸ばしかけるような素振りをしたが、すぐに引つ込めてしまった。そのまましばらく沈黙してから、彼はこう答えた。

「……稀とはいえ、先天的に霊を見る力を持つ人間がないわけでもないからな。さらにごく稀なことではあるが、後天的に靈感を得る者もいる。だが、見る力があるから、霊に干渉できる力もあるとは限らない。シホが危害を加えられる可能性は……」

そのとき、青年の言葉を遮るように、外から荒々しく扉が開かれる音がした。

続いて、複数人の足音がこちらに近付いてくるのが聞こえる。

椅子から腰を浮かしたラダが白い杖を握り直したとき、青年のいるこの部屋の扉も乱暴に押し開けられた。

そうして現れたのは、鎧兜に身を包み、剣を手にした兵士たちだった。

三人いた兵士たちは、押し入った部屋の中にラダの姿を認めると互いに頷きあい、全員でラダを取り囲んだ。

「……何事ですか」

あくまで無表情を顔に貼り付けて淡々と問う青年に対し、兵士の一人が威張ったような声を張り上げた。

「エテルベリ市参事会の決定により、我々都市警備隊は、本日この界限にあるすべての家屋の立ち入り検査をしている。また、界限にいた者は、すべて呪術師や黒魔術師などと名乗る怪しげな詐欺師及びその顧客と見なし、男女や氏素性の別なく連行して取り調べよとの命も受けている」

兵士の手には、羊皮紙の令状らしきものがある。

この国の政治制度について詳しくは知らない。だが、滅茶苦茶だと志穂は思った。

確かにこの裏町は、ラダの話を聞く限り犯罪者めいた人々の集まるところではあるらしい。けれどもラダは他の人たちとは違って、

詐欺師ではない、本物の力を持つ術士だ。第一、有無を言わず連行しようだなんて、いかにも横暴な気がする。

ラダは一瞬口を開きかけたが、すぐに諦めたように閉ざしてしまった。何を反論しても無駄だと思ったのかもしれない。

兵士たちが黙り込んだ青年の腕を両側から捕らえる。

それを傍から見ながら、志穂は焦った。

どうにかして助けなければ、と思い、けれども今回はどうすればいいのか上手い方法をとっさに思いつけないまま、連行されるラダの後を追いかける。

しかしそのとき、青年は横目でちらりと志穂に視線を送った。

まるで、自分は大丈夫だから逸らないように、と少女を制するように。

ラダは手に縄をかけられ、裏町を出て路地を引き回された末、街の川岸寄りにある大きな建物の中に連れて行かれた。どこか陰気な雰囲気漂うそこは、警備隊の詰め所のような場所か、でなければ牢獄だ。

ここで志穂はラダの姿を見失う羽目になった。彼の手から奪われた白い杖は、兵士の一人によって物置のような一室に放り込まれたのに、ラダ本人は兵士たちに小突かれながらどこか離れた別の部屋に連れて行かれたからだ。

志穂はどうにかできる限り彼の後を追いかけようとしたが、地下へと続く階段のところで杖から離れられる距離の限界がきてしまった。

（ああ、もう）

そこで志穂は杖のところに舞い戻り、自分で杖を抱えて移動できないか試みた。

けれども、杖自体は無造作に物置の片隅に放置されているのだが、部屋の扉は閉ざされて鍵がかけられている。窓も見当たらない。志

穂自身は難なく扉や壁をすり抜けることができても、実体ある杖と一緒にすり抜けることは不可能なのだ。

それでも何度か杖と一緒に壁抜けができないか挑戦した後、志穂は諦めた。よく考えれば、杖を抱えて移動できてもそこを誰かに見られれば、ひとりでにふわふわ浮いて移動する怪しい杖の持ち主、とラダが見られる可能性もある。

ラダは今頃地下牢にでも入れられているのだろうか。刑事ドラマの容疑者のように取り調べを受けているのかもしれない。あまり手荒な真似をされていないと良いのだが、先刻の兵士たちの扱いからして既に乱暴だった。

(……どうしよう)

志穂は杖の傍で膝を抱えて途方に暮れた。途方に暮れながら、今いる場所を見回す。

暗い物置の中には、ごちゃごちゃとした物品を詰め込んだ木箱がいくつも置かれていた。

これらも別のところからの押収品なのか、不気味な顔をした人形や動物の骨らしきもの、歪で濁ったガラス玉など呪術を連想できる物品から、ただの木皿や匙、ヒビの入った花瓶など生活用品にしか見えないものまで、無分別に詰め込まれている。

志穂がしばらく手持ち無沙汰にそれらの押収品を眺めていると、不意に物置の扉の鍵が外から開けられ、中に人が入ってきた。

危うく、また悲鳴を上げるところだった。

とつさに傍にあるラダの杖を片手で掴まなければ、そのひんやりとした感触がわずかな冷静さを取り戻してくれなければ、志穂は恐怖の悲鳴を飲み込むことができなかつただろう。

物置に入ってきた人間は三人いた。

一人はランプを手にした警備隊の兵士。何か不安げな顔をしている。

もう一人も兵士のようにだったが、身に付けている鎧や剣は警備隊の方より立派で、目つきも鋭い。

そして最後の一人の金髪の少年は、ランプの明かりに照らされた物置を見回しながら、木箱の一つに近付いて見下ろした。

「……ふうん、これが押収した品なの？」

そう呟いて、少年は　この国の王子リステスは、木箱の中から不気味な顔の人形を摘み出した。そして人形の腕をぶらぶらとさせながら、つまらなそうな顔をする。

「あんまり面白そうな物はないね」

「かの裏町の連中は、占い師だの呪術師だのと名乗っておりますが、実際にはただの詐欺師や盗賊、故買屋のような輩ばかりですので…

…その、殿下のご興味を引くほどの物は……」

と、遠慮がちに答えるのは警備隊の兵士である。

「そうなんだ。そういう怪しい人たちの持ち物なら、死んでるのに生きてる動物とか、恐ろしい魔物の標本とか、呪われた魔術書とかあると思っただのにな」

訳の分からないことを言いながら、リステスは人形を放り投げて木箱から視線を上げた。

そして、少し離れた物置の隅で硬直している志穂の方に目を留めると、

「あ」

と、嬉しそうに声を上げた。

志穂はびくりと肩を震わせて、けれども身を翻して壁の向こうに逃げ出す勇氣も出ないまま、杖を掴む手に力を込めた。そうして物に縋らなければ、また先日のような恐慌に陥ってしまいそうだった。

自分が今、どんな表情をしているか確かめることはできない。死霊は鏡に映らないからだ。けれども魂だけの存在である死霊の意思と感情がそのまま姿に影響を及ぼすのなら、きっとひどく青ざめた顔をしているはずだ。

「君、昨日も会ったね」

それなのに、リステスという少年は脳天気なほどに明るいう声と表

情で話しかけてきた。

この上なく美しい顔立ちがにつこりと微笑む様は、彼が彫像ではなく確かに血の通った人間なのだといいことを教えてくれる、魅力的なものだ。魂の底から湧き上がるようなこの恐怖がなければ、少女もきつと見惚れていたかもしれない。しかし現実には、ただ恐怖を深めたただけだった。

少年の肩越しに、警備隊の兵士が戸惑った顔をしているのが見える。

彼には志穂の姿が見えないのだろうか、と恐怖を紛らわそうとする頭でそう考える。なら、彼の目には、リステスが突然何もないうところに話しかけているように見えるはずだ。戸惑うのも無理はない。もう一人の兵士が　もしかしたら昨日少年が連れていた衛兵の一人かもしれない　諦めたように小さく首を振り、警備隊の兵士を促して物置から出て行った。

物置には、金髪の少年王子と志穂だけが残された。

「ねえ。君、あの山の村にいた子だろう」

兵士たちが出て行ったことにも気付かない様子で、リステスは朗らかに言った。

「アーフェル人じゃないし、あの山の人たちとも違う感じの子だったから、印象に残ってたんだ。黒い髪も綺麗だったしね。一緒に焼いちゃったの、後でちよつと惜しかったなって思ってたくらいだよ。ねえ、君、どこから来た子なの？」

志穂は目を見開いてまじまじと彼を見つめた。

二つ年上の少年にしてはどこか無邪気に過ぎるような口調は、この際どうでもいい。けれども彼はあの山里の出来事を覚えているよ。うなのに、自分が少女に対して何をしたか忘れていないわけではないだろうに　いっそ無神経なほどのこの言動は一体何なのか。

「あなた、は……」

志穂は恐怖に萎縮する心を叱咤し、どうにか言葉を絞り出した。

「あの時、あそこにいた、……聖ユオル騎士団、の」

「うん。僕が団長だよ」

「……あなたたちは、どうして、あの村を」

「どうして、って？」

リステスは不思議そうに目を瞬かせた。

「決まってるだろう？ もちろん、彼らが長年アーフェルに従わなかったからさ。王直々の命令で、聖ユオル騎士団が彼らを肅清することになったんだ」

何が決まっているというのだろう。

祭壇の上で立ち尽くしていた志穂を囲み、歓喜の声を上げていたあの人々の中には、老人も子供もいた。けれども皆、無惨に命を奪われ、村は焼き払われた。王の命令だからといって、どうしてあんな真似が許される。

どうして そんなことで、命を奪われなくてはならない。

「じゃあ、どうして、私を殺したの!？」

志穂は抑えきれずに堪えきれずに叫んだ。

そうして、リステスの青い目を睨み付ける。湧き上がる怒りが恐怖を抑えた。

「私は、私は、助けてほしかったのに！ 痛くて、死にたくなくて、

なのに、あなたが！」

それ以上言葉を続けられず、志穂は唇をわななかせた。

しかし志穂の叫びにも怒りを込めた眼差しにも、リステスは顔色一つ変えなかった。昨日、男に刃を向けられ憎悪に満ちた言葉をぶつけられて尚、平然としていた時のように。

少年はしばらく黙って志穂を見つめた後、やがて首を傾げた。

「もしかして、剣で刺したのが駄目だったのかな？」

意味を理解しかねる言葉を呟いて、彼は一人で納得したように頷いた。

「そうか、それならごめんね。君が苦しそうにしてたから、なるべく早く楽にしてあげないと思って思ったんだけど。確かに剣で刺されるのも痛いからなあ。でも、あの時はあれが一番手っ取り早かった

「少年の表情や声音は奇妙なまでに真面目ぶっていて、悪趣味な冗談を言っている雰囲気は感じられない。だからこそ得体の知れない気持ち悪さがあった。」

志穂は絶句しかけたが、それでもなんとか必死に言い募ろうとした。

「そ　　ういう、こと、じゃなくてっ……わ、私……人の、命、を
「命」
」

リステスは、今までで一番不思議そうに呟いた。

「みんな、命は大切だって言うね。そのくせ命を大切にしている人は少ないんだ。……ねえ、でも、君は命がなくなってもここにいるじゃないか。それじゃあ駄目なの？」
ぞつとした。

この少年は、死霊と生きた人間の区別もつかないのだろうか。

（　　おかしい。この人は、おかしい）

昨日もそうだった。彼は自分を暗殺しようとした男の憎悪に対して、何の良心の呵責も感じていない様子だった。

きつと志穂や、虐殺された山の民の人々に対してもそうなのだ。彼は志穂たちに対して、『悪いこと』をしたとは微塵も思っていない　だから、こんな言葉を吐けるのだ。

「ところでその杖、君の大切なものなの？　ずっと抱きしめてるけど」

少年に指摘され、そこで志穂は、先程までぞつと掴んでいただけだったラダの白い杖を、自分がいつの間にか腕の中に引き寄せ固く抱きしめていることに気が付いた。

リステスは興味深そうに志穂の傍へと近付いてくる。金髪が揺れ、あの白い顔が間近に迫ってくる。

来ないで、と叫ぼうとして叫べなかった。

恐怖に気を取られた隙をつくように、リステスは無造作に手を伸

ばすと、志穂の腕の中から杖を奪い取った。そして杖をランプの明かりにかざす。

「ふうん。結構しっかりした作りの杖なんだね。材質は……何だろう、これ。石じゃない。白く塗った木でもない。象牙みたいな……ふうん」

ふと、リステスの顔から表情が抜け落ちた。

彫像のような顔が、その一瞬、本当に彫像になったかのように志穂には見えた。

彼は無表情でしばらく考える素振りを見せた後、白い杖をくるりと回して、その先端を床にこつんと打ち付けた。そして、

「決めた、この杖は今日から僕のものだよ」

気味が悪いほどの無邪気な笑顔をぱつと浮かべて、彼はそう言い切った。

*

暗くて異臭のする地下牢に押し込められること丸二日、罰金という名の賄賂を支払って、ようやくラダは釈放された。

強引に連れてこられた割にはろくな尋問もされず、身分証明を求められたりもしなかった。不幸中の幸い、というよりは、あちらも元々本気ではなかったということなのだろう。悪趣味な示威行為に巻き込まれただけなのだ。

これで奪われたものがすべて返ってきてくれたなら、今回の件は通り雨に降られたようなものと思うこともできたのだが。

慣れ親しんだ感触のない右手を握りしめ、傍に黒髪の少女の姿がないことを確かめて、ため息を吐く。

釈放されたその足でラダが向かったのは裏町だった。

先日の騒動が尾を引いているのか、界限はひっそりと静まり返っている。山羊の剥製を飾っていた店の前には、乱暴に扱われて根元から折れたと思しき山羊の角だけがぼつんと一つ落ちていた。

兵士に引つ立てられた現場であるケル婆の家に行くと、家主の老婆が平然とした顔で出迎えてくれた。留守中に家捜しされたことなど、気にしてもいないようだ。

「災難だったね、ラダ」

老婆は意地悪い笑みを浮かべながら言った。

「市の連中は時々ああやって、この裏町みたいに犯罪者のたむろする界隈を適当に漁っていくのさ。見せしめと、警備隊がちゃんと治安維持のために働いているってことを一般市民に知らしめるためにね。もうそろそろこの裏町の番だろうとは思ってたが、まさかちよつどお前がやってきた時にとはねえ」

「……俺が連れて行かれるのを隠れて見てたんだろう？」

「野暮用から戻ってきたらちよつど警備隊の連中を見かけてね。隠れないわけにはいかないじゃないか」

そんなことを臆面も無く言いながらも、老婆はしつかりと先日の仕事分の報酬を渡してくれた。

小さな革袋の中に銀貨が十数枚、さらに金貨まで一枚混ざっている。この袋一つで、普通の市民の一家がしばらく遊んで暮らせるほどだ。仲介料を引いた上でこの額なら、依頼人が貴族とはいえ随分高額な報酬だった。

「……随分吹っかけたんだな」

「そりゃあもう。泣いて感謝されたさ」

いひひと笑う老婆に、口を出すような真似はしない。氏素性の不確かな青年には、彼女のような仲介人がいなければろくな仕事も得ることができないのだから。

いつもなら報酬を受け取った後すぐに立ち去るものなのだが、今回はもう一つ用があった。

「ケル婆。一つ頼みがある」

「何だい、珍しい」

「……警備隊に杖を奪われたままなんだ」

淡々とした口調に、苦いものが混じる。

「おやまあ。釈放される時に返してはもらえなかったのかい」

「抗議はしたが聞き入れてもらえなかった。あまり食いついて怪しまれるわけにもいかない。だからそつちから手を回してほしいんだが」

「警備隊にかい」

「……この家の物品があまり押収された様子がないのは、手を抜くよう頼んだからだろう」

まあね、と老婆は肩をすくめると、手のひらを青年に向けた。

「けれどもそう強い繋がりがあるわけじゃあない。金はもらうよ」

ラダは無言で、先程受け取った革袋の中から金貨一枚を取り出して老婆に渡した。旅費にして何ヶ月分になるのかと考えると少し惜しいが、老婆は差し出す見返りが大きいほど頼もしく応えてくれる類の人物だと、数年の付き合いで熟知している。

「確かに。しばらく待っておいで、すぐに取り返してあげるよ」

老婆はにんまりと笑みながら請け合ってくれた。

方々に伝手のある彼女がそう言うなら間違いはないだろう。

(だが……シホには心配をかけただろうな)

杖から遠く離れられないはずの彼女だ。あの牢獄の周辺に彼女の話し相手となるような死霊がいるとも思えないし、丸二日も一人にされてはさぞかし不安に違いない。

大人しいまればとの少女の姿を思い浮かべながら、ラダは杖を取り戻した後に志穂に対してどう謝罪するか、その言葉を今から考えることにした。

押収品の杖が王子リステスによって持ち去られたという事実をラダが知るの、数日後のことだった。

*

あの後、リステスは警備隊に話を通して、本当にラダの白い杖を

自分の物にしてしまった。そして彼は杖を抱えてエテルベリを離れ、少し北にあるという騎士団の居城へと出発したのだ。

否応なく、志穂もその後を文字通り引きずられるように連れて行かれることになる。

捕まったラダがその後どうなったか、確かめることも叶わぬまま。志穂はラダの白い杖から遠く離れることができない。離れようとしても進めず、逆に杖の行く先に引きずられてしまう。この時ほど、その枷を忌々しく感じたことはない。

それでも、ラダの傍にいた時のようにリステスの傍近くにいることは嫌で、当初志穂は杖から離れられる限界ぎりぎりのところまで遠ざかるうとした。

けれどもあの王子は、

「どうしてそんなに離れたところにいるの？ 僕の傍においでよ」

などと言って、自分の提案が断られることなど夢にも思っていないかのような笑顔で志穂を手招くのだ。

(……本当に、何なんだろう、この人は)

精一杯睨み付けても、少年は気にした様子がない。

むしろ彼の目の届くところにいた方が、声をかけられる機会が減るので、仕方なく志穂は恐怖を呑み込んで彼の傍へ近付いた。死霊が見えるからといって死霊に干渉する力があるわけではない、とラダは言っていたし、少なくとも危害を加えられることはないはずだと信じたかった。

少年の間を見て杖を取り返せないか、という思惑もあつたにはあつたのだが、それは叶わなかった。

数日の旅の間、彼はまったく付け入る隙を志穂に対して見せなかった。

さすがに王子だからだろうか。街道を北の方角へ進むリステスは馬車に乗り、さらにその周りを騎馬兵たちに囲まれていた。そして夜は通りがかった街の一番大きな屋敷に泊まり、歓待を受けていた。「殿下をこうして我が屋敷に迎え入れられることは、まことに光栄

の至りで……」

領主のような身分らしい、年輩の男のへりくだった口上を、リステスは興味なさげに聞き過ごしていたものだ。

その間も、彼は白い杖を腕に抱えて離さない。

食事の際などには必ず傍にいる侍従に杖を預け、決して手放さないようきつく言いつけていた。それ以外の時には常に腕に抱え込み、志穂に向かってにこりと微笑むのだ。

「ひんやりとしていい杖だね、これ。気に入ったよ」

それはある人の母親の形見なのだ、と言っても、彼は決して意に介さないだろう。その程度のことでは志穂にも想像がついた。

(でも、変なのは、この人だけじゃない……)

リステスが、普通の人間の目には見えないはずの志穂に堂々と話しかけていても。

まるでお気に入りの人形を連れ歩く幼児のように、白い杖を抱えて歩いていても。

周囲の衛兵や侍従たちは決して何も言わなかった。彼らは慣れたような、諦めたような目をして、黙々と王子の下知に従っているのだ。

それが志穂にはひどく奇妙な光景に見えた。いくら王子だからといって、諫める人間の一人や二人くらいいてもいいものだろうに。

「王都やこの辺りでは、あんまり黒髪の人は見かけないんだけど、君の髪の色は綺麗な黒だね」

一体何が楽しいのか、リステスはこちらが黙り込んでいてもお構いなしに話しかけてくる。

そしてしばらく飽きるまで一人で取り留めのないことを喋っているのだ。

「アーフェルでも西や南の沿岸地方に行くと黒髪が多くなるらしいし、僕の母上は南方の国から嫁いできたそうだから、とても綺麗な黒髪だったけど。でも君は母上の国の人たちともまた顔立ちが違うね。あの山の人たちも髪は黒かったけど、そんなに目の色は濃くない

かつたし……」

数日間、恐怖を堪え忍んで口をつぐみ、少年の言葉を聞き流し続けた成果といえ、彼の顔を見たり声を聞いたりして生じる恐怖を呑み込むのが若干上手くなった、ということくらいである。

そうして無為に時は過ぎ、杖を取り返す隙をどうしても見つけれないまま　そして力づくで奪い返そうという勇氣も出ないまま

リステス一行は目的地へと辿り着いてしまった。

「見えた。ほら、あれが僕の住んでる城だよ」

馬車の小窓から見える風景を指さして、リステスは言った。

「ヴィルフオート城っていう名前なんだ。気に入ってくれるといいんだけどな」

その『城』は、小高い丘の上に築かれた灰色の城塞のようだった。丘の周囲には深い堀が巡らされ、その向こうに背の高い城壁がある。

二重に築かれた壁を越えた先、丘の頂上に、灰色がかった石造りの堅固な城がそびえていた。

リステスの乗った馬車は堀に渡された跳ね橋を通り、衛兵たちの敬礼を受けながら、壁に設けられた城門へ入る。

城門の上部には、巨大な紋章の彫刻が誇らしげに掲げられていた。それは、ある生き物の姿を圖案化したものようだった。馬車はその下を潜り抜けて丘の上へと向かった。

槍に貫かれ、血を流しながら横たわる竜の紋章の下を。

第九話 灰色の城

城壁を越え、兵舎と思しき平屋の建物を横手に見ながら道なりに丘に登る。

二つの守備塔に見下ろされながら城門をもう一つ潜り抜けると、城の前庭らしい空間が広がった。

リステスはそこで馬車を降りた。とりあえず志穂もそれに従う。

「殿下、ご無事で何よりでございます」

「うん」

出迎えた侍従らしい男に生返事をしながら、彼は杖を抱えたまま城の建物の方へ足を向けた。

ヴィルフォート城は、丘の頂上を平らに削った土台の上にくつもある、飾り気のない石造りの四角い建物や塔で構成された城のようだった。建物と建物の間には中庭が設けられ、それぞれが屋根付きの回廊で繋がっている。

無骨とも見える石造りの外観に反し、灰色の城の内部は色鮮やかなタペストリーや絨毯、銀製の調度品で飾られていて、この間見たブレニー子爵の屋敷ともあまり遜色がないくらいには華やかだった。少なくとも内装は。

けれども城全体に漂うこの雰囲気はどうだろう。

決して真夜中ではない、青空に太陽のさんと輝く昼間であるにも関わらず、重苦しくどんよりと淀むような城内の空気は灰色の外観から受ける印象とよく似ていた。

それは分厚い石壁と小さな窓のせいで、あまり陽の光が入ってこないからだろうか。

王子を出迎える衛兵や侍従、下働きの召使いと見られる女性まで、皆一様に表情に乏しいからだろうか。

あるいは 中庭の隅、回廊の角、石壁の表面やタペストリーの陰に見える『影』のせいだろうか。

エテルベリの街で見かけた死霊やジェフ、カレンらは、見た目には生きた人間とほとんど変わらなかった。けれどもこの城のそこかしこで彷徨っている影は、輪郭がぼやけてはつきりとした形がなく、白とも黒とも灰色ともつかない奇妙な色彩に覆われている。曖昧な輪郭の体から突き出た頭部らしきものと、時折何かを求めるように宙を彷徨う手足らしきものがなければ、人影とすら判別がつかなくつたかもしれない。

(……あれも、死霊?)

でなければ、まだ志穂の知らない異形の存在だろうか。

いずれにせよ、見ていてあまり心穏やかになる類のものではない。

「娘。あれらを注視してはならぬ。近付いてもならぬ」

不意に背後の方から低い声がした。

驚いて振り返ると、すぐそこに一人の男性が立っていた。

目深に被った兜から覗く青い目が志穂を見下ろしている。鈍く光る鎖帷子の上に白い胴衣を着込み、腰帯に剣を下げ大きな盾を携えて、顎髭をたくわえた精悍な風貌は、兵士というよりもむしろ騎士という言葉が相応しいように思えた。

騎士団の長であるというあの少年王子よりは、よほどそれらしい。「ここは怨念に満ちた城。早々に立ち去られよ」

その男性は端的にそう告げると、すぐに横合いの壁を音もなくすり抜けて志穂の前から去っていつてしまう。だから志穂は、できるものならそうしたいのだと言い損ねた。

リステスは階段をいくつか上り、衛兵たちに左右を守られた扉を開けて、中の部屋へと入っていった。

志穂は一瞬躊躇った後、拳を軽く握りしめて、その部屋の中へと滑り込んだ。

それなりに広々とした部屋の中には、天蓋付きの寝台や金で縁取られた大きな姿見、側面や脚に丁寧な彫刻の施された木のテーブルと椅子、銀の燭台や水差し、衣装箆筒といった風に、豪華な調度品

が一通り揃っている。床には柔らかそうな絨毯が敷かれ、壁の暖炉の周りには肖像画や羊皮紙の地図、それに大きなタペストリーが掛けられていた。

タペストリーに織り込まれている模様は、先程も城門で見かけた、あの紋章のようだ。

角の生えた爬虫類のような頭部、何対もの蝙蝠の翼、鱗に覆われた長細い胴体と尾。

そして背中に突き刺された巨大な槍と、そこから流れ出して体の半分を赤く染める血。

鮮やかな色系で巧みに表現されたその竜の姿は、城門に掲げられていたものよりもずっと生々しく見えた。

ジェフによれば、アーフェル王家の紋章は英雄に退治された竜なのだという。ならばこれがそうなのかもしれない。志穂からすると何もわざわざ痛々しく血を流しているところを紋章にしなくても思ってしまうのだが、アーフェル人と日本人の感覚は違うのかもしれない。

「どう？　ここが僕たち聖ユオル騎士団の城だよ」

リステスは椅子に座りながら、輝くような笑顔を志穂に向けた。

「この城はとも古くて由緒ある城なんだよ。この建物自体は百年前のものだけど、城壁と堀は二百年前、基礎部分とか井戸とかはさらずとずっと昔、建国期にまで遡れるんだって。かの英雄王、聖ユオルに仕えた騎士の居城があったところだそうだよ」

聖ユオル、竜殺しの英雄王。アーフェルを建国した王なら、王子であるリステスはその聖ユオルの子孫だということになるのだろうか。

退治された竜と、ラダの探す竜、そして竜の船。

それらの話がどの程度重なり合っていることなのか、志穂にはよく分からない。けれどもまったく別の話とも思えなかった。

「……………あの……………あなたは……………」

「リステスって呼んでよ。あ、そういえば君の名前もまだ聞いてな

いや」

王子は座ったまま、やや距離を置いて立っている志穂を見上げた。「ねえ、名前を教えてよ。教えてくれたら一つ頼みを聞いてあげるから」

頼み、と志穂は目を瞬かせた。

そして少し思案する。この無邪気な語り口の少年の言動が信用できるとは思えないが、名前を教えるくらいで現状がこれ以上悪くなることもないだろう。

「……岸边、志穂」

志穂が名前、と小さく付け加える。

「キシベ、シホ？ やっぱり異国風だね。シホ、シホ、不思議で素敵な響きだなあ」

この上ない美少年に名前を連呼されても、ラダの時のように気恥ずかしい思いはまったく感じなかった。代わりに感じたのは強烈な違和感と居心地の悪さ、少しの気味の悪さで、志穂は彼の言葉を遮るように声を上げた。

「そ、それより……私の頼みを聞いてくれるんでしょう」

「うん」

「じゃあ、その 白い杖を、返して」

ありつただけの勇気を振り絞って告げた願いに対し、リステスはにっこりと笑った。

「それは駄目」

さすがにここまで堂々と朗らかに前言を翻されるとは思わなかった。志穂は怒る前に呆気に取られた。

「だって、この杖はもう僕のだからね。それに君に渡したら、きっと君はどこかへ消えていってしまうだろう？ そんなのはつまらないよ。僕は君が気に入ったんだ」

志穂は暗澹たる気持ちになった。絶望的な気分、と言い換えてもいい。

リステスはつまり、志穂が彼から遠ざかることは許さないと

ているのだ。

「……気に入ったって、どうして？」

弱い口調で問うと、

「そうだなあ、君が黒髪で、異国人で、ちょっと変わった感じの子だからかな」

どこまで本気なのか分からないような答えを、至って真面目な目つきで言う。

それからリステスはふと思いついたようにこう続けた。

「ああ、でも。この杖のこと、詳しく教えてくれたら考えてもいいよ」

「……杖のこと？」

「どういう謂われがある杖なのかとか、君以外に持ち主がいるならそれは誰か、とか」

杖の本来の持ち主である青年の白い顔が、志穂の实在しない脳裏に浮かんで消えた。

(ラダ……)

離れずに付いていくと約束したのに、こうして離れてしまっただけから何日が経っただろう。

リステスと話せば話す度、青年がどれだけ親切だったかが身に染みるようだ。

志穂は唇を引き結び、首を横に振った。

リステスの言うことは何一つ信じられない。だが、例え本当に杖のことやラダについて知っていることを話せば杖を返してくれるのだとしても、やはり志穂は何も言わないことを選ぶだろう。志穂が杖を抱えてラダの元に戻ったところを、今度は青年も一緒に捕まえられるようなことになっては堪らない。

「そう。ならいいや、この杖は大事にしまっておくからね。でも、後で教えてくれる気になったらいつでも言うてね」

朗らかにそう言うリステスを、志穂は怪訝に思った。

何故、彼は杖のことを知りたがるのだろう。いや、そもそも彼は

何故、杖を自分のものにしたのだろう。

人の形見についてやかましく訊ねるのは気が引けたから、志穂は杖についてラダに質問したことはない。ただ、あの杖は、ラダが死霊術士としての力を行使する際に用いられる道具だ。だから杖自体に何らかの特別な力が込められているのだとしてもおかしくはない。ラダと同じく死霊を認識できるリステスが、杖に何らかの力を見出した。 というのもありそうなことだ。

それでも、何か引つかかる。

そういえばリステスは杖の材質を気にしていたようだった。石でも木でもない、と。

以前にも杖の材質について語られる言葉を耳にした覚えがある。

そう、あれは確か、杖を盗まれた時のことだ。あの時、倉庫にいた盗人たちは何と仰っていただろう。

「殿下」

志穂の思考を遮って、リステスを呼ぶ声が部屋に響いた。

いつの間に部屋にやってきたのだろう、二十代半ばに見える年頃の女性が扉の傍に佇んで、リステスに向かって頭を下げている。褐色の髪を後頭部で一つに纏め、姿勢良く背筋を伸ばしているその姿はいかにも真面目そうだ。

「ご帰還をお待ちしておりました。此度もご無事で何よりです」

「ああ、バーサ。ただいま。留守の間、何もなかった？」

「はい。特に申し上げるほどのことは何もございませんでした。：

…ところで、そちらの方は？」

ちらりと女性に視線を向けられ、志穂はそれほど驚きはしなかったものの、彼女の視線の冷たさに少し居心地の悪さを覚えた。

「シホだよ。気に入ったんだ」

リステスは笑顔で、紹介にも説明にもなっていないことを言った。

「……さようでございますか」

「この城で困ってたら助けてあげるんだよ、バーサ」

「畏まりました」

バーサというらしい女性は真面目な顔つきのまま答える。

「それじゃあ、僕はちよつと出てくるからね」

そう言っていると、リステスは杖を抱えて立ち上がり、部屋の扉を開けて外へ出て行った。

その後を追うべきかどうか、志穂が迷っていると、

「シホ、でしたね」

と、部屋に残った女性に刺々しい声を掛けられた。

「私はバーサ。リステス殿下の侍女として、長らくお仕えしております」

「あ、はい、ええと…… 岸边志穂です。はじめまして……」

とりあえず最低限の挨拶はしたものの、好きでこの場にいるわけでもないのに「これからよろしくお願ひします」などと続けるのは何か違う気がして、志穂はそれ以上何も言えなかった。そんな少女をバーサはじろりと見下ろす。

「この城に来たからには勝手な行動は慎み、くれぐれも王子殿下にご迷惑をかけることのないように。それと、勘違いなさらぬことです。殿下は毛色の違う娘を面白がっているだけなのですから」

志穂は一瞬ぼかんとして、バーサという名の女性を見上げた。

誰であっても頭を下げて王子に仕えるのが当然だと思っていそうな顔だった。

勝手に連れてこられて、迷惑をかけられているのはこちらの方だ。

と言いつ返せば良かったのだろうが、その勇気が出ないうちに、バーサは志穂を冷たく一瞥すると、扉をすり抜けてどこかへ行ってしまった。

(…… 本当に、何なんだろう、この人たち)

志穂はもやもやする心を抱えたまま、枷に引きずられる前にリステスを追って部屋を出ることにした。

リステスは城にいくつかある中庭のうちの一つにいた。

中庭では、屈強な男性たちが互いに剣と盾を構えて打ち合ったり、あるいは素手で組み合ったりして、戦いの鍛錬をしているようだ。リステスは杖を抱えてその様子を眺めながら、この場にいる人々の中では一番年嵩で立派な感じのする男性と言葉を交わしている。

今すぐ志穂に話しかけてくる素振りはないので、少し安心して中庭を眺めた。

ここが騎士団の城だというなら、鍛錬している彼らは騎士なのだろうか。

その割には、顔や腕が傷だらけだったり、髪や髭が整っていないかたりして、粗野な風に見える男性ばかりなのはどういうわけだろう。もし志穂が生身の少女のまままで出くわしたら、回れ右して逃げ出したくなるような大男もいる。

もつとも、物語の外の本物の騎士というものはこういうものなのかもしれない。ましてや聖ユオル騎士団は世にも悪評轟く非道な集団なのだ。中庭にいる彼らが皆、老人も子供も問わない殺戮に関わっているのかと思うと、胸の中がざわつくように感じる。

(でも、あの人たち……)

平然とした顔で訓練に精を出しているあたり、やっぱり気付いていないのだろうか。

あの気味の悪い曖昧な『影』のようなものが、中庭のあちこちに吹き溜まって、まるで靄かかったようになっていていることに。

今も、取っ組み合っている男性たちの足元にふつと影の一つが現れて、彼らの足を掴もうと曖昧な手足を伸ばすような仕草をしている。けれども影は男性らの踏み鳴らす足音にかき消されて、一旦霧散したかと思うと、少し離れたところでまたあやふやな形を結んだ。あれらを注視してはいけない、と言っていた死霊の男性のことを思い出す。

彼はこの中庭にいる誰よりも騎士らしい容貌をしていたように思う。あの人は一体何者だったのだろうか。

薄気味の悪い光景を眺めながら、そんなことを考えていると、

「おい、その黒髪の嬢ちゃん」

いささか乱暴な口調でそう話しかけられた。

こんなそれぞれ違う人たちに話しかけられる日は、この世界に
来て以来のことだ。

そう思いながら振り返った先にいたのは、ラダと同じ年頃、二十
歳前後くらいの青年だった。

ひよろりと痩せて背が高く、赤茶けた髪は不揃いで、似た色の目
が狐のように吊り上がっている。そしてラダが着ていたものよりも
遙かにぼろぼろで継ぎ当てだらけの服を身に纏っていた。

「アンタ、あの王子様が連れてきた奴だろ」

はい、と小さく返事はしながらも、志穂は胡乱げな感情を隠さず
に青年を見上げた。

「あの王子様は年上趣味だとばかり思ってたが、異国人の年下のガ
キでも構わないのな。あんなのに気に入られて、可哀相になあ」

狐に似た風貌で、にやにやとした薄笑いを浮かべながらそんなこ
とを言われても、むしろ反発心が起こるだけだ。

同じ年頃の男性でもラダとはまるで違う。

「そうそう、オレはロイ。嬢ちゃんは？」

「……岸辺志穂、です」

あまり気乗りはしなかったが、一方が名乗っているのにだんまり
を決め込むのも気まずいので、小声で答える。

変な名前だな、と青年は臆面もなく呟いてから、

「なあ、突然城に連れてこられたのなら勝手が分からねえだろ。オ
レが色々と教えてやろうか？」

いかにも親切めいた言葉だが、にやにやと嫌な笑みを浮かべなが
らこちらを見下ろす素振りといい、馴れ馴れしい感じのする口調と
いい、このロイという青年は、ラダやジェフのように信用できる人
間には到底見えない。

その思いが表に出ていたのだろうか、ロイは目を細めた。

「はは、そんなに胡散臭そうに見るなよ。オレとアンタは似たような境遇の間柄なんだからさ」

「似たような……？」

同じ死霊の身だと言いたいのだろうか。

「そうさ。見れば分かる。あの王子様に向ける目」

口元を歪める青年の首に奇妙な黒い痕があることに、志穂はふと気が付いた。

不自然なほど黒々としたそれを思わず注視すると、ロイもまたそれに気付いき、一瞬笑みを消した。

「ああ、これがなんだか教えてやろうか」

そう言っつて、手を伸ばしてきたロイに手首を掴まれる。かすかにひやりとした気がしただけで、あとはまったく体温の感じられないその手の感触にぞつとする間もなく、胸が軋み、視界が揺らめいた。そうして脳裏に浮かぶものを、志穂は見た。

ロイと名乗った赤茶けた髪青年が、首に縄をかけられているところを。

だらりと手足を伸ばした格好で台から吊られて、ゆらゆらと揺れている様を。

そして少し離れたところでそれを眺めている、美しい少年の退屈そうな顔を。

息を呑み、目を見開いた少女を見て、ロイは低く笑った。

「オレはな、ドブ溜めみてえな場所に生まれて、生きるためには何でもやった。盗むためには人も殺した。けどな、あの王子様ほど殺しちゃいねえぜ」

胸の内を突き刺すような激しい感情。これと似たものを以前も感じた。

「それでもオレは薄汚い盗賊として首吊り台送り、王子様は綺麗な顔で今日もご機嫌だ。これ以上不条理なこともねえよなあ？」

怒り。憎しみ。そして、生者への恨み。
無惨に命を奪われた死者の怨念　カレンの時と同じ感情が志穂
の中で暴れている。

けれど、今こうして志穂の胸を苦しめるそれは、果たして本当に
青年から来るものなのだろうか？

「分かるだろ、アンタなら。分かるよなあ。だって、アンタも」
志穂はとっさにロイの手を振り払った。

赤茶けた髪的青年から、彼がもたらす負の感情から逃げるように
踵を返す。

中庭から離れようとする志穂の背中に向けて、嘲笑うような声が
投げかけられた。

「これから仲良くしようぜ、お嬢ちゃんよ」

中庭を飛び出し回廊を駆け出してそう間もないうちに、見えない
壁が行く手を阻んだ。志穂は先に進むための無駄な努力をする気にも
なれず、しばらくその場で一人うずくまっていた。

ロイは追いかけてはこなかったし、城までの道中とは違い、リス
テスもわざわざ探しには来なかった。

次第に日が落ちはじめ、灰色の城にも宵闇が迫り来る。

回廊からも、城内に灯された明かりが窓からほのかに零れている
のが見えた。

けれども人気がない回廊は深まる闇に呑まれたようで、少女の孤
独をますます深める。

城には死者を見る力を持つリステスがいて、何人もの死霊がいる。
その気になれば対話する相手には困らないのに、無言のラダの後を
付いていくしかなかった旅の間よりも、今の方がずっと孤独に感じ
る。

このままここでこうしていても仕方がない、そうは思うがリステ
スの元へ戻る気も起こらず、志穂はふと下を向いた。

そして眉をひそめる。

足元の暗闇の中に、何かがつごめいているような気がした。よくよく見ると、それはあの得体の知れない影と同じ存在のようだ。気味悪く感じた志穂が数歩後ずさり、その影から離れようとした途端、影の曖昧な手が伸びてきて志穂の足を掴んだ。

感触はなく、体温もない。

けれども確かに影は志穂を捕らえている。その証拠に、掴まれた足を動かそうとしても動かない。

(何、これ……)

悪寒を覚えて身を竦ませる志穂に向けて、影の手がもう一本、また一本と伸びてくる。

まるで、志穂を闇の中へと引きずり込もうとするかのように。

「散れ」

低い、けれども鮮烈な男の声があたりに響いた。

と同時に手首を掴まれ、ぐいと引っ張られる。影に掴まれていた足からその手が剥がれた。

影たちはどこか口惜しそうにその手を彷徨わせてから、ふっと霧散するように消え失せた。

「忠告したはずだ、娘。あれらに近付いてはならぬと」

「あ……」

志穂を引き寄せたその男は、あの騎士のような風貌をした死霊だった。

「あ、ありがとう、ごさいます……」

まだ動揺の収まらない頭で、どうにか礼だけを述べると、騎士の霊は厳しげな表情のまま頷いて志穂から手を離れた。

「あれらは、死霊の成れの果て。……海のかなたに行けぬまま自身の形を失い、怨念そのものと成り果ててしまったモノたちだ。強い意志をもって拒まねば、怨念に取り込まれてしまう。心せよ、次も

こうして私がそなたを助けられるとは限らぬ」

どこか突き放したようにそう言うと、彼は踵を返した。

「娘よ、この城を離れられぬのなら、せめて強く心を持って。自分の身は自分で守ることだ」

そして、先刻と同じように、少女の前からさっさといなくなってしまう。

待って、と呼び止めようとして躊躇う。

そのまま消える騎士を見送ると、志穂はふと頂垂れた。

(私……何してるんだろう)

杖を取り返すこともできないまま、こんな城まで連れてこられて、ただ怯えて縮こまるだけで。

拳げ句に得体の知れない影に捕まって、人に助けられて。もしあの騎士がもう少し親切めいた態度を取っていてくれたら、きっと寄り纏っていただろう。今までラダに頼り切っていたのと同じように、自分が何も判断のできない迷子になったようで、ひどく情けない気持ちになる。

いや、実際にその通りなのだ。

故郷から遠く引き離され、見知らぬこの世界に霊として身を置いてから、もう幾日が経っただろう。

何も分からぬその最初からラダという青年の傍にいられたことが、どれだけ自分を孤独と寂しさから掬い上げてくれていたことか。彼という導き手を得られたことが、どれだけ幸運だったか。志穂は改めて実感した。

(……今までが、恵まれてたんだ)

ラダとの間に感じた彼との溝はそう簡単に埋められるものではないが、それでもこうして離ればなれになった今、彼の今までの優しさが一層懐かしく思える。

けれども、もういくら怖がっても寂しがっても慰めてくれる者はいない。親身になって助けてくれる者もない。あの騎士のような死霊の男性も、言うだけ言ってさっさとどこかへ消えてしまった。

見知らぬ世界で死霊として目覚めてから、ずっと傍にいてくれたラダはここにはいない。

志穂は目を伏せ、小さく拳を握りしめた。

この灰色の城の中で、本当に信用し、頼れるのは自分だけ。

これから何をなすべきか、どう気を付け行動するべきか、考えられるのも自分だけ。

自分自身だけなのだ。

第十話 誘い

とにもかくにも、リステスに怯えて流されるままではいけない。なんとかあの白い杖を取り戻して、ラダの元へと戻るべきだと、志穂は改めて自分に言い聞かせた。

リステスは恐ろしいが、それでも彼は生きた人間だ。ラダと違って死霊を操る術の心得はなく、あちらから死霊に触れる力も持たないようだった。あのロイという青年は胡散臭い人物だが、少なくとも王子に味方する者ではない。気にかかるのはバーサという侍女の女性で、彼女はリステスの意に反することを看過しそうにない。

いっそのこともう力づくで奪えるか試してみようか、霊体の身なら、その気になれば生前では考えられないくらいの怪力を出すこともできるかもしれない。などと考えながら志穂がリステスの前に戻ってみると、金髪の王子の傍にはもう白い杖はどこにも見当たらなかった。

「あの杖なら、秘密の場所に隠したよ」

見つけられるものなら見つけてごらん、と言いたげに笑うリステスを、志穂は睨み付けてから杖を探しに行った。

杖が一所に安置されて動いていないなら、志穂の移動可能範囲も一定のはずだ。見えない壁に囲まれた空間をぐるりと巡って、その中心部を探せば、すぐに見つけられるだろうと最初は思った。霊体の身にとっては、どんな壁も扉も無意味なのだから。

幸い、志穂が城の中の動ける範囲をうろついて回ることに対し、リステスとはやくく言わなかった。彼も騎士団の長、城の主としてやるべき仕事が多いらしく、いつまでも志穂にかまけてもらえないようだ。

しかし、探しはじめて間もなく楽観的な思いは消えてしまった。

城の建物の地下あたりにあるらしい、と見当を付けたまでは良かったが、貯蔵庫や物置として使われている地下をくまなく探すのは

存外手間がかかるということに気付いたのだ。

その上、

「殿下のご迷惑になることはしていませんね」

と、侍女のバーサが定期的に志穂の様子を見に来るのである。

「……い、いえ、何も」

志穂が首を横に振ると、バーサは胡乱げな目つきで少女を下ろす。そしてそのまま居心地の悪い沈黙をたつぷりと経た後、わざとらしく鼻を鳴らして去っていくのだ。貴方の考えは分かっていますよ、とでも言いたげに。

そのやり取りを繰り返すこと数日、合わせて十度目にもなると、杖を探し続ける気力も削がれる。

バーサが立ち去った後、志穂は深いため息をつかずにはいられなかった。普段は呼吸などしなくても平気なのに、ふとした折にこうして生きた人間のような仕草が出てしまうのは、志穂がまだ生前の肉体の感覚を忘れられずにいるからなのだろうか。

暗い貯蔵庫の隅にはあの『影』がうごめいていたが、騎士の忠告に従い、そちらには視線を向けない。

ふと地上へ続く階段から足音がして、志穂は顔を上げた。

階段から貯蔵庫に降りてきたのは、下働きらしい二人の男たちだった。彼らは運んできた箱を貯蔵庫に置くと、一息つくように座り込んだ。そしてだらけたように手近な箱に身を預け、

「聞いたか？ あの王子様、エテルベリで白昼堂々暗殺されかけたつてよ」

「ああ、聞いた聞いた」

貯蔵庫の隅に死霊の少女が佇んでいることにも気付かないまま、男たちはひそひそと噂話をしはじめた。

「騎士団にやられた村の生き残りだつてよ。確か、前にも似たような事件があつたよな」

「それなのに大した用心もせずにはふらふら出歩いて、また暗殺されかかっちゃう世話ないね。自分が命を狙われて当然の身分だつて、自

覚していないんだらうな。まあ剣の腕前だけは確からしいから、そう簡単には死なんだろうが」

「まっただ。それでなくても、日頃から何もないとこに一人で話しかけるような、頭のおかしい王子だったのに。あれが将来の国王かと思うと、ぞっとするね」

「は。心配はしなくても、あの王子が王様になることはないだろうさ」

男の一人が心底から馬鹿にしたように言った。そこには王子に対する敬意の念など欠片もない。

「じゃなきゃ、どうして大事な跡継ぎがこんな地方の城にいて、名ばかりの騎士どもを率いて、盗賊退治だの焼き討ちだのに精を出してるんだよ。王宮から追い出されたのさ、あの王子は」

「じゃあ誰が次の王なんだ？ 他に王子はいないんだろ？」

「姉君の王女様がいるさ。弟と違ってごく真つ当で聡明な貴婦人だつて聞いたぜ。女王でもなんでも、あれよりはずつとまじだと思っがね」

「確かにな」

もう一人の男は納得したように頷くと、

「……おっと、そろそろ行かねえと怒られるな」

と呟いて立ち上がった。

貯蔵庫を出て再び地上に戻っていく男たちを見送りながら、志穂は今しがた耳にした話を複雑な心持ちで思い返した。例えあのリステスが対象であつても、他人の陰口を聞くのはあまり気分の良いことではない。

だが、一方で、彼らの言っていることは間違っていない。そう感じる自分もいる。

リステスは恐ろしい。

彼は頭がおかしい。

彼は人の命を何とも思わない狂人で、志穂を殺した張本人だ。

(……でも)

先程の男たちが噂していた言葉。リステスが何もないとともに一人で話しかけていること。その点については、別に彼がおかしいわけではないのだ。普通の人間には見えなくても、確かに志穂は存在しているのだから。ラダのように周囲の目を意識しないのは常識な行為かもしれない。狂気の沙汰というほどではない。

もつともリステスは生きた人間と死霊の区別をあまりつけていないようだし、普通の人間には死霊が見えないということをやちゃんと理解しているかどうかは分からないが。

(……今は杖を探すことに集中しないと)

志穂は首を振り、どうでもいい思考に沈みかける自分を止めた。

いつまでも薄暗い地下に籠もっていても精神的に疲れるし、気力が削がれて捗るものも捗らない。関係のない物思いに沈みかけるのもきつとそのせいだ。

そう思い地上に出て、中庭を通りかかったところ、あのロイという赤茶けた髪青年と出くわしてしまった。

「よお、嬢ちゃん、探し物か？ 手伝ってやるうか」

ロイは以前と変わらず嫌な感じのする薄笑いを浮かべて、志穂を見下ろした。

正直に言つて、この青年とはあまり関わり合いになりたくなかった。本人の言によれば彼はかつて人殺しも辞さない盗賊だったというから、尚更だ。

志穂は小さく頭を下げると、

「ありがとうございます。でも、一人で大丈夫です」と素っ気ない返事を返した。

そして足早にロイの傍から離れようとしたのだが、その前に彼の瘦せた腕が志穂の行く手を遮った。

「おいおい、少しくらい話に付き合ってくれてもいいだろ。この城でまともに話せる奴は貴重なんだぜ？ 安心しろよ、別にとって喰

おうってわけじゃねえ」

これが生身の肉体を持つ相手なら目を閉じてすり抜けることもできただろうが、霊体同士ではそうはいかない。飛んで逃げるという選択肢もあったが、志穂はふと思いついた。嫌なものから逃げればかりでは、何の情報も得られない。

勇気を出して、志穂はロイの方へ向き直った。

「……あの。この城には、そんなに死霊が少ないんですか？」

「おう。霊もどきなら、そこら中にいやがるけどな。あいつらは話なんて通じねえし」

とロイは、中庭のそこかしこでうごめいているあの影たちを指し示した。

確かにあれらには、話が通じるほどの明確な意志や知性といったものは感じられない。

「オレが行ける範囲では、あの王子様にくっついてる侍女さんだろ、騎士のおっさんだろ、あと……」

ロイはいくつか志穂の知らない名も挙げたが、合わせても両手の指で数えられる程度しかないようだ。城中にいる影たちの数に比べると、確かに多くはない。

「まあそれくらいか。何人かはアンタも多分見たことはあるんじゃないか？」

「はい。騎士っていうのは、あの白い服に盾を持った、顎髭の……」
「そうそう、そいつ。よくは知らねえが、昔この城に住んでた正真正銘の騎士らしいぜ。神出鬼没で融通の利かねえ、頭の固いおっさんだけだよ。まあ、あの聖ユオル騎士団の騎士様がたよりはよっぽど立派な騎士様だったんだろうよ」

ロイは皮肉げな口調で言いながら、中庭で鍛錬をしている人々の方へと視線を移した。

そこでは今日も、粗野な男たちが汗を流している。戦士と呼ぶならまだしも、やはり、あまり騎士には見えない。特にあの騎士の死霊と比べると雲泥の差がある。

「……あの人たち、やっぱり騎士団の人なんですか？」

「そうだけ？ 栄えある聖ユオル騎士団の代理騎士様がただよ」

「代理……？」

眉をひそめる志穂に対し、ロイは目を細める。

「そう、代理。本来騎士団に所属する貴族の坊ちゃんたちの代わりの傭兵たちさ」

「傭兵……の人が、騎士団に？ そういうことって、よくあるんですか」

「さあな。ただ、聖ユオル騎士団がこうも傭兵の巣窟になったのは、王子様が団長になった後だそうだけ。以前の聖ユオル騎士団は、威張り散らした貴族の子弟の吹き溜まりで、ろくな見回りもしなければ訓練もしないような……今とは違う意味で名ばかりの集団だったんだってよ。当然、盗賊団となんて戦いに行くわけがねえ」

あの頃は楽だった、とロイは嘆息する。何が楽だったのか、志穂はあえて聞かなかった。

二年ほど前、王子リステスが十四歳で騎士団長に就任した時も、あくまで名目上の役職だと思われていたらしい。

だが彼には、騎士団長として真面目に働く意欲があった。騎士団に所属する貴族の子弟が『使えない』ことが分かった、リステスは彼らに軍役の代わりと言って金を払わせ、そしてその金で、代理として働く傭兵を雇わせたのだという。

本来騎士の称号を持つ人間の代わりの、実働部隊として雇われた傭兵。

現在、聖ユオル騎士団の実働部隊として各地で非道を働いているのは、そういう種類の人々らしい。

「それも食い扶持を求めてそこらをつろついているような、盗賊紛いのただの傭兵じゃないぜ。……あのお坊ちゃんに変に潔癖なところがあるみてえでな、部下が必要以上に略奪をするのも女を攫うのも許さなかった。自分は平然と皆殺しを命じるくせにな」

ロイは呆れたように首を振り、その結果、と続けた。

「今騎士団に集まっているのは、略奪にも女にもとんと興味がない食うより寝るより人殺しが大好きな、王子様と同じ類の頭のおかしい連中ってえわけだ。笑える話だろ？」

口元に嘲笑を浮かべる青年に対し、志穂は少しも固い表情を動かすことができなかった。

交錯する悲鳴と怒号、嗅覚を麻痺させるほどの血の臭い。赤く染まり倒れ伏す老人と女性たちの姿が心の中に浮かんで消える。

唇を引き結んだままの少女の顔を、ロイは面白がるように覗き込んだ。

「もちろん、そんな連中を率いて、命令を出しているのがあの王子様だ。狂った頭で何を考えてるんだか知らねえけどな。あいつがいなけりゃ、騎士団がこうも人殺し集団として名を馳せることはなかった。オレもアンタも、きつと死なずに済んださ」

ラダよりも高く、リステスよりも濁った声で、青年は饒舌に喋り続ける。

「せめて激しい戦争のあった時代に生まれれば、誰より人殺しの好きな王子様だって英雄にでもなれたんだろうがよ。はっ、どうせあいつは王にもなれずに惨めに落ちぶれる。もしかしたら救いようのない狂人として幽閉されるかもな」

脳裏に次の王位について噂していた男たちの言葉が蘇る。

「だから、そんな奴　　いっそのこと今死んじまった方がいいよな？」

不穏な言葉に、志穂ははっとしてロイを見上げた。

青年の口元が吊り上がる。見透かすような、嫌な表情だった。

「なあ、シホの嬢ちゃんよ。アンタはあの王子様が憎くはねえのか？」
あいつに同じ痛みを味わわせてやりたいって、そう思った

ことは？」

「……それは……」

とっさに否定しようとして、志穂はそれ以上、言葉を続けられなかった。

憎くない、といえは嘘になるからだ。

恐怖。嫌悪。怒りと憎しみ。胸に渦巻くこの感情は確かに、リステスに向けられたもの。

どうして自分が死ななければならなかったのか。

どうして自分を殺したあの少年は、今も無邪気な笑顔を浮かべているのか。

そんな思いがこの胸に秘められていないとは、言い切れなかった。そんな少女を見下ろして薄笑いを浮かべると、ロイは軽く背を曲げてその耳元に口を寄せた。

「なあに、簡単さ。他の兵士どもにはオレたちの姿は見えねえんだから」

ロイの囁きは、まるで悪魔の誘いのようだった。

「ちよいとそこから刃物か何かを拝借して、宙に浮いて、王子様の頭上で手放せばいいんだ。階段や城壁から突き落としてもいいな。それくらいなら嬢ちゃんにだってできるだろ？」

耳を塞ぎ、先日のように逃げ出したくなる衝動を堪え、志穂は口を睨んだ。

「……あなたはそうしないんですか？」

「あいにくオレはあの侍女さんに睨まれてるし、王子様にも好かれちゃいねえからな。そりゃあ何度も殺そうとしたけどよ、あの金髪野郎、へらへらした顔してことごとく回避しやがる」

「……私も、あの侍女の人には嫌われてると思います」

「けど王子様には気に入られてるだろ。きっとアンタなら油断させられるぜ」

志穂はこの盗賊の青年が妙に親しげに話しかけてきた理由をようやく悟った。

要するに、ロイは自分の代わりにリステスを殺してくれる人物を求めていたのだ。そのためにこうして志穂をそそのかして、利用しようとしている。

『 生者に無闇に干渉することは、人に躊躇いなく害を為す悪霊への近道』

ふと、ジエフから伝えられた言葉を思い出した。

リステスを殺してしまえば、志穂は悪霊となり、ラダにとって退治すべき存在となるだろう。

そうなれば、ラダはきつと躊躇わないだろう。彼は、そういう青年だ。

そしてカレンのように沖つ国へと船出させられる。

この世には何の痕跡も残さずに消え失せる。

(そんなの、嫌)

嫌だ、と志穂は自分に言い聞かせた。

例え相手が人殺しだとしても、憎しみに駆られて殺してしまえばきつと同じ穴の貉だ。

ロイの言葉に耳を貸しても、彼に利用されるだけ利用されて終わるに決まってる。

「……でき、ません」

志穂は首を横に振り、ロイの傍から数歩後ずさって離れた。

「私……そんなことより、やることを、やらないと。今のままだと、狭い範囲にしか動けないから」

「ああ、探し物か」

ロイは少しつまらなそうに呟いたが、志穂が離れるのを止めようとはしなかった。

それから彼は少し考えるような素振りを見せた後、

「嬢ちゃん、あっちにある礼拝堂の地下はもう調べたか？」

「まだ、だと思えます」

「なら、調べてみるよ。聖ユオルの聖遺物が保管されてるとかいう、曰く付きの地下室があるぜ」

やや投げやりな口調だったが、嘘をついているようには見られない。

「ありがとうございます。それじゃあ、今から探してみます」
志穂は深く頭を下げると、足早に踵を返して中庭から立ち去った。
少女の後ろ姿を見送る青年の顔が、ひどく歪んでいることには気
付かぬまま。

その礼拝堂は、中庭からも程近く、城の建物の陰にひっそりと佇
んでいた。

中に人気はなかった。どうやら、今のこの城の住人たちにとって
ここは取り立てて興味を惹くところではないらしい。それを示すよ
うに、木彫りの長椅子や奥にある祭壇の上には埃が降り積もってい
る。

壁の一面に描かれた壁画は、例の聖ユオルの伝説を題材にしたも
のだろうか。倒れ伏す竜と、ひれ伏す民衆たちの間に挟まれて、若
い男女が手と手を取り合い見つめ合っていた。
床にも埃が積もっていたが、その白い層にはうっすらと足跡がつ
いている。

志穂が埃っぽい礼拝堂の中でどれだけ動いても、積もった埃が舞
い上がることはなく、意識しなければ足跡もつかない。その事実が
少し胸に染みて痛んだ。

目を瞑って礼拝堂の石床の下へ抜けると、ロイの言った通り、小
さな地下室があった。

リステスの部屋よりもずっと手狭で、三面を石壁に囲まれている。
残る一面には鉄の格子が嵌められていて、その向こうに人一人通る
のがやつとの狭さの石段が見えた。その他に外部に繋がる窓や通気
口などは見当たらない。やはり埃っぽく、どこか息の詰まりそうな
小部屋だった。

そんな部屋の中央に、大理石のような石でつくられた円形状の祭
壇があり、その上に絹の布がかけられた箱が置かれていた。この箱
も石造のようだ。

あの中に、探す杖があるのだろうか。

根拠はないが、そうに違いないという奇妙な確信も心のどこかにあった。もし箱に鍵がかかっていれば、鍵を探しに行かなければならないが、まずは祭壇に近付いて確かめなければ。

志穂が祭壇に近付き、箱にかけられた絹の布を退けようとしたとき、異変が起こった。

石でできた祭壇の下部から、靄が染み出すように現れたもの。

志穂は、先日のことを思い出してとっさに跳び退った。

祭壇から離れた少女を追うように、祭壇の内側からどんどん靄が染み出して、狭い部屋の空間を占めていく。形のないそれは、城内を彷徨っている影たちよりも輪郭がさらにぼやけ、手足すらも見当たらない。そのくせ色だけは濃く、見る者を引きずり込んでしまいうような、深い闇に覆われている。

それは、人の影というより、とぐろを巻いて鎌首をもたげる蛇に似ていた。

(駄目)

志穂はほとんど反射的にそう思った。

(これは、駄目。近付いちゃいけないモノだ)

影の蛇は、巨大な頭を揺らしながら、部屋の隅に下がった志穂に視線を向けた。正確には影に目はないが、そう感じた。

けれども近付くような素振りはない。どこか窺うように、ただ志穂を見つめている。

とっさに志穂は目を閉じた。

影を注視してはいけない、とあの騎士に言われた言葉を思い出したのだ。

けれども闇に塗り潰された視界の中で、恐ろしい何かが近くにいるのにただじつとしていることには堪えきれず、志穂はしばらくしてからそつと目を開けた。

すると、もう影の蛇は姿を消していた。

もう、今の今までそこに影がいたという痕跡は地下室のどこにも

ない。

石の祭壇と絹布をかけられた箱が、何事もなかったかのように静かにそこにある。

蛇は現れただけですぐに消えてしまった。もう一度祭壇に近付き、箱を確かめても構わないのではないか。そうは思うものの、志穂はしばらくの間、部屋の片隅でじつと祭壇を見つめることしかできなかった。

結局、志穂はもう一度祭壇に近付くことなく地下室を出た。

よく見れば、地下室の入り口の鉄格子にも鍵がかかっている。こちらの鍵も探さなければ杖を地下室から出すことはできないという事実気付いたのだ。

肩を落としながら格子をすり抜け、今度は階段を使って上まで戻る。礼拝堂の奥の祭壇の陰にある隠し扉から出てくると、先程まで誰もいなかった礼拝堂の内部に人の姿を見つけた。

その人物は壁画の前に佇み、手を取り合い見つめ合う男女の絵を見上げている。

どこか遠い目をしたその精悍な横顔を見て、志穂はふと彼が思ったよりも若いのではないかと気付いた。ロイはおっさんと呼んでは、蓄えた顎髭は立派だが、それをなくせば、二九歳で死んだというジエフと大して変わらない年頃にも見える。

志穂が彼に声をかけるよりも前に、彼の方が志穂に気付いて振り返った。

「……そなた、地下にいたのか？」

怪訝そうに問われる。

影のことについて少し教えてくれたこの騎士の男性なら、先程見たあれのことも何か知っているかもしれない。そう思い、志穂が地下の祭壇で蛇のような影を見たことを伝えると、彼は険しい顔になった。

「……その祭壇は、この城においても最も古き井戸を封じたもの。

我らのような死者にとっては、人を食らう大蛇のごときもの……。城内を彷徨う怨念の影らの巢穴、あるいは母体だ」

兜の陰から覗く青い目が、鋭く志穂を見据えた。

「迂闊に近寄れば、喰われる。そして奴らの一部と成り果てるだろう。二度と近付かぬ方が良い」

志穂は首を横に振った。

「……私、杖を探さなくちゃいけないんです。私の依り代で……あの人の大切な物なんです」

だから箱の中身を確かめたかったのだと、そう言つと、騎士は少し考えてから重々しく言つた。

「確かに、この礼拝堂には最近人が訪れた形跡があるようだが」

「なら、やっぱり……」

「しかしその箱は、元々、ギイ・ユオルがかつて挑んだ竜の鱗を収めているものだ。古井戸と共に封印されていると言つてもいい。その箱をみだりに開け、中に別の物を入れるなど……」

予想もしなかった言葉に、志穂は目を見開いた。

「竜つて……本当にいるんですか？」

「かつては、いた」

騎士は、ラダと同じように過去形で言つた。

「……この目で見たことも二度ある。一度は肉体を通し、二度目は魂を通して。もう遙かに遠い昔……アーフェルという国が生まれたばかりの頃のことだ」

ますます驚いて騎士を見つめる。

アーフェルの建国が正確にいつのことは知らないが、少なくとも何百年も前の昔だろう。

ジェフは十七年、二九歳の見た目のままで 水煙亭 にいた。なら、彼と同じ年頃に見えるこの騎士は、一体いつから死霊として存在しているのだろう。

「でも、今はもういない……つてこと、ですよ」

「……異国の娘、そなたは竜を求める者か？」

静かな口調で問われ、志穂はまた首を振った。

「私は、竜のことはよく知りません。……ただ、私の知っている人は、探しているようなんです」
竜を。

あるいは、死者を沖つ国へと運ぶ竜の船という存在を。

それを聞いた騎士はしばらく自身の記憶を探るように顎髭に手をやっていたが、やがて、

「……以前にも、竜という存在を探し求める者を見たことがある」と、低い声で言う。そして、さらに志穂をはっとさせる言葉を続けた。

「彼は 死の民 と呼ばれていた。……死霊を操る力を持ち、かつてはアーフェルの西の海岸に暮らしていたという、古い民の末裔だった」

「え……その人は……」

「死霊を操り、罪なき民を害したと謂われなき罪を着せられ、この城で処刑された」

今から数十年前のことだ、と騎士は付け加える。

それほど昔の話なら、ラダと直接関係があるわけではないのだろう。

だが あの老婆はラダを 死の民 の生き残りと呼び、ラダはその言葉に激怒していた。

（同じ一族……同じ、目的……？ 先祖代々の悲願だとか？ でも、それなら……）

志穂は背筋が寒くなるような思いを覚えた。ラダの同族がかつて死霊を操った罪で処刑されたなら、死霊術士であるラダもまた、罪を着せられてもおかしくない身の上である、ということではないだろうか。

ラダが人に無愛想な態度を取る理由が、少しだけ見えたような気がした。

志穂と共にいた時、あれほど人目を気にしていたことも。

リステスがあれほど奇矯な言動を取っても、表立つては誰も何も言わないのは、きつと彼が王子という高い身分にあるからだ。その彼ですら陰口を叩かれるのに、ましてやラダは流浪の死霊術士だ。

思わずうつむいて考え込んでしまった志穂に対し、騎士は幾分柔らかな声で話題を戻した。

「……娘。この地下室と箱の鍵は、代々の城主、つまり聖ユオル騎士団の長だけが持つことを許されているはずだ。もし箱にそなたの依り代が隠されているなら、まずは鍵を入手する手段を考えるべきだろう。無論、かの王子と話し合う手もあるうが」

薄々気付いてはいたが、志穂は内心でため息をつかずにはいられなかった。

例えあの箱の中に杖が隠されているのだとしても、鍵がなければ開けられない。それに箱から杖を取り出せても、地下室と階段の間には鉄格子がある。結局、どうあっても、またリステスの傍へ行かなくてはならないのだ。見つけてごらんと言いたげに笑っていたリステスが、大人しく鍵を渡してくれるものか。

だが、いつまでも怖じけていても仕方がない。

「分かりました。ありがとうございます」

とりあえず志穂はそう言い、騎士に頭を下げた。

騎士は頷くと、用は済んだとばかりに以前のようにさっと踵を返して去ろうとしたようだが、ふと振り向いてこう訊ねた。

「……そなた、自力でこの地下室を見つけ出したのか？」

「え？ いえ……ロイという人に教えてもらっただけです」

少女の答えは、騎士にとって何か気に入らないものであったらしい。

彼は眉間に皺を寄せると、頭を振った。

「……あの者の言うことには、あまり耳を傾けない方がいい」

端的にそう言い残して、騎士は今度こそ去っていった。

間話

気を緩めると途端に襲い来る吐き気と戦いながら、青年は包丁で玉葱を刻んでいた。

別に、玉葱が吐くほど嫌いだというわけではない。

青年の久しく涸れた涙腺の代わりに、刺激が吐き気となって現れているというわけでもない。

「できたか、新人」

はいと返事をし、刻んだ玉葱でいっぱいになった器を差し出すと、ヴィルフオート城の厨房を取り仕切る料理人の男は、満足げに頷いた。

「なかなか早いじゃねえか。最近はどうくせえ上にすぐ辞める奴ばかりだがよ、お前は気合い入れて頑張れよ」

そう言うと、料理人は玉葱の器を火にかけられた鍋のところへ持っていく。

料理が一つ出来上がるのをぼんやり眺めている暇はない。さつそく次の玉葱に取りかかりながら、確かにこの城は随分と人手不足らしい、と青年は考えた。

ほとんど通りすがりの男を、こうして城の厨房の下働きに採用するくらいなのだから。

この城に忍び込むにあたり、ケル婆に頼んで、適当な農村で生まれ育ったことを証明する文書を用意してもらったとはいえ、それでも城の門を叩いたその日に採用されるとは思っていなかった。

(すぐ辞める、と言っていたが……)

それは、この城の騎士団が悪評に塗れているせいだろうか。

無論、そうなのだろう。血に塗れた人間が大勢いる傍で働くのに足るほどこの給金は良くないし、仕事が楽なわけでもない。まして、この地方の民にとっては、いつ自分の村が騎士団の標的になるか分かったものではないのだから。

だが、それだけだろうか。

あるいは この城が極めて特殊なせいもあるのだろうか。

部屋の隅にうごめいている影を横目に見ながら、ラダは唇を噛みしめて吐き気を抑え込んだ。そして、玉葱を素早く切り刻んでいった。

厨房が一段落ついたのは、日が落ちて夜も深まった頃だ。

青年は下働きの寢床として宛がわれた大部屋をそつと抜け出し、人気のない丘の斜面で考え事をしていた。

ひたすら下拵えと使い走りに終始した一日だったが、厨房の下働きというのはそんなものだ。昔、路銀を稼ぐために似たような仕事をやったことがあるが、その時も料理人にこき使われた覚えがある。悪逆非道、行く先々を焼き払い皆殺しにし、灰燼か死体の山だけ残していくと評判の聖ユオル騎士団も、食生活の面では普通の人間と何ら変わらないようだ。

(だが……この城……この空気は、堪え難い)

怨念の影が目に見えるほどに満ちている土地は、墓地や古戦場のような特殊な土地であってもそうは存在しない。

ラダがこれほど怨念の渦巻く場所を見たのは、数年前に王都を訪れた時以来のことだ。

都の外れにある王宮、あの壮麗な白壁を外から一望しただけで分かるほど、宮殿は怨念の巣窟だった。確かあの時は堪えきれず早々に王都の外へ出てしまい、以来、ラダは王都へ近付こうともしていない。

それよりは多少ましとはいえ、この城もまた怨念の巣窟であることには変わらない。

靈感のない普通人ならまだしも、多少の靈感を持つ者でこの城に長くいられるのは、よほど鈍感な者か でなければ怨念を怨念とも感じないような種類の人間だけだろう。

形を失い影となつた人々の成れの果てを、ラダ個人の力で船出させることは叶わない。

杖の力を通して、限りなく困難だろう。

本来あれらは、人の手には余るモノなのだ。

(シホは大丈夫だろうか)

ラダは、母の形見の杖に取り憑いた少女のことを思った。

杖は王子リステスによつて持ち去られたという。リステスがまだ杖を所有しているなら、志穂もまたこの城のどこかにいるはずだ。

もしかしたらリステス本人の傍に。

頭を巡らしても見知つた姿が見えないこと。

呼び掛ければ応えてくれる者がすぐ傍にいないこと。

何かと問いたがる少女の声に耳を傾けられないこと。

少女とこうして何日か離れてみてはじめて、ラダはそれらのことに物足りなさを感じる自分に気がついた。それは久しく感じたことのなかつた、寂しさという感情によく似ていた。

(……駄目だな。俺もまだ未熟者らしい)

ラダは内心に苦笑を浮かべて首を振つた。

誰かに執着心を持つことは、青年にとつて許されない。だから、いくら 水煙亭 の居心地が良くても長居はしなかつたし、誰か特定の者を旅の道連れにしようとしてもしなかつた。

まれびとの少女との契約は、海のかなたのあの 果て まで。

そこでどんな結末が待ち受けていたとしても、旅は終わる。必ず。幸い、ラダは容易く城壁の内側に入り込むことができた。使い走りの際などに折を見て城の奥へ紛れ込むこともできるだろう。なるべく早く杖を取り返し、この城から退散できればいいのだが。

そんなことを考える青年の視線の先、少し離れた斜面に古びた石垣が見える。かなり古い時代の建造物の名残のようだ。城壁と堀に囲まれた丘の城の中で、そこだけがぼつんと取り残されたように暗く静かな野原になっていた。

近付いたラダの目に映る、草に埋もれて崩れかけた石垣は、しか

し、ひどく禍々しく、より一層気分を悪化させる空気に包まれている。あの石垣の周囲には、他よりもかなり濃く怨念の影がうごめいているようだ。もしかしたら、あの怨念の影たちは石垣が築かれた時代に由来するのかもしれない。

(だとしたら、この城に巣くう怨念の根はかなり深い……)

そんな石垣の陰に、人の姿が見えることにふと気付いて、ラダははっと目を見開いた。

死霊ではない。生きた人間　それも少年だ。

月明かりにきらめく金髪が、ここからでも視認できる。

少年もまた、ラダがそちらを見上げていることに気付いたらしい。彼はうごめく影を気にする素振りもなく、身軽な動作で石垣によじ上ると、ラダを見下ろした。

「ねえ」

と、少年はよく通る声で言った。

「君、どこかで会ったかな」

「　　いいえ」

表情を一切動かさず、青年は首を横に振った。

それからその場に膝をつき、頭を垂れ、厨房に雇われたばかりの下働きだと小声で答える。吐き気の波が胸元にまで迫り上がってきていたが、必死に堪えた。

ふうんと興味もなさげに頷くと、少年は石垣をぐるりと見回した。

「知ってる？　この石垣は、この丘に最初に人が住み始めた頃の名残なんだって」

青年の方を見ることなく、まるで独り言のように淡々と呟く。

「それでね、その頃は、まだ竜の船が空を飛んでいたんだってさ」

ラダは頭を垂れたまま、唇の端を噛みしめる。

「お伽噺だと思う？　でも、竜は本当にいるんだよ。僕はそれを知ってるんだ」

竜殺しの末裔は、不思議な確信をもった声でそう言い切った。

彼は何かを知っている。ふとラダは思った。杖を志穂ごと持ち去ったのも、何らかの意志があつてのことかもしれない。それが王子本人の意志なのか、それとも別の意志が介在しているかは分からないが。

「……ああ、もう行かなきゃ。じゃあね、お仕事頑張つて」

そう言つて石垣から飛び下りると、少年は丘の頂上の住み処へと戻つていった。頭を垂れる黒髪の青年に、ちらりと一瞥だけを残して。

少年の気配が完全に消えたと分かると、ラダは深く息を吐いて立ち上がった。

そこで、彼は自らの拳が固く握りしめられていたことを自覚した。青白い爪の先が白い手のひらに食い込んでいたが、血の気の薄い肌の表面に跡はほとんど見えなかった。

リステス・ギイ・アーフェル。

思いがけず出会つた、あの少年の名を口の中で呟く。

おそらく志穂を殺した少年。

山の民 を滅ぼした聖ユオル騎士団の長。

そして竜退治の英雄王の血を引く、アーフェル王家の王子。

(……やはり、俺はまだ、未熟だ)

ラダはその一言で、胸の内側で荒れ狂いかけた感情に無理矢理蓋をした。

憎悪も怒りも、彼にとっては捨てるべき執着だった。

第十一話 うつめく影

志穂がリステスがいると思われる彼の部屋へ行くと、一体何の用かとはかりに、侍女の死霊バーサがじろりと彼女を見下ろしてきた。冷ややかで暖かみの欠片もない視線にたじろぎながらも、志穂はなんとか口を開いた。

「……王子と話がしたいんです」
「殿下と、ですか」

バーサは怪訝そうに眉をひそめた。志穂は今までリステスに近づくことを避けていたのだから、怪しむのも無理はない。

「先日も言いましたが、殿下のご迷惑になるような真似はなりません。殿下が許しても私は見過ごしませんよ」

「し、しません。話すだけです」

話し合いが不調に終わった場合は別の選択肢を取ることも考えられるが、志穂としてもあまり乱暴な手段を取るのは気が進まない。彼女はしばらくじつと志穂を見つめた後で、小さく息を吐いた。

「……リステス殿下は騎士団の業務について打ち合わせ中です。また後でお出でなさい」

と、バーサが言ったちょうどそのとき、部屋の扉が開き、中から男が出てきた。

鎧に身を固めた、年嵩の男だ。おそらくは彼も本来の騎士ではなく、傭兵なのだろう。彼の横顔には無数の傷跡が見えた。

部屋の中に向かって存外丁寧に礼をしながら去ろうとする男に向かい、

「あ、そうそう。尋問用に一人だけ生かして、あとはいつも通り皆殺しでいいからね」

と、部屋の中からリステスが朗らかにそう言った。あの無邪気で美しい笑顔のままです。

「はっ。畏まりました」

男が短く応え、今度こそ去っていく。

志穂はしばらく立ち尽くしていたが、やがて意を決して部屋に踏み込み、リステスに近付いた。バーサは引き止めてこなかった。

リステスの方も志穂に気付き、

「やあ、シホ。会いに来てくれたの?」

と、椅子に座ったまま嬉しそうに言った。相変わらず見た目だけは綺麗なその顔を見下ろし、

「……また……」

また、どこかの村を焼き討ちに行くのか。そう問おうとして、それ以上声が出なかった。

一瞬黙り込んでしまった志穂をどう解釈したのか、リステスは首を振った。

「ああ、大丈夫。僕はここにいるよ。今回はね、ある道の途中に出るっていう盗賊を退治するだけだから。僕がわざわざ出向かなくても、一部隊を派遣すれば十分みたいなんだ」

今までで一番騎士団長らしい言葉を聞いた気がする。この間リステスを暗殺しようとした男の村のように、大した罪もなさそうな人々が殺されるわけではないらしいと知って、志穂は少し安堵した。

とはいえ、また騎士団の手によって死ぬ人間が増えるらしいことに代わりはない。

いくらアーフェルが現代日本とはまったく違う国だとは言っても、裁判所くらいあるだろうし、尋問用に一人だけ生かすことが可能なら、他の盗賊たちをその場で皆殺しにする必要はどこにあるのだろう、とも思う。

だが、そんなことを言っただけで声高にリステスを非難することの無意味さも分かる。

「……この人たちが、本物の騎士じゃない、傭兵だって、本当?」
代わりに志穂は、ロイに聞いた話を口にした。

「うん、そうだよ。でもみんな、とっても強いから安心して」
盗賊なんて相手にもならないからね、とリステスは少しずれたこ

とを言う。

「強いのはともかく……それじゃあ騎士団じゃなくて、傭兵隊じゃないの？」

「聖ユオル騎士団は、神と聖者を信じ、王に忠誠を誓い、国を守るために戦わなきゃいけない集団だからね。今、僕の下で働いてくれる彼らには、その仕事をこなすだけの力があって、きちんと命令にも従ってくれる。騎士の称号は持たなくても、みんな立派な騎士団の一員だよ」

志穂はリステスをまじまじと見つめた。

罪もない人々を殺し村を焼き払うような騎士団のどこが立派なのかといった点を度外視すれば、今の少年の言葉は、部下の身分を気にせず実力をきちんと評価して信頼する、極めて真つ当な上司の言葉のようだったからだ。

「……国を守るため……」

「街道を荒らす盗賊を退治したり、不平分子を討伐して反乱の芽を潰したり、結構忙しいんだよ。一度国境にも出動したことがあるけど、その時は何もなかったなあ」

志穂はリステスという少年のことがますます分からなくなった。

幼い少年のように無邪気で、残酷な言葉を平然と吐いたかと思えば、真面目ぶった言葉をこうして口にしたりする。

考えれば、リステスは二年も騎士団長の座にいるのだ。その間一度も更迭されたりしていないのなら、民に忌み嫌われる騎士団の行動は、少なくともアーフェルという国の偉い人たちにとっては問題にならないこと。あるいは一定の評価を受けていることなのかもしれない。

リステス本人も言っていたではないか。山の民の里を襲ったのは、王の命令だったと。

では何故、王は、辺境の山に長年隠れ住んでいたという彼らを今になって滅ぼすように命じたのだろう。

今更のように、志穂はそんな疑問を覚えた。

「ところで、シホ。僕に何か話があるんじゃないの？」

リステスの方からそう話を振ってきた。

「どんな言葉を選ぶべきか、少し迷った末、志穂は直球で訊ねるところにした。」

「……あの礼拝堂の地下のことなんだけど」

と、例の祭壇と箱のことに触れると、

「なんだ、もう見つけちゃったんだ」

王子はごまかすこともせずに残念そうに言った。

「うん、あの杖はあそこの箱に隠したよ。箱と地下室の鍵も僕が持つてる」

「じゃあ」

「別に、鍵くらい渡してもいいけどね。シホが危ないと思うよ」

騎士に言われたのと似たような言葉に志穂は眉をひそめた。リステスなら、そこら中にいる怨念の影が見えていても、そしてそれらを気に留めることなく過ごせたとしてもおかしくはないが、あの祭壇で見た影の蛇のことも彼は知っているのだろうか。

生身の人間であるリステスは、実体のない怨念の影など問題にもならないのかもしれない。けれどもあれが死者にとって危険な存在だと知った上で、あの箱を杖の収納場所を選んだのだとしたら、随分意地の悪い話である。

「もつずっと昔、この城の建物や城壁や堀ができるよりも前にね。」

この土地で大勢殺されたんだって。死体の多くはあの祭壇の下の古井戸に放り込まれて、埋め立てられたって」

ぞつとするような話を、リステスは明るい口調で言った。

「それ以来あそこは『彼ら』の一番の住み処なんだ。その上に祭壇を作って竜の鱗なんて置いたから、尚更さ」

何が尚更なのかよく分からない。

「……でも、私は……」

「そんなに杖を取り戻したいの？」

当たり前だという気持ちを含めて、志穂は首を縦に振った。

するとリステスは少し考える素振りを見せてから、思いついたようにぼんと手を叩いた。

「じゃあ、しばらく君の話の話を聞かせてよ。いつも僕ばかり喋って、君のことはあんまり聞かせてくれないもんね」

どうせまた笑顔で約束を破られるに決まっているとは思ったが、志穂は断らなかつた。

リステスは結構な気分屋でもあるようだ。彼を説得するにせよ、もう少し乱暴な手段に訴えるにせよ、機嫌を取るのに越したことはない、と打算的に考えることにする。

「ねえ。君の故郷はどこなところ？」

「……ごく普通の、平和な田舎の町だったよ」

「みんな君みたいに黒髪で黒い目なの？」

「染めたりする人もいるけど、基本的にはみんな黒髪」

「それじゃあ、見分けが付かなくなりそうだね」

「分かるよ。顔とか髪型とか、人によって違うでしょう」

ぼつりぼつりと答えながら、慣れとは不思議なものだ、と志穂は思った。

最初はリステスの顔を見るだけで恐慌に陥りそうだったのに、今はどうにか平静を保つことができる。もちろん今でも恐ろしいことは恐ろしい。だが顔をあまり注視せず、あの時の恐怖を努めて思い出さないようにすれば、こうして曲がりなりにも会話を成立させられる。

思えばラダは、志穂の生前についてほとんど訊ねてこなかつた。

『まれびと』の世界での死後の観念について話したことはあるが、せいぜいその程度だ。

「君は故郷でどんなことをしていたの？」

「学校に行つた」

「学校？ 刺繍を習つたり詩を習つたりするの？」

「違うよ。裁縫や音楽も少しは習うけど……読み書きや計算、国の歴史や社会についてとか、地理とか……あと、ええと、とにかく色

々やらなくちゃいけないんだから」

「女の子が？」

「……私の国では、男の子も女の子もみんな学校に行かなくちゃいけないものなの」

「ふうん、変なの。勉強する女の子なんて、姉上とその周りにしかないと思ってたよ。シホは随分遠い国から来たんだね」

「……うん、まあ、すごく遠いと思うよ」

「ねえ、なら、シホは海を見たことはある？」

「あるよ。私の国は海に囲まれてたから」

「へえ。海って青くて、透き通ってて、広くて、塩辛くて、魚がいっぱいいるんだよね？」

「広いし、塩辛いし、魚もいるよ。青くて透き通ってるかどうかは、……場所による、と思うけど」

彼の絶え間ない質問に対し、どうにか当たり障りのない答えを返そうとしているうちに、志穂はふと、自分の中の故郷にまつわる記憶の一部が奇妙に曖昧模糊としていることに気が付いた。

日本。地球。志穂が生まれ育った世界。そこから遠ざかってもう何日が経ったのか。

だが、もう何ヶ月も何年も経ったというわけではないはずなのに、親はもちろん、小学校からの付き合いの友達のこととはまだよく覚えてる。

中学の今のクラスメイト、学校の担任や隣近所の住人、毎日のように顔を合わせていた人々のこともまだ思い出せる。けれども、年に何度か会うだけの親戚たち、さして親しくもない別のクラスの同級生、委員会の先輩後輩、彼らの顔がよく思い出せない。

結構好きだったアイドルの顔や歌声はどんなだったろう。

こちらに来る前までやってきた人気ドラマの主演は誰だったか。誕生日にはいつもケーキを買ってもらっていたことは覚えていても、行きつけのケーキ店の名前は少しも浮かばない。

無論、記憶は薄れるものだ。何日も日本とは違う世界にいれば、

日本での記憶が少しばかり薄れたって仕方のないことだとも思う。
だが　　なんだか、ひどく怖かった。

（元の世界で生きていた時のこと、すべて忘れてしまったら、私は
どうなるんだろう……）

自分が生きていた頃の記憶。元の世界の記憶。それは帰りたいと
いう執着心の源のはずだ。

それをすべて失ったとき、志穂は、岸边志穂という少女の形すら、
死霊という今の在り方すら保てなくなるのでないだろうか。

「ねえ、シホはちつとも僕を名前と呼んでくれないね」

ふとリステスが上げた不満げな声で、志穂は我に返った。

ちらりと見上げた少年は端整な顔でわざとらしく口を尖らせてい
る。

「……名前なら、いくらでもあのバーサさんに呼んでもらえるでし
ょう？」

「駄目だよ。僕は君にリステスって呼んでほしいんだ。　　それに、

バーサの言うリステスはね、本当は僕じゃないんだよ」

「え？」

虚を突かれて、志穂は首を傾げた。

「百年くらい前の聖ユオル騎士団の長は、僕と同じ、リステスって
いう名前の王子だったんだ。隣国との戦争で活躍した英雄なんだけ
どね。バーサはその人と僕が同じ人間だと思ってるんだ」

リステスは何でもないことのように、淡々と言った。

志穂は返す言葉が思いつかず、ただ小さく息を呑む。バーサは志
穂に対して冷ややかだったが、それでも理性的な自意識を保ってい
る女性のように見えたのだが。

死霊は見たいものを見、聞きたいものを聞くものだ　　いつかラ
ダに聞いた言葉が頭を掠めた。

「不思議だね。若い頃の肖像画を王宮で見たことがあるけど、僕と
は多少似てるってだけなのに」

少し　　ほんの少しばかりではあるが、リステスの整った横顔に

寂しげな表情が浮かんで消える。

リステスは確かに十六歳の少年なのだと、志穂はこの時に初めて実感した気がした。

……自分の理解できない存在を、頭がおかしい、狂人だと決めつけておしまいにすることは簡単だ。

けれど、死者にも心があるように、どんな人間にも心はあるのだ。例え、自分とはまるで価値観が違うとしても。

そのとき、不意に、志穂は気が付いた。

気が付いてしまった。

リステスの背後、かなり頑丈そうな鎧戸のついた棚が、まるで地震の時のように小刻みに震えている。そして、ゆっくりと倒れかかっただろうとしているのだ。

椅子に座って志穂の方にはかり意識を向けている、リステスの頭部めがけて。

「……危ない！」

とっさに志穂は叫んだ。

リステスの反応は素早かった。振り返らずに椅子を蹴り倒して立ち上がり、その場から飛び退く。

傾いた棚は空っぽの椅子の足だけを押し潰し、かなり派手な音を響かせながら、彼の足元すれすれのところへ倒れた。リステスの反応がもう少し遅ければ、潰されていたのは彼自身だったろう。打ち所が悪ければ、死んでいたかもしれない。

(……あ……)

ちっと誰かの舌打ちが聞こえた気がした。

「殿下、何事ですか!？」

棚が倒れた音を聞きつけて、兵士が数人駆け付けてくる。

その後ろには侍女の死霊パーサも心配そうな顔で控えていた。

兵士たちに対し、棚を元に戻すことを命じると、リステスは何でもなかったような素振りで、作業の邪魔にならないようその場を離

れた。

彼は部屋を出てしばらく廊下を無言で歩いた後、

「……ああ、びっくりしたなあ」

と、今更のように胸に手を当てて息を吐いた。そして志穂に対し、にこりと微笑みかけた。

「ありがとう、シホ。君のお陰で下敷きにならずに済んだよ」

限りなく美しい、無邪気な子供のような笑顔。そこには率直な感謝の色がある。

とっさに彼女が感じた嫌悪は、リステスに対するものではない。それは紛れもなく自分自身に向けられた感情だった。

何故なら、志穂は思ってしまったからだ。

危ないと叫んだ後で、リステスが棚を避けて怪我なく無事だったのを見て。

何故彼を助けるような真似をしてしまったのかと、後悔してしまつた。あのまま押し潰されて死んでしまえば良かったのにと、ほんの一瞬であっても、少女の心は確かにそう思ってしまったのだ。

そんな彼女の内心も露知らず、笑顔を向けてくるリステスを直視できず、志穂は顔を背けた。

するとリステスは不思議そうに首を傾げる。

「どうしたの？ 分かった、照れてるんだね」

彼は上機嫌にそう決めつけると、ふと懐中を探ってそこから鍵束を取り出した。

「助けてくれたお礼に、礼拝堂の地下室と箱の鍵をあげるよ。やっぱり近付くのはお勧めしないけどね」

そう言つて、彼は鍵束の中から半分錆びた古鍵を二本選び、志穂に向かつて差し出す。

志穂は少し躊躇つた後、のろのろと手を出して二つの鍵を受け取つた。

リステスは鍵を渡すと、そのまま上機嫌で踵を返し、志穂の傍から去っていく。

その後ろ姿が少女の視界から消えた途端、唾を吐き捨てるような音がその場に響いた。

「けっ、余計な真似しやがって」

男の声にはつと顔を上げると、天井のあたりに赤茶けた髪 of 盗賊が浮いていた。

彼はあの嫌な薄笑いすら浮かべず、憎々しげに志穂を見下ろしている。

「テメエが声を上げなきゃ、奴は今頃柵の下敷きだったのによ。…

…王子様のお綺麗な顔に惚れでもしたか、このメスガキ」

辛辣にそう吐き捨て、盗賊の姿はふつと消えてしまう。

その様を、志穂はその場に突っ立ったまま、ただ呆然と見上げるしかなかった。

……鍵が床に落ちて跳ねるけたたましい音で、志穂は我に返った。気が逸れたせいで、鍵を取り落としてしまったらしい。

慌てて鍵を拾い直し、しっかりと握りしめる。

何はともあれ、せつかく鍵を手に入れたのだ。リステスの気が変わらないうちに、急いであの礼拝堂へ行き、箱から杖を取り返した方がいい。頭の冷静な部分はそう語りながら、一方で、今の到底平静とは言えない状態であの影の蛇のいる祭壇に近付くのはまずいとも告げている。

それでも、錆び付いた感触を手のひらに感じながら志穂は回廊へ降り、礼拝堂のある方へ向かおうとした。だがその歩みは遅々として進まない。

王子に惚れたかとロイは吐き捨てた。

それは違う。むしろ逆だ。

人の命を奪うことに対して何の良心の呵責も感じない、狂った価値観を持つ狂人。だが同時に彼は紛れもなく王子で、部下を信頼する騎士団長で、そして何より十六歳の少年なのだった。

志穂はそのことを知った。けれど。

それでも結局、自分はリステスが憎いのかもしれない。

自分で手を汚すのは嫌でも、ロイがリステスを殺してくれたなら、内心喜んで受け入れるのかもしれない。

それは少女にとって、軽蔑すべき、浅ましいことのように思えた。もしかしたら、自分自身の手で彼を殺して悪霊と化す道よりも、よほど。

「……シホか？」

城を彷徨う影たちは、あの祭壇で見た蛇は、船出しないまま自分をなくして怨念そのものと成り果てたモノだという。だが、彼らと志穂との間に、どれだけの違いがあるというのか。

例え喰われなくても、いつか自分も彼らのようになってしまいかもしれない。

記憶を失い、自我を失い、ただ怨念だけを残して彷徨う、彼らのような存在に。

「シホ」

ふと、誰かの手の感触を肩に感じた。

だが払いのける気力もない。ロイだろうか、バーサだろうか、それともあの騎士だろうか、いや彼に名乗った覚えはない などとぼんやり考えていると、

「シホ。大丈夫か？」

その低い声に聞き覚えがあることに、志穂はようやく気が付いた。はっとして見上げた先、そうして少女を見下ろすその顔にも、やはり見覚えがある。

血の気の引いたような白い肌。乱雑に切り揃えられた黒い髪。

紫の目が、少し心配そうに志穂を見つめている。ロイのように打算や悪意ではなく、バーサのように冷ややかでもなく、あの騎士のようにどこか突き放すような鋭い目でもない。そしてリステスのように、残酷で無邪気な身勝手さもない。

ごく当たり前のようにこちらを案じているその眼差しは、深い淀

みに足を取られかけていた心によって、何よりもの救いのように感じられた。

「……ラダ？」

「ああ」

淡々としたその短い答えすらも懐かしく感じる。

気付くと志穂は手を伸ばし、目の前の青年の服の裾にすがりついていた。

青年はやや戸惑ったようにしていたが、やがて遠慮がちに手を伸ばし、志穂の背中を幾度か優しく撫でた。いつかと同じように。

「すまない、シホ」

いつかと同じようにラダは言う。また子供扱いだ、と思ったが、そう扱われたって仕方ない。

しばらくしてから、ラダはやんわりと志穂を離れた。そして口元にかすかに笑みを浮かべて言った。

「無事で良かった」

「……うん。ラダも」

「俺は大丈夫だ。牢からはすぐに釈放されたし、この城でも上手くやっている」

見れば彼は、城で時々見かける下働きの人々と似たような作業服を着ていた。志穂がリステスに怯えたり、杖を探したりしている間、彼もまた杖を追ってこの城に忍び込んだのかもしれない。

だが、以前よりも少し痩せたように見えるのが少し気にかかった。肌が白いの元々だが、顔色が心なしか色白を通り越して土気色に近くなっている気もする。

「本当に？　なんだか……前より元気がなさそうに見えるよ」

「……心配はいらない。少し体調が悪いだけだ。この土地はどうも合わなくてな」

気候が合わないなら分かるが、土地が合わないということもあるのだろうか。だがそれなら、ラダはこの城に長居しない方がいいのかも知れない。

「そうだ。ラダ、あの、杖のことなんだけど……」
そこで肝心なことを思い出し、志穂は急いで元の持ち主に杖のことを告げようとした。杖さえ取り返せば、志穂もラダも、この城に留まる理由はなくなる。それに彼の力なら、あの祭壇にいる影の蛇についてもなんとかできるかもしれない。
だが、少しばかり遅かった。

「ふうん。その人、君の知り合いなの？」

血の気の引くような感覚とはまさにこのことだ。

志穂が青ざめた顔で振り返ると、リステスがそこにいた。回廊の柱に身を預け、見定めるような視線をこちらに向けている。

彼は志穂を見た後、その隣で険しい顔を浮かべるラダに目を留めて、

「思い出した。君、エテルベリにいたね。白い杖を持って、シホを追いかけてた。違う？」

と、謎を言い当てる子供のような口調で言う。

美しい顔に浮かぶその無邪気な微笑みは、やはり何よりも恐ろしかった。

*

……自分が生きていた頃のことを、バーサはもうよく思い出すことができない。自分が死んだその理由の詳細すらもう彼女の記憶にはなかった。

自分はリステスという名の王子に仕えていた。

自分はリステスを慕っていた。

自分は戦地へ旅立つリステスを見送り、彼が帰ってくるよりも前に死んだ。

バーサが覚えているのはただそれだけの事実だったが、彼女にと

つてはそれで十分だった。

彼女がこの城を彷徨う怨念の影たちと同じ存在にならなかったのは、ひとえに彼女の抱くこの世への執着が憎悪や怨念の類ではなく、またその思いが極めて偏執的なまでに強固だったからだろう。

そして リステスは帰ってきた。帰ってきたのだ、この城に。バーサは再び仕えるべき主を得た。

かくして忠実な侍女の死霊バーサは、今、城の中庭に立っている。うごめく影たちのことは、端からバーサの眼中にはない。

用があるのは大抵いつも中庭にいる、赤茶けた髪、狐のように目が吊り上がった青年だ。

「そう怖い顔すんなよ」

ロイは下卑た笑みを顔に貼り付けながら言った。

「あんなの、ちよつとした悪ふざけじゃねえか」

「運が悪ければ、殿下は死んでいたかもしれないですよ！」

非難の声は否応なしに跳ね上がる。バーサはロイをこれ以上ない冷たい目でロイを睨んだ。

「薄汚い盗人が我が物顔で殿下の城をうろつくばかりか、王子殿下の御身を害そうとするとは、不敬の極み。……これまでは見逃してきましたが、もはや我慢の限界です」

「ふん」

バーサの言葉にロイは動じない。鼻で笑い、

「殿下が死んだからって、何だっというんだ？」

と、平然と嘲った。

「オレたちは死んでもここにいます。なあ、そうだろ。なら、殿下が死んだって大したことはない。むしろアンタと同じ存在になって、ずっとアンタの傍にいてくれるかもしれないんだぜ？」

ロイの言葉は、バーサの心を揺らした。

彼女はその動揺を表に出すことはなかったが、ロイは目敏く見抜いたらしい。

「それにな。お説教で死人は殺せないんだぜ。……我慢の限界だっ

て？」

ふとロイの声が低くなる。

嫌な予感を覚えて、バーサはとっさに身を引こうとした。引こうとして、体が動かないことに気付いた。

はっとして見ると、彼女の足は既に形のぼやけた影の手に捕らえられていた。

彼女もこの城に暮らして長い。影の一つ一つの力はごく弱く、すぐに引き剥がせば済むことを知っている。

だが、バーサが影の拘束から逃れるよりも前に、盗賊の青年の姿が一瞬輪郭を失った。

「……そりゃあ、オレたちの台詞だよ。なあ？」

次の瞬間、バーサの体は深い闇の中に引きずり込まれていた。

短い悲鳴が女の口から漏れる。蛇のような姿をした濃い巨大な影が、実体のない女の体に食らいついていた。

痛みはない。

苦しみもなかった。

ただおそろしく深い怨念の中に、人の形も、長い時の中で歪んだ記憶も、変わらない思いも、すべてが溶かされていく。逃れようと足掻いても叶わず、そのうちに逃れようとする意思すら溶けてなくなる。

(リステス殿下)

彼女を彼女たらしめる執着への思いを最後に、バーサの意識はぶつりと途切れた。

「安心しろよ。王子様も、他の奴らも、すぐに同じように喰ってやるってさ」

人気のない中庭で、歪んだ笑みを浮かべる青年の呟きを聞くモノの中に、人の形を残した者はいなかった。

第十二話 死者と執着

リステスは笑っている。

無邪気に、楽しそうに笑っている。だが彼がその見惚れるような美しい笑顔のまま、何の躊躇もなく人を殺すことのできる人間だということを知り、志穂はよく知っていた。

「ねえ、シホ、知り合いなら紹介してよ。この人があの杖の持ち主なんじゃない？」

そう言いながら、リステスは志穂とラダの傍へ近付いてきた。

ラダを逃がさなきゃ、と思い、すぐにその考えを打ち消す。相手は王子で、騎士団長で城主で、一方ラダはこの城に潜り込んでいる身だ。下手に逃げても、兵士を呼ばればすぐに捕まってしまうかもしれない。

リステスだけではない。この城にはリステスの命令一つで人を殺せる人間も大勢いるのだ。

「ち……違う、よ。この人は……」

我ながら苦しいとは分かっていたが、志穂はどうか言い逃れようとした。

「さつき知り合ったばかりで……ほら、この城で働いてるって。

きつと、まだ仕事があるから、そんなに引き止めちゃ、悪い、よ」

「ああ、そうだね。僕の方から上役に話を通しておくよ。それなら仕事を放つても問題ないね」

間髪をいれずにそう返され、とっさに反論が思いつかず口をつぐんでしまう。

ラダはそんな少女をちらりと見下ろすと、自ら一步前へ進み出た。志穂を王子から庇うように。

「……俺は確かに彼女の知人ですし、エテルベリでも共にいました」
青年は感情を限りなく抑え込んだような、淡々とした声音で言った。

「やっぱり。名前は？」

「ラダ、です」

「ラダ。ねえ、君があのかの杖の元の持ち主なんだよね？」

リステスは世間話でもするような口調で訊いた。

「あの、竜の牙の杖の、さ」

思いがけないところから思いがけない単語が飛び出し、志穂は驚いた。

また、竜だ。

だが驚いたのは言われた当の青年も同様だった。彼は一瞬目を見開いた後、すぐに険しさを増した顔つきで少年を見据える。

「何故そうだと？」

「僕も王宮で色んな工芸品を見てきたからね。あれが何かの牙だったこと、でも象牙細工じゃないってことくらい分かるよ。それに、そう考えればつじつまが合うじゃないか」

リステスはそれ以上説明する気はないらしい。それで、と笑顔のまま促すようにラダを見返す。

「どうして君はあのかの杖を持っていたの？」

「……それを知って、王子殿下はどうしようというのですか」

言葉遣いだけなら丁寧語だったが、青年の声色はどんどん低く、冷たくなりつつある。志穂は下手に言葉を挟むこともできず、はらはらと二人のやりとりを見守った。

「別にどうもしないよ。あれはもう僕のだしね。ただ興味があるだけ」

「……あれは、母の形見です」

もはや凍り付いたように固く冷ややかなラダの言葉に、リステスはぱちぱちと瞬きをした。

「へえ。お母さんの形見なんだ。そっかあ……亡くなったの？」

「子供の頃の話です」

「僕の母上も、僕が幼い頃に亡くなったんだよ。昔は本当に綺麗な黒髪だったのに、今は白髪でね。時々姿を見せてくれるけど、話し

てはくれないんだ。この城はいいところだけど、母上に会えないのがたまに瑕だね」

そんな話を、彼は平然と世間話のように語る。死霊が見えるという彼の特性を知らなければ、意味不明な話だ。相手が死霊ではなく生きた人間でも、聞いてもいないことをぺらぺら喋るリステスの癖は同じらしい。

「お母さんの形見なら、やっぱり傍に置いておきたいよね？」

「……それは、無論」

「じゃ、従者にしてあげるから僕の近くにいいよ。部屋も用意してあげるから」

この話の流れから一体どうしてそういう結論になるのか、志穂にはよく理解できない。ラダも少し呆気に取られた様子で、リステスをまじまじと見つめていた。

「そうと決まれば、さあ、こっち」

当のリステスは気にした風もなく青年の腕を取ると、半ば強引に彼を城内へ引つ張っていった。

ラダは困惑顔だったが、断ったり、少年を振り払って逃げたりしようとはしなかった。

それもそうだろう、相手は王子なのである。志穂がどんなに冷たい態度を取ろうと、ロイがどんなにリステスの命を狙おうと、この城の兵士たちに捕まることはない。だがラダは違う。

（ラダは、私とは違う）

そう、もう死んでいる志穂と違い、ラダは生身の体を持つ青年なのだ。そのことに関して、志穂は今まで複雑な思いを抱いてきた。二人の間にある埋めがたい溝を感じてきた。だが。

（私はもう殺されない、けど、ラダは ）

まだ生きているということは、いつか殺されて死ぬかもしれないということでもあるのだ。

その当たり前の事実が、何故だかとても恐ろしかった。

「ここでちょっと待っていて。仕事を片付けてくるから」

城内の、リステスの部屋に程近い一室にラダを通すと、少年王子は彼を置いて一人去っていった。抜け目なく、部屋の外側から鍵をかけて。

侍従の控え部屋か何かなのだろうか。寝台、机、椅子、棚と家具は一通り揃っているし、水煙亭には及ばないまでも、ラダが旅の途中に泊まっていた汚い安宿よりは居心地が良さそうである。とはいえ、事実上の監禁だ。

ラダは疲れたようにため息を吐くと、木の椅子に腰掛けた。

「……王子リステスか。あれが」

「うん……」

「今まで大変だったな、シホ」

労るような言葉に対し、志穂は首を横に振った。

「ううん。本当は、こんなことになるより前に、私がリステスから杖を取り返せば良かったんだけど」

右往左往しているうちに、ラダまでリステスに囚われてしまった。そもそも志穂が回廊の真ん中でぼんやりしていたから、ラダも心配して話しかけてくれたのだろうし、志穂とラダが一緒に話しているのを見咎めなければ、監禁されるようなことにもならなかっただろう。そう考えると、自分の役立たずぶりに嫌気すらさしてくる。

「いや。杖のことにしても、今回のことにしても、俺が不注意だっただけだ。……シホ、先程何か言いかけていたが、杖がどこにあるか知っているのか？」

志穂は頷き、この城で今まで見聞きしたことを一通り語った。

礼拝堂の地下室に杖が隠されているらしいこと、祭壇と箱のこと、あの時見た影の蛇や騎士の忠告のこと。ただ、さすがにあのロイという盗賊の青年にリステスを殺すよう唆されたことだけは、語る気になれなかった。

話を聞いたラダは眉根を寄せた。

「……怨念の影の巢、か」

「地下室の鍵と、祭壇の上の箱の鍵はもう持つてるの。だから、リステスが嘘をついていなければ、私一人でも杖を取り返しに行くことはできるんだけど……」

鍵を返せとは、リステスは言わなかった。もしかしたら忘れているだけかもしれないが。

だから志穂の手にはまだ錆びた鍵が二本ある。

幸いこの部屋には、ごく小さい窓があった。そこから通れば、実体のある鍵を持ったまま部屋を抜け出すことも志穂には可能だ。

「駄目だ。そこに本当に怨念の毒蛇がいるなら、死者の魂にとつてこれほど危険な存在はない」

しかし、ラダは思いの外強い口調で志穂の提案を否定した。

「ただの悪霊よりもさらに始末が悪い。近付かない方がいい」

「でも……」

「あの王子は、今のところ俺たちに危害を加えるつもりはないようだ。大人しくしていれば、そのうち抜け出す機会も見つかるだろう。それに、彼が何を知り、何を考えているのか……」

そう言いかけて、ラダは途中で首を振った。

「いや。とにかく何もシホが危険を犯すことはない」

「生身のラダなら、あの蛇がいても大丈夫？」

そう問うと、ラダは一拍置いて、ああと頷いた。

その他にも、お互い別れていた時の動向や、この城について知っていることなど、細々とした情報交換をして話し合ったが、結局、杖を持って逃げる機会が来るまで様子を見る、という以上の方針は立たなかった。

無難な話題が尽きた後で、志穂はようやく、先程からずっと気になっていたことについて触れた。

「ねえ、ラダ。さっき……竜の牙の杖、って、リステスが言ってたけど……」

ああ、と応えるラダの声は、思ったよりも淡々としていた。

「あの杖は俺の一族に代々伝わるものだ。折れた竜の牙から作られたと言い伝えられている。無論、言い伝えの真偽は確かめようがない、が……実際に強い力が秘められているのは確かだ」

では、おそらくリステスは、何故かは知らないが初めからそのことを見抜いていて、あの杖を自分の物にしたのだ。あの物置で彼が杖を見た時の不可解な反応も、それで納得できる。もっとも、今のところ彼が杖の力を利用したりしているところは見ていないが。

志穂は少し躊躇った後で、こう訊ねた。

「……牙があつて、鱗があつて。でも、竜の本体は、もうどこにもいないの？」

「分からない」

青年は静かに首を振った。

「少なくとも、俺はこの目で竜を見たという人間と出会ったことがない。どんな異国に行っても、竜は伝承の中の存在でしかなかった」

「でも、ラダは、竜を探しているんでしょう？」

そう訊ねると、ラダは少し驚いたように眉を跳ね上げたが、すぐに表情を和らげて頷いた。ケル婆が志穂のいた前で口にした言葉を思い出したのだろう。

「そうだ。俺は、竜を探して旅をしている。だが今のところ、何の成果も上がってはいない」

そう言つて、ラダは何か苦いものを感じたように眉根を寄せ、唇の端を歪めた。

「……そうか。俺は、そんなことすらきちんと話してはいなかったんだな」

「え？」

「竜のことだ」

そう言つて、けれどもラダはすぐに言葉を続けようとはしない。

悔やむような、躊躇うような、自嘲するような色が彼の紫の目の表面に浮かんでは消える。

だから志穂も真つ向から問い質すことは躊躇われた。

あるいは、予感があつたからかもしれない。幾度も耳にするその言葉は、志穂があえて知りたくないと言を背けていたことに関わっているかもしれない。

「……じゃあ、杖の力って？」

代わりに志穂は、当たり障りのないことを口にした。

「杖の力は……すなわち死者を運ぶ竜の船としての力」

竜。幾度も耳にしたその言葉を胸の内側で繰り返す。

その言葉、その存在は、リスネスにとって何なのだろう。ラダにとって、何なのだろう。

「つまり、死者の魂、実体のないもの、理から外れた存在に対して干渉する力だ。俺の死霊術士としての力の多くは、あの杖の賜物と
いっていい」

「……そうなの？」

「そうだ」

だから、とラダは真剣な顔をして志穂を見つめた。

「その地下の祭壇とやらだけではなく、城内の怨念の溜まり場にもなるべく近付かないでくれ。もしシホがあればに引き込まれてしまつても、ろくな術も使えない今の俺では、シホを助けられるかどうか分からない」

志穂がこくりと頷いたのを確認すると、ラダは椅子から立ち上がった。

「すまない。少し休む」

そう言つて、部屋の寝台の上に身を横たえ、目を閉じる。

志穂は寝台の傍に佇み、血の気の失せた顔を見下ろした。身じろぎもせず静かに眠る青年の眉はわずかにしかめられたままで、やはり以前より具合が悪そうだ。

「……ラダ」

ぼつりとそう呟くと、

「何だ？」

すぐに返事をされ、志穂は驚くと同時に思い出した。そういえば

この青年は眠りが浅い性質なのだ。

「う、ううん。具合が悪そうだから、大丈夫かなって……」

「俺は大したことはない。むしろ、シホの方が心配だ」

「私？ 私は大丈夫だよ。ちゃんと喋りつければ守るから」

「そうじゃない。あの時、俺が話しかける前、シホは何か思い悩んでいたように見えた」

ラダは目を閉じて寝台に横たわったまま、静かな口調で指摘した。とっさに顔を伏せる。それは、あまり触れられたくない、自分の醜い感情に関することだ。

けれども同時に、そうやって心配されたことが嬉しくもあった。

しばらく黙り込んだ後、志穂は躊躇いがちに口を開いた。具合が悪そうなる青年を休ませないまま会話を続けるのは気が引けたが、今を逃せば、後で自分から聞く勇氣は出ないだろうと思ったのだ。

「ラダは……あの山で殺された人たちの霊を、みんな船出させたんだよね？」

「……ああ。そうだ」

「じゃあ、あの人たちは……山の民は、船出せずに死霊として留まりたいとは思わなかったのかな。みんな、痛くて、苦しんだはずなのに……その恨みを、誰かにぶつけようとはしなかったのかな」
悪霊と化したカレンのように。リステスを殺そうとするロイのように。

そして今の志穂のように、恨みと憎しみに惑うことはなかったのだろうか。

いや、少なくとも、船出させられることを頑迷に拒否した者はいなかったのだろう。だからきつとラダも、あの時当然のように志穂を同じところへ行かせようとしたのだろうから。

ラダはすぐには答えなかった。

彼は無表情でしばらく沈黙を置いてから、やがて重々しく口を開いた。

「……騎士団が憎い、アーフェルが許せないと叫ぶ者は多かった。

俺も説得するのに苦労した。だがそれでも彼らは最終的には、死霊として残るのではなく、恨みを捨てて沖つ国へ船出することを選んだ」

「どうして、そんな選択ができたの？」

「結局のところ、それが世界と、自身の魂にとっても最善のことなのだ」と、彼らは知っていたからだ。彷徨う死者の魂とその怨念は、世界の理を歪ませる。山の民も皆、幼い頃から教え込まれてきたはずだ」

そこでラダは薄く目を開き、部屋の天井を いや、どこか遠く別のところを見つめた。

「……愛も憎悪も、魂を惑わせる執着心の一つ。憎んではならない。愛に固執してはならない。この世に一度生まれ出た者は、いつか来る自身の死を受け入れなければならない。死者が正しく沖つ国へ行き、大いなる巡りの輪の中へ還ることで、世界は正しく流れ続けるのだから」

その淡々とした言葉は、まるで経文や道德の文句のように空々しく、志穂の耳を通り抜けていった。

実際、それは正しく経文だったのかもしれない。山の民、そしてラダにとつての。

「それが、教え？」

「そうだ」

「死んだ人は、執着を生む感情なんか捨てて、さっさと船出するのが世のため自分のためってこと？」

「……端的に言えば、そういうことだな」

「そんなの」

すべてを忘れて天国に行った方が幸せなのだとしても、それが正論なのだとしても、どうにもならないのが人の感情というものではないか。山の民は本当に、その教えを律儀に守って沖つ国へと旅立ったというのだろうか。到底、志穂には納得がいなかった。

殺された恨み。リステスへの憎しみ。

自身の中で渦巻くそれをすべて捨てることなど、今の志穂には到底できそうにないのに。

志穂として存在することへの執着を捨てることなど、できそうにないのに。

「教えは、正しく守るべきものだ。でなければ伝えられることはない」

「……ラダは、どうなの？ ラダがもしあそこで巻き添えに殺されていたら」

恨みを捨てて、騎士団の所業を許して、大人しく船出する道を選んだのだろうか。

口にしてしまってから、仮定にしても失礼な問いかもしれないと気付いたが、口に出したものは今更撤回できない。志穂は勢い込んでそのまま続けた。

「それとも誰か、心から好きな人が、殺されてたら……」

例え家族や恋人であっても、愛も執着だと切り捨て、彼は船出させようとするのだろうか。一度は志穂やジェフを船出させようとしたように、それが世のため人のため、自身のためだと言って。

「……俺にはもう、そういう存在はいない。今後も現れることはないだろう」

「どうして。だって、ラダはまだ生きてるのに」

問い詰めるように、彼の紫色の目をまっすぐに見つめる。

するとラダは、一瞬気まずそうに目を逸らした。

だがすぐに感情の窺い知れない目で志穂を見返し、先程と同じく淡々と唇を動かした。

「俺も昔から、教えられてきた。いらぬ執着は魂を不幸にするだけだ。死霊は理から外れた哀れな存在であり、だからこの力で死者たちを船出させてやることは正しいことなのだ、信じてきた。無論、この身が死滅すれば、そのときは他人の手を煩わすことなく沖つ国へ行こう、と……」

これまで数多くの霊を送ってきたのだろう、死霊術士の青年の声

が少しだけ震える。

「だが……そうだな。俺は……きっと山の民ほど潔くはない。いくら、使命や責務と言葉を並べ立てても、所詮……」

そこまで呟いたところで、彼ははつと口をつぐみ、青ざめた顔で口元を抑えた。そうして寝台の上で体を折り曲げ、何度か咳き込みはじめる。

「ラダ？　だ、大丈夫？」

慌てて声をかけたが、黒髪を乱した青年は口元を抑えたまま、返事をする余裕もないのか苦しそうに顔を歪めている。何か吐く容器を持ってきた方がいいだろうかと頭を巡らしたとき、ふと志穂は、寝台の足元に何かがつこめいていることに気が付いた。

それは紛れもなく、城内を彷徨う影たちだった。

その影のひとつが輪郭の曖昧な手を伸ばし、寝台の上、そしてそこに横たわる青年の足元へと少しずつ這い上がっていく。青年のくるぶしの辺りに影の手が触れようとしたとき、

「駄目！」

ほとんど反射的に、志穂は影めがけて自身の手を振り下ろした。

もし影に実体があれば、ぴしゃりと景気のいい音が響いただろう。だがどうやら、この影の体は霊体よりもさらに曖昧らしい。振り下ろした手は影の体をすり抜けて、寝台の表面をしたたかに叩いた。

ばん、と存外派手な音が響き、ラダに近付こうとしていた影が霧散する。

青年が驚いたように起き上がった。彼は幾度か目を瞬かせた後、口元から手を離して志穂を見た。

「今のは……」

「か、影が、いたの」

短い説明を聞いて、ラダは険しい顔になった。寝台から降りて、ついさっきまで苦しんでいたことを忘れたように部屋の中を見回す。寝台の下にも部屋の中にももう影がないことを確かめると、彼はため息をついて寝台に腰掛けた。そして黒髪をくしゃりと掻き回す。

「参ったな。気付かなかった。それに思った以上に影響が強い……いや、強くなっている、のか」

「あれのせいなの？ 土地が合わなくて体調が悪い、って……」
リステスや他の住人たちが平然とした顔で過ごしているから、てつきり生者への影響力はないものと思っていた。それともラダが死霊術士だからなのだろうか。

「そう、だな。だが、今は大分楽になった」

「本当？」

「ああ。シホが影を追い払ってくれたせいかもしれない。ありがとう」

そう言っただラダは微笑んだ。久しぶりに見たその表情は、やはり優しげで温かかった。

翌日以降、リステスは頻繁にラダを連れ回すようになった。

移動可能範囲に限りのある志穂は、二人の後をいつまでも追いつくことはできないが、後でラダに話を聞いたところによると、王子直属の侍従たちと引き合わされたりしたという。

どうやらリステスは本気でラダを傍に置くつもりらしい。

先日まで厨房の下働きをしていた青年が、いきなり王子の従者になろうというのだから、周りの反応が芳しいものであるはずがない。ラダは特に従者として仕事を与えられるわけでもなく、ひたすら傍に控えさせられて脈絡のないリステスの話を聞かされているだけだ。そうだから、尚更だ。

とはいえ当の王子が王子なので、やはり表立っては誰も何も言わないようだ。

「……裏では何を言われているのか、想像するのも恐ろしいがな」
疲れたようにそう呟いたラダの耳に、心ない陰口が届かないように志穂は祈った。先程廊下の隅で使用人たちが噂していた話を聞いたところ、ついに王子が幽霊に飽きてその手の趣味に目覚めたとか、

いやあれは実はお抱えの霊媒師で、二人して怪しげな霊と語り合ったり儀式をしているんだとか、他にも勝手なことを散々に言われていたからだ。

昼間はそんな調子でリステスとその周囲に半ば見張られ、夜には部屋の前に見張りつき。当然鍵もかけられる。これでは到底、逃げようがなかった。

無論、志穂もそれを黙って眺めていたわけではない。どうにか彼を監視の目からかくくぐらせる手立てはないか探っていたし、リステスに抗議もした。だがすべて無駄に終わった。

「ラダをどうするつもりなの？」

そう詰問した少女に対し、リステスは心底不思議そうに首を傾げたものだ。

「どうって？ 僕は彼を雇っただけだよ」

「だって、ラダは従者になるって言ったわけじゃないのに……」

「彼は元々この城で働いてたんだから、城主の僕が部署を変えたくて構わないんじゃないかな。それに厨房の下働きより、僕の従者の方がずっと楽で俸給の高い仕事だと思うけどなあ」

「……そ、それはそうかもしれないけど、夜はほとんど監禁じゃ……」

「……」

「見張りはね、彼のためだよ。いじめられるといけないからね」

一見親切そうな言葉だが、ラダを他の人々にいじめられるかもしれないような立場に追いやったのは、そもそもリステス自身だろう。

「だからって」

「ねえ、それより、バーサを見なかった？」

尚も抗議しようとした志穂の言葉を無造作に遮って、リステスはまったく別の話題を持ち出した。

志穂が首を横に振ると、リステスは珍しく困ったようにため息を吐いた。

「おかしいなあ。ここ数日、城のどこにも見当たらないんだ。いつもは呼べばすぐに来てくれるんだけど」

としばらく首を捻った後で、彼はあっさりと肩をすくめた。

「まあ、いいや。シホ、バーサを見かけたら、僕が呼んでたって伝えておいてね」

志穂は不承不承頷いた。けれども、彼女が狭い行動範囲内でいくらうつろいついても、もうあの侍女の死霊が様子を見に来ることはなかった。

第十三話 竜殺し、人殺し

その頃、見えないものを見る力を持つ人間は今ほどには少なくなかった。

だから彼も、彼の主も、それを目にする事ができた。

それはまさしく船のように巨大な存在だった。

角の生えた蜥蜴のような、固い鱗を持つ蛇のような異形の姿。

船を漕ぎ進める櫂のように連なる幾枚もの翼は、少し蝙蝠に似ている。

空の青の中でその翼がゆっくりと羽ばたく度、奇妙に心を揺らす音が鳴った。

風の強い日に湖面がさざめく時の音だと、彼は思った。水が流れ、飛沫を上げ、さざなみとなって打ち寄せる音だと。

長くうねる胴や尾は、均整のとれた体躯とは言い難い。けれどもその存在は、確かに美しかった。

ただ美しく、空に舞っていた。

迎えが来たわ、と姉が言う。とうとう海のかなたへ行く時が来たのだと。

さようなら、ギイ。さようなら、ヴィル。どうかあの子をお願いね……。

そうして姉は地上を去り、美しき竜の船に乗り込む。姉を背に迎えた竜は、その翼を優雅に羽ばたかせて西の空へと頭を向けた。

待ってくれ、と彼の主が伸ばした手も届かない。

これが定めなのだ、彼は肩を落としながらも顔を上げて姉を見送る。

竜の船が去っていく。ざあ……と鳴る音が遠ざかっていく。

大陸の西の果てには海があり、海のかなたには死者の国があるという。ならば、この音はきっと、そこで鳴り響く波の音なのだろう。

生きた身には遙か遠い、海のかなたの波の音なのだろう。

目覚めた時、志穂は今自分がどこに立っているのか一瞬分かんなかった。

必要もない瞬きを数度し、きよろきよろと辺りを見回し、寝台や机や椅子のある小さなその部屋がどこであるかをようやく思い出した。

しかし、部屋に黒髪の青年の姿は見当たらない。小窓から差し込む陽の光の明るさを見ると、もうリステスの元に呼ばれている時刻なのだろう。随分寝坊をしてしまったようだ。

軽く目を瞑り、壁をすり抜けて部屋の外に出ながら、志穂は目覚める前に確かに見ていたものが何だったか思い出そうとした。

死霊が真つ当に夢を見ることはないという。なら、自分は何を見ていたのか。

とても美しいものを見ていた気もするし、悲しい別れを目の当たりにしていたような気もする。

あるいはまた誰かの記憶を垣間見たのかもしれない。

だがどうしても、何を見ていたのかはつきりとは思い出せなかった。

内心首を捻りながら進む通路の隅には、相変わらず影がうごめいている。それらを見ないように視線を逸らした先、角のところに覚えのある後ろ姿がちらりと見えた。剣や兜や盾で武装したその姿は見間違えようがない。だが、彼は声をかける間もなく角の向こうに消えてしまった。

リステスの部屋へ行くと、机の前に座って本を眺めている金髪の王子と、その傍に控えるラダを見つけることができた。黒髪の青年は薄汚れた旅装束や作業服ではなく、城の従者のお仕着せを着ている。仕立ては良さそうだが、あまり似合っていない。

まったくの無表情で立っている彼に対し、リステスはこんなこと

を訊ねていた。

「君は聖ユオルの伝承について、どれだけのことを知ってる？」

その問いに対し、ラダはほんのわずかに眉を動かしたようだった。「教会の司祭の説教や、旅の詩人が歌う程度の話なら」

「どんな内容？」

「……金の髪の毛の若き英雄が、青き瞳の姫と恋に落ちた。だが邪悪なる竜によって二人は引き裂かれた。攫われた姫を取り戻すため、英雄は試練に耐えてついに神に力を授かり、竜を討ち滅ぼした。かくして二人は再会し、英雄は王となって、アーフェルの礎を築いた……と」

ラダは情感に欠けた口調で淡々と語った。

「ふうん。まあ、そんな感じだよな」

それを聞く方も極めて無感動な様子で頬杖をつき、もう片方の手で机の上に広げた本の頁をぱらぱらとめくっている。その革張りの装丁の豪華さは、ブレニー子爵の屋敷の書齋にあった、財産の一つに数えられるほど貴重だという書物と比べても遜色がない。

壁をすり抜けて出たところがちょうど死角だったので、二人はまだ志穂が部屋に入ってきたことに気付いていないようだ。志穂はしばらくそのまま二人の話に耳を傾けることにした。

「それが僕のご先祖様、建国の英雄、初代国王ギイ・ユオルとその妃リラなんだってさ。知ってるよね？」

「はい」

無造作にめくられるやや黄みがかった頁の表面には、鮮やかな彩色を施した挿絵が頻繁に登場するようだ。角の生えた怪物や、馬に乗った若い騎士たち、美しい姫に精悍な戦士、そんな挿絵がどのような物語のために描かれたものなのかは志穂でも分かる。

「じゃあこれも知ってる？ 聖ユオルが今の王都リラの地で竜を討ち滅ぼすより前に、彼は一度、竜に挑んで失敗したことがあるって」
「……神の試練に挑む直前の下りですか。五百人の戦士と共に挑んでも歯が立たず、姫の兄弟も為す術なく命を落とす激戦の末、かる

うじて生き延びた王は人の無力を痛感したという」

「そうそう。その時、人が竜に与えられた痛手はほんのわずか、王が手にできたのは姫ではなく竜の鱗が一枚分だけだった。彼が列聖された後、その鱗も聖遺物とされるようになって、色んな教会を転々とした末に、この礼拝堂の地下に保管されることになった……」

金の髪と青い瞳の少年は、そこでふと本を閉じてラダを見上げた。「どうしてここなんだと思う？」

「……聖ユオル騎士団の拠点だからでは？」

「それもあるけどね。一番の理由は、ここが聖ユオルと竜の一度目の戦いの舞台だったからだよ」

ラダは、少なくとも驚いた顔はしなかった。貼り付けたような無表情のまま、けれどもしつかりとリステスの話に耳を澄ましているように見える。竜を探す彼にとって、竜退治の英雄の末裔とされる王子の話は興味深いものなかもしれない。

「何故か世間じゃ、聖ユオルに仕えた騎士の居城だったところで、彼の名を冠した城だったことは言われても、一度目の戦いの舞台だったことはほとんど語られないけどね」

明朗な声で話しながら、リステスもまた青年の反応を観察するように目を細めた。

「よっぽど格好悪い戦いだったのかな？ どう思う？」

「……古の真実は、その時代に生きた人々の記憶の中にのみ存在すると思います」

ラダは回りくどい言い方でリステスの質問をかわした。

(その時代に生きた人々……)

竜を見たことがある、と言っていた男性のことをふと思い出す。

彼はアーフェルの建国期に生きた人物だという。なら、彼が見た竜とは、その聖ユオルが戦った竜なのだろうか。あるいは、聖ユオルと竜との一度目の戦いとやらに参加した一人なのかもしれない。

その戦いの最中で彼が命を落としたのなら、彼が死んだ後にも一度竜を見た、という言葉にも矛盾しない。

「あはは、そうだね。でも」

その時、部屋の外から入室の許可を求める声が聞こえた。リステスが言いかけていた言葉を打ち切ってそれに応じると、侍従の男が入ってきた。彼は一瞬ちらりとラダに視線を向けてから、恭しい態度で王子に近付き、小声で何事が伝えた。

最初のうちは穏やかに話を聞いていたリステスは、やがて不思議そうに眉をひそめた。

「王都から？ 珍しいね」

「は。使者のグレアム卿は明後日にもご到着の予定だとのことで」「じゃ、適当に出迎えの用意をしておいて」

至極どうでもよさそうに言うと、彼は話題を変えた。

「それよりダグラスの部隊はいつ帰ってくるんだっけ？」

聞いたことのない名前だが、先日盗賊退治を命じられていた傷跡だらけの顔の男のことかもしれない。

「……本日の昼過ぎ、遅くとも夕刻には帰還するそうです」

「ああ、そうだった。報告によれば任務は大成功だったらしいし、ちゃんと出迎えてあげないとね」

にこにここと笑う王子を前に、侍従の男は無言で一礼した。

結局、志穂はラダたちに気付かれないうちにそつと部屋を去った。もし霊の見えない第三者がいる前でいつものようにリステスに話しかけられたら、下手をするとラダにまで気まずい思いをさせる可能性がある。

部屋から移動する途中、やはりあの侍女の姿を見ることはなかった。毎日志穂の様子を見に来ていた時が嘘のように、彼女は行方なくらましてしまっている。

あれから見かけないのはバーサだけではなく、ロイも同じだった。こちらは、志穂をリステスを殺す手駒としては使えないと見切ったのかもしれない。彼のよくいた中庭を通りかかっても、赤茶けた

髪青年は姿を現さなかつたし、話しかけてもこなかつた。

だからこの城で志穂と話せる死霊は、もうあの騎士だけだ。

まだ名前も聞いていない騎士の死霊は、どうやら志穂と違って、この城内ならどこでも出没できるらしい。だがあの礼拝堂は彼の好みの場所らしく、通りがかりに中を覗き込むと、半々くらいの確率で壁画を見上げる騎士の姿を発見することができた。

倒れ伏す竜、ひれ伏す民衆たち、そして見つめ合う若い男女。入り口から差し込む光に照らされたその絵の表面をよく見れば、大分薄汚れている上、ところどころ塗料が掠れたり剥げたりしている。それでも騎士は飽きることなく壁画を見つげ続けているようだった。まるで、過ぎ去った時代を追憶するように。

ぼんやりと壁画を見上げていた騎士は、近寄ってくる少女に気付いた途端、表情を引き締めた。

「また来たのか、娘。地下には行かぬ方がよいぞ」

「祭壇には近付きません。……貰った鍵が本物かどうか、地下室の入り口の鉄格子だけでも開けて確かめた方がいいかもしれない思っただんですけど、それでも駄目ですか？」

ふと思いついてそう訊ねると、騎士はしばらく考える素振りを見せた。そして、

「見た方が早かるうな」

と呟くと、踵を返して奥の祭壇の方へ向かい、その陰にある隠し扉のところまで志穂を促すように見た。一緒に地下室に行ってくれるということだろう。騎士の示した親切に感謝して、志穂は彼の後についていった。

地下室へ続く隠し階段に足を踏み入れた途端、志穂は違和感を覚えた。

明かりのない、暗く狭い石段が地下へと続いている。それはいい。死霊が階段から足を踏み外しても問題はないし、その気になって目をこらせば明かりのない夜の闇に沈むものをはっきりと捉えることもできるのだと、志穂は薄々気付いている。

だが、闇の向こう　階段を下りきつたその先にわだかまるものは、きつとただの闇ではない。

騎士は無言で階段を下りていき、志穂はそのすぐ後に続く。前方の騎士の兜や鎖帷子がいくら動き、金属と金属が触れ合っているように見えても、決して耳障りな音が鳴ることはなかった。

そうして辿り着いた階段の終点に鉄格子の扉がある。

騎士はその手前で立ち止まり、志穂に道を譲った。

リステスにもらった鍵が半分錆び付いていたように、扉の鍵穴も錆色がかっていた。だが、そこへ差し込んだ鍵は何の問題もなく回り、軋む音と共に扉が開いた。リステスは嘘をついていなかったようだ。

地下室は狭い。扉を潜って少し歩けば、すぐに部屋の中央に行き当たるはずだった。円形状の祭壇と、その上に安置された石の箱のあるところに。その中には志穂の依代であり、ラダの母の形見である竜の牙の杖があるはずだ。

しかしいくら地下室の内部に目をこらしても、祭壇や箱どころか、地下室の三方を囲む石壁すら視認できなかった。夜の闇とは異質な濃い闇の色をした霧のようなものが地下室いっぱい漂い、それらを覆い隠していたのだ。

もはや形すら判別できないほど広がり横たわる霧。

しかしそれはあの時見た蛇と同じものだと、志穂は直感した。

だから彼女は、鉄格子の境界の向こうへ一歩を踏み出すことができなかった。

「そなたが今の在りようのままでもいいのなら、それ以上先には進まぬことだ」

重苦しく言って、騎士は兜を被った頭を動かし、鋭い目つきで地下室の闇を一瞥した。

「……近頃のこの城はおかしい。怨念の影は色濃く、数を増し、至るところでうごめいておる。ましてやその巣穴たるあの祭壇、この地下室に巣くう蛇の瘴気の濃さは、見ての通りだ」

「どうして、こんな……？」

「分からぬ。だが、あの祭壇に……封印された古井戸に収まりきれぬほど、ここに集う怨念が増大していることは確かだ」

形のない霧のような闇は、時折、息づくように身じろぎをした。そして城内を彷徨うあの影たちが何かを求めて手を伸ばすように、濃い霧が鉄格子の傍まで不意に押し寄せてきた。

志穂はぎくりとして後ずさり、鉄格子の傍から身を離れた。

「ここも安全とは言えぬ。さあ、分かったら戻るのだ」

騎士の冷静な声に促され、地下室に背を向ける。

一度だけちらりと振り返ってみたが、濃い闇の霧は消えずにそこにある。名残惜しさを封じ込め、志穂は来た道を戻りはじめた。階段を登りはじめていくらしないうちに、

同じなくせに。

不意に聞こえた声に驚き、志穂は思わず足を止めた。

澄まし顔して、気に入らねえよな。

見回しても騎士以外の人影はない。だが騎士が何か言ったわけでもないようだった。そもそも、嘲笑うようなこの声は騎士の声色とはまるで違う。むしろ。

「どうした」

立ち止まってしまった少女を怪訝に思ってたか、先に行く騎士がこちらを振り返る。そして、その青い目がはっとしたように見開かれた。

「娘！ 離れ」

背中から何か覆い被さってきた。と思った瞬間、少女の意識は断絶した。

灰色のヴィルフオート城では、今日も怨念の影が彷徨っている。

その曖昧な影たちの色が、以前よりも濃いように見えるのは決して気のせいではなく、ましてやどんよりと曇った今日の天気の様子ではないと、青年は気付いている。気付いていながら、彼にはどうすることもできない。

自分の無力を噛みしめながら、日に日にひどくなる吐き気や目眩を堪えながら、ただこうして金髪の王子の傍に黙って控えていることしかできなかった。

「王宮に？」

その王子が不思議そうに呟いた声が、客人を迎える広間に響いた。彼の視線の先にいるのは、かなり太った中年男だった。ゆったりした絹の服も突き出た腹をごまかせてはいない。無論、それなりの地位を持つ者なら相応に肥え太っていてもおかしくないが、彫像のように完璧な容姿を持ち、引き締まった体躯の少年とこうして相対しているところを見ると、男の不格好さが否応なく周囲に強調されてしまう。

グレアム卿というらしいその貴族の男について、リステスはこう形容していた。曰く、父上の腰巾着で、王宮でのあだ名は豚。少年の声に悪意はなかったが、彼がこの男について微塵の好意も関心も持っていないこともまた確かだった。

「珍しいね。そっちから戻れって言ってくるなんて」

わざわざ王都から使者としてやってきたこの男の用件とは、王子リステスに対し、騎士団の業務から一時離れて王宮に戻るよう通達する国王の命令を伝えるものだった。

書状やただの伝令ではなく、王の腰巾着と呼ばれるような貴族の男を使者に立てるあたり、王都の方では確実に王子を呼び戻すべき重大な理由があるらしい。あるいは、このグレアム卿が、使い走りをさせる程度の役にしか立たない男だと見られているのかもしれない。

いが。

「は。これは内密の話なのですが、実は陛下のご容態が芳しくないとのことで」

男はいかにも沈痛そうな表情を作って肥えた顔に浮かべている。

しかし低められた声の端々には、その内密の話を知り、こうして王子に知らせるといふ役目まで仰せつかっている自分自身に対する自尊心が滲み出ている。

「ああ、そうなんだ」

だが当のリステスは、父の病の知らせをその一言で片付けた。

「分かった。ちょうど王宮へ戻ろうと思つてたところだから」

「では」

「うん。処刑が終わつたらさっそく出立の準備をさせるよ」

唐突に物騒な言葉が出てきたので、グレアムは困惑したように目を瞬かせた。つぶらな、と表現できなくもない小さな目がきよろりと動く様は、彼の太った体も合わせて、確かに子豚に似ているかもしれなかった。

「この間、部下に盗賊退治をさせてね。一昨日捕虜を連れて帰ってきたんだけど、すぐに全部喋っちゃつてもう聞き出すこともないみたいだから、さっさと処刑する予定なんだ」

「は、はあ……それは結構なことだ」

「そうだ、せっかくだから立ち会つといいよ。今日の午後、中庭で執行するから。僕はよく分からないけど、こういうのってみんな好きなんだろっ？」

この辺りではそうでもないが、公開処刑が娯楽の一つに数えられる地域はアーフェル国内でも未だあちこちに見られる。しかし当のグレアムには嬉々として人の死を眺める慣習はなく、かといって王子を前にして断る勇氣もないようだ。

「はい、よ、喜んで……」

と彼は額に脂汗を滲ませながら、引きつった笑みを浮かべた。

わざとやっているのなら、リステスは相当の強者だ。わざとでな

くても、ある意味強者だが。

王子の傍に黙って控えているだけが仕事のラダに、彼らの話に口を挟むことはできないし、元よりその気も必要もない。

無表情で突っ立ったまま、ラダは別のことを考えていた。

盗賊退治に出かけていた騎士団の一隊が帰ってきたのが一昨日のこと。つまり志穂がラダの前に姿を見せなくなってから、今日で三日目になるのだという事実について。

一日目、つまり一昨日の朝。

ラダは志穂よりも早く起き、おそらくはまだ眠っているであろう彼女を置いて部屋を出た。

おそらくというのは、死霊が『眠って』いる間、その存在は極めて薄くなり、ラダのような死霊術士の目をもつても極めて認識しがたくなるからだ。

しかしその日から、ラダは黒髪の少女の姿を見ていない。

とうとう信用をなくして見捨てられたか、という自虐的な考えも過ぎった。しかし彼女が自力で依代の杖を取り戻さない限り、この城から出ることはできないはずだ。なら彼女はどこへ行ったのか。

そもそも、時と鼓動を刻む肉体を失って長くこの世に留まる死霊たちは、必ずしも生者と同じ時間の感覚を保ち続けられるわけではない。ラダが以前出会った者の中には、自覚なく何十年と眠り続けていた者もいた。

志穂は死霊となってまだ日が浅い少女だとはいえ、生者と同じように一日の朝に目覚め、夜に眠る必要性はどこにもないのだから、数日ばかり眠り続けていたとしてもおかしいことではない。そして、一日の終わりの夜に必ずラダの元へ帰ってくる必要性もどこにもないのだ。

あまり心配せずとも、そのうち、ひょっこりとラダの前に顔を出してくれるかもしれない。

だが、何か不測の事態が彼女の身に起こったという可能性も考えられるのだ。

それでもラダには周囲の目を盗んで彼女を捜しに行くことは難しく、杖のない今、力を使うことも叶わない。

グレアムとの会談が終わると、リステスはラダを伴って広間を出た。

床のあたりにうごめく影を容赦なく踏み潰し、通路を迷いのない足取りで進みながら、彼はふと呟いた。

「バーサがいらないと思ったら、シホも最近見なくてつまらないなあ。ねえ、ラダ、君が隠してるんじゃないよね？」

「……いいえ」

否定の声に少しばかり力が入ったのは、内心の葛藤の表れかもしれないなかった。

*

気付くと、志穂は暗闇の中にいた。

暗闇、としか言いようがない。目を凝らしても何の光も見えず、足元も覚束ない空間だ。そのくせ少女自身の手足や黒いセーラー服は、暗闇に紛れることなく輪郭まではっきりと見えた。

何度か瞬きをしたり、きよろきよろと辺りを見回しているうちに、段々記憶が蘇ってきた。礼拝堂の地下に続く階段を登っていた途中、後ろから覆い被さってきた何かの方に引きずり込まれたのだ。

「娘。気付いたか」

低い声のした方を振り仰ぐと、兜を被った騎士が立っているのがやはりはつきりと見えた。顎髭をたくわえた口元は厳しげに引き結ばれ、青い目が少女を見下ろしている。

「ここは……」

「怨念の影の中。蛇の体内。……あるいは、実体と霊体、地下と地上の境に生まれた異空間かもしれぬ。少なくとも……彼奴らの領域ではあるだろう」

曖昧な言葉の意味は理解しがたかったが、志穂は半ばぼかんとし

て騎士を見上げた。

怨念の影に近付くな、危険だとはこの騎士が言ったことである。迂闊に近寄れば喰われ、そして奴らの一部と成り果てるだろう、とそれにラダにも強い言葉で警告を受けた。だが、今のところ志穂は五体満足　というのもおかしいが、少なくとも自身に何か異常が起きたようには感じられない。

「でも、私、無事で……」

「牙にかかることなく、一息に呑み込まれたことが幸いしたのだらう」

怪物に呑まれながら生還した昔話のいくつかが脳裏に浮かんで消える。そういうものなのかと納得しかけて、ぞっとした。つまり一つ間違えれば、牙に引き裂かれて細々にされていたかもしれないのだ。

「しかし、このままここに留まっていれば、いずれは何もかも溶かされるだろうな。そうなる前に、出口を見つけ出した方がよからう。ここと外とに流れる時間が同一とも限らぬ」

いつもの突き放したような口調で騎士は言った。今回は彼も呑まれた側であることを考えると、他人事のような口ぶりだ。志穂は少し眉をひそめたが何も言わなかった。

とりあえず彼の言葉に従い、志穂は手探りで先へ進もうとした。目印もなく方向の判別も付きにくい闇の中、適当な方へ足を向けようとする。

(……あれ)

だがその意思に反し、手足はほとんど動こうとしなかった。まるで全身が泥沼に浸かってでもいるかのように強い抵抗があり、のろのろとしか前へ進まないのだ。

「この」

あらん限りの力と意思を込めると、前進を妨げる抵抗が少し弱まった。

それでも水中でもがく時のようなもどかしさは変わらない。必死

に前へ足を運んでいると、不意に、その足に何かが当たった感触がした。眉をひそめて視線を落とし、志穂ははつと息を呑んだ。

「……ああ、そうか……」

志穂の背後で騎士の呟いた言葉が暗闇に響いた。

「ここは、井戸の底なのだな……」

何故今の今まで見えなかったのだろう。

少女の足元には、おびただしい数の白い骨が散らばっていた。

背骨や腰骨、手足の骨。鎖骨や肋骨、肩胛骨。ありとあらゆる種類の骨の間に、大小様々な頭蓋骨がいくつも転がっていて、この骨の主が獣ではなく紛れもない人間であり、なおかつその数は十人や二十人どころではないことを物語っていた。

深く色濃い暗闇の中、散らばり積み上げられた白い人骨はまるで海のように。

土に還ることなく死んだ者たちの海だ。

「う……」

それ以上進むこともできずに立ち尽くした志穂の視界がぐらりと揺れた。

暗闇ではなく白い骨の海でもない光景が、カレンやロイの記憶を読み取った時と同じように眼前に浮かんでは消えていく。

それらもまた、死者の記憶だった。

一つ一つは短く、断片的な記憶。そのほとんどすべてが、血と悲鳴に彩られた惨劇だった。

数え切れないほど多くの人間が無惨に殺されていった。誰一人として死を望む者はいなかったのに、誰一人として救いの手を与えられる者はなかった。

彼らは殺された。

殺されて、打ち捨てられて、弔われることすらなかったのだ。

その恨みが彼らを捕らえ、やがて彼ら自身をも溶かしていった。

長い長い時を経て、彼らは人であった頃の自分をなくした。親も

兄弟も恋人も伴侶も子のことも忘れた。思い出などとうの昔に擦り切れて砕けてしまった。彼らを殺したその張本人、憎悪の対象たるべきその人物が誰であったかすら、もう思い出せない。

それでも彼らは恨んでいる。憎んでいる。嘆いている。

この世のすべてを、呪っている。

「怨念の……」

視界に浮かんでは消え、ちらついたり離れない光景を無理矢理振り払うように、志穂は声を絞り出した。

「影の……蛇の、その元は何なんでしょうか」

問いかけた先には、空間の抵抗を物ともしない様子で進み来た騎士がいる。騎士という言葉に相応しい精悍な顔で、厳格な表情を浮かべて志穂の傍に佇みながら、白い骨の海を見つめている。

「昔、この土地で大勢殺されたって、聞きました。……殺された人たちは井戸に投げ込まれて埋められた、って」

「……それは真実だ。この骨が何よりの証」

「じゃあ、どうしてそんなことに……？」

仮にもここは城だ。何か 志穂には想像も付かない激しい戦いでもあったのだろうか。

騎士は首を振って否定した。

「ならば彼らにはあれほどの恨みを残すことはなかっただろう。戦場に身を置く者は常に死を傍に感じているのだから。彼らはただ殺されたのだ。無為に」

青い目の奥に、これまで見たことのない光が灯る。

「村人もいれば罪人もいた。だがおよそ死という罰を受けるには程遠い五百人を、王は殺したのだ。 竜を誘き寄せるそのためだけに」

静かな騎士の声に潜む、かすかな、紛れもない憤り。

その鮮烈な感情が再び少女の目を眩ませる。

何故です、王よ！

誰かが叫んでいる。全身全霊をかけて、必死に何かを訴えかけているような声だ。

姉は、彼女はそのような愚行を望んではない。それが何故、分からぬのですか……！

ずるずると鎖で引きずられる音。

鞭の音。

悲鳴も聞こえる。怨嗟の声だ。

理不尽に死に行くその身を、恨み呪う声の群れ。

これも殺せ、とまた違う誰かが言った。

はっと気付いたとき、志穂は騎士の腕の中にいた。

ざらついた帷子の感触に、一瞬よろけたところを騎士の片腕で受け止められたのだと気付く。

志穂が体勢を整えるのを待って、騎士は声の一つもかけずに少女から離れた。ラダとはまた違う愛想に欠けるその堅苦しい顎髭の顔を、志穂は視線で追いかける。

今見たものは、もしかして、彼の記憶の一部だったのだろうか。

「……その……王の名前は？」

薄々答えの分かっている問いかけを、あえて志穂は口にした。

騎士の記憶の中、冷たい声で殺せと命令を下していた男は、まるで輝く月の光のような見事な金髪をしていた。

青い目の騎士は静かに答えた。

「ギイ・ユオル。……かつて我が剣を捧げし王」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1350x/>

沖つ国と竜の船

2012年1月8日02時50分発行